
夢を叶えて・・・きっといつか

森北miro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢を叶えて・・・きつといつか

【Nコード】

N3470T

【作者名】

森北mirro

【あらすじ】

お互い思いあっていた・・・と思う。でも笑は怜勇の夢の為に距離を置こうと高校卒業と同時に恋する思いを告げずに「さよなら」を言う。

怜勇はプロゴルファーとして、ある決意を胸に。笑は普通のOLとして心に怜勇を思う気持ち秘めながら過ごしていく。離れる前から再会まで。そして再会してからの幼馴染二人の甘辛ラブストーリー

登場人物紹介（前書き）

初めての投稿です。妄想恋愛を小説にしてみました。しりめつれつになってるかも知れませんが、暖かく見守ってください。完結を目指しますが亀更新になるかもしれません。

登場人物紹介

登場人物

星野 ホシノ 笑 エミ …… もつすぐ23歳のエクボが素敵な平凡なOL。

怜勇とは幼馴染

海藤 カイドウ 怜勇 レイオ …… 23歳の今をときめく長身イケメンプロゴル

ファー

桜木 サクラキ 凜 リン …… 笑の会社の同僚で親友。

名前のとおり凜としている

しっかり者。怜勇の大ファンである。

海藤 カイドウ 爽 サヤカ …… 怜勇の妹。快とは双子
海藤 カイドウ 快 コイロ …… 怜勇の弟。爽とは双子

藤見 フジミ 新 アラタ …… 自称 凜の彼氏

翠川 ミドリカワ 基虎 キトラ …… 新の同僚。秘かに笑に思いを寄せている。

山村 ヤマムラ 愁月 シュウキ …… 笑と怜勇の共通の友達・幼馴染

ブローグと中学時代

「さよなら・・・またいつか」

あなたの夢が叶うまで・・・

涙をこらえて、得意の笑顔で明るく言った。

あれから何年たったたる

私はもうすぐ23歳。

あなたは一足先に23歳になってるね。

メディアであなたを見るたびに、あの日の事を思い出す。

ほんとに、いつかがあるのだろうか・・・

~~~~~

怜勇 愁月 私（星野 笑）は家が近所で小さい頃から公園で遊んでいた幼馴染。

小学校の頃は私の方が背も高かったのに、今では二人を見上げて話すぐらいに背が伸びた。

怜勇も愁月もスポーツ万能・成績優秀・容姿端麗。

校内のモテ男ナンバーワン・ツーだ。

どどん置いてけぼりをくらってる感がいっぱい私・・・

容姿端麗は努力ではどうにもならないので諦めた。

スポーツは努力でなんとかなるとクラブのテニスをがんばった。愁はバスケットで県選抜選手。怜勇は陸上で短距離選手で常に名前が上位に出る。

がんばってる私のテニスの成績は・・・ベスト8が関の山。

勉強は怜勇と愁に負けず劣らずの成績を残した。

一緒の高校に行くために・・・

私は二人についていく為、必死だった。

なのに二人はいつも飄々としていた。神様は不公平だと常に思っていた。

それでも、同級生の女の子達には羨ましがられていた。

学校の往復も三人一緒だし、普通に話せる事が羨ましいのだそうだ。怜勇も愁もよく告白されている。

今は二人とも「誰とも付き合う気がない」と断っているらしい。なぜ、「付き合わないのか」と聞けば、二人は口をそろえて「今は、三人でいるのがいい。彼女を作ると笑のナイトが出来ない」と言う。

私より綺麗でスタイルのいい女の子にいっぱいコクられてるのにもつたいない話だよ。まったく。

県内一の進学校如月高校の合格が決まった。

また三人一緒の高校生活が始まる・・・。

怜勇は全国トップ5級のゴルフ部に入部すると言う。5歳から続けているゴルフ。プロゴルファーになる夢に近づくために。

愁は県大会常勝クラブ、中学から続けているバスケット部に入ると言う。  
先輩にも誘われてるからと。

私は……どうしよう。何も無い。二人みたいに思うものが何もな  
い……。

ただ三人でいつまでも一緒にいたかっただけ。それしかない……。  
高校になって何かを探そう！

## プロローグと中学時代（後書き）

次は高校編です。

高校では三人の他に中学から一緒に進学してきた澪も登場です。  
怜勇の双子の妹弟もいよいよ登場です。

## 高校時代

如月高生になった。

入学式当日早々、怜勇はゴルフ部に愁月はバスケット部に入部した。好きな事や夢に向かって進んでいる二人は、どんどん先に進んでいる。

今までは必ず

「笑はどうする?」

「こっしょうと思うけど、いい?じゃ笑はこっすれば?」  
っていつも気にかけてくれていたのに。

成長とともに、相談や声かけは少なくなっていた……。

「漣。帰ろ!」

隣のクラスの漣の所へ行き、声をかえた。

「OK!ちよ、待って」

クラスメートとの雑談を終えてやってきた。

「海藤君と山村君でもてるよね。さっきも他中から来た子にいろいろ聞かれてさ」

「ふーん。目立つもんね。二人とも」

「笑さ。幼馴染じゃん?みんな言ってたよ。羨ましいって。ドキドキもせず、普通に話せるのが。って」

「……だってオムツしてた頃から知ってたよ。はあく。二人があんなになっちゃうなんて……」

思ってもなかったよ。ずるいよ。二人だけあんなヒーローみたくなってる……」

「私だけ、超普通じゃん……」

「ずるいよ」

最後のずるいよは、余りに小さな声で漣には聞こえなかっただろう。暗い顔になりかけたので、気持ちを切り替えて漣に聞いてみた。

「ね。ね。漣もさ。やっぱ。どっちか好きだったりする？漣は幼馴染じゃないけど、同中じゃん？中学 ン時からとか……。ないの？」とニヒヒ顔で聞く

「えー。私？全然。どっちもパス！美形に優秀！しかも性格まで二重丸なんて……。パスパス。」

「すごいな。とは思うけど、そこどまりね。憧れにもほど遠いよ。

神様？いやあ宇宙人？みたいな域 ね。」

少し間が開き、漣が赤い顔で

「私は、下村君……が…… す き」  
って言いました。今言いましたよね。

「う・うそ！漣と下村君じゃあ 美女と野獣じゃん……」

言ってしまった。ごめんなさい。

だって、漣は怜勇と愁の女版。綺麗で優秀みんなのマドンナですよ。確かに下村君は、豪快でやさしくて面白くてクラスのムードメーカーでいい人です。でもあまりにギャップありすぎでない？  
そうです。マドンナが選んではだめです。

世の男性は、あなたに憧れてきつとマドンナは、怜勇や愁みたいな超超王子男性が好みなんだと・・・釣り合うのだと・・・

勝手に思い込んで無駄かもしれない努力をしている男性が山ほどいると私は思います。

不憫じゃないですか・・・努力している男性が。

せめてマドンナの彼氏を見て『やっぱり・・・か』と、納得できる人ではないかとダメではないか！私は心で叫びました。しかし、えてしてこんなものでしょうか。恋と言つてもは・・・。

ため息交じりに、漣を横目で見つめながら、後は、クラブをどうするかとか。今日は家に帰ってどうするかとか・・・たわいもない話をしながら電車で帰りました。

ホラホラ、漣分かります？

世の男性のあなたを見つめる熱い視線。

その隣にいるのが野獣さん・・・付き合う事になるだろうか？下村君と漣は。私は下村君の良さいっぱい知ってって、お似合いの二人だと思っけど、世間の目は冷たいんだらうな・・・

私と怜勇を見る目のように・・・。

何度、嫌な思いをしただらう・・・

その度に、『関係ない関係ない！ただの幼馴染です。』とプルプル頭を振って言い聞かせたことか・・・

「幼馴染っていいよね。あんな顔でも隣にいれるんだから・・・フフ」

高校になって今ではそんな言葉もよく耳にする。

同中だった友達や漣なんかは

「気にするんじゃないよ！笑かわいいよ！えくぼの出来る笑顔なん

「て天下無敵だよ」  
「って言ってくれるけど・・・」  
「そんな励まし言ってくれても・・・自分が一番わかるもん。」  
「もう、そろそろ隣の席は空けなくっちゃって。」

「じゃ、バイバイ。又明日」

最寄の駅で東と西に別れ、トボトボと一人家路に向かって歩き出した。  
また。

空が春だというのに、どんより暗い・・・。  
私の心をうつしてるとのだろうか・・・

「あー！やだやだ！どうした？私！」

よし！前を向いて胸張ってトボトボではなく、テクテク歩き出した。

赤いレンガ造りの大きな家、怜勇の家の前で怜勇の部屋を見上げて立ち止まった。

『最近きてないなあ。三人でよく遊んでたのに。また来れるかな？テスト勉強教えてもらえば来れるかな！・・・』

「笑、俺今日もクラブだから・・・じゃ」

「あ、そーだ。お前も何か入れよ。もうすぐ体験入部あるだろ。ゴルフ部も体験しろよ。な」

「じゃ、行くわ」

怜勇は嬉しそうに駆け出して行った。怜勇の夢への足がかり・・・

中学の時からアマチュアで大会に出たり、中学生大会で何度も優勝

したりと活躍はしていた。

メディアにもちよくちよく登場していた。あのルックスなもんで、巷に私設ファンクラブが在るといふ噂も耳にした。高校在学中にもプロへ転向するのではないか・・・とも。

幼馴染として、一番近かった存在がどんどん遠い存在になっていく気がして、日々距離を感じている。

まだ義務教育だった頃はそれでもなんとか必死で怜勇についていった。

距離をあけられまいとして。

でも、もう限界かもしれない・・・。

自分の気持ちに気付いたから。

必死で怜勇と愁についてスポーツも勉強もがんばれたのは、いつも三人でいたかったからじゃない。

それは、たんなる言い訳だったと気付いたから。

私は怜勇に自分の存在を忘れてほしくなかったからがんばった。いつも見ていて欲しかったから、付いていった。がんばった。

それは、私が怜勇を好きだから・・・。

いつまで隠し通せるかな、

この思い・・・。

気付かせては絶対だめだ・・・

夢のため・・・



## まだまだ 高校時代

「わー。」「待ってよ」

「さーや、早くおいでよ！ かーさん。さーやが遅いよ 呼んでよ 早く！って」

.....

「あっ！」

「あっ！」

声が重なった。

「快くん。」

「笑ネエ。」

またまた声が重なった。

『久しぶりだな。どこ行くんだろ.....』

「これ、これ、快。あんた早いのはいいけど、そそっかしいねえ。忘れもんですよ。」

.....

.....あら、笑ちゃん。久しぶりね。学校の帰り？早いわね。

あっ、爽・快二人とも気をつけて行ってらっしゃい」

「こんにちわ。おばさん。お元気ですか？  
まだクラブ決めてなくて……。なんかダラダラ過ごしてま  
す。あはは……」

「怜勇も愁も入学式の当日からクラブ入って、がんばってますよね

「 にっこり

「しかも、二人ともびっくりするほどの人気者で……。最近、近  
寄りがたくって……

少しでも、話していると女の子達の格好の餌食ですよ……。アハハ」

「そうなの？最近、朝早く出て行くし、夜も遅くなって帰ってくる  
し、帰ってくる、ほらお父さんと イーストゴルフに練習に行く  
でしょ。私と話す機会なくてね〜」。

「高校生活の話や愁君や笑ちゃんの話も聞きたいのに、全く聞けな  
くて、少し寂しいわ……

「男の子って、大きくなると、せいが無いわ……」

「アハハ。元気ですよ。相変わらず二人して王子してますよ。大丈  
夫よおばさん。何かあったら私が教 えてあげます。笑におまかせ

「 ニコニコ とピース。」

「あ、待って。快君 爽ちゃん待って。どこ行くの？笑の家の方に  
行くの？」

「うん。プールだよ。」

「じゃ、笑と笑ん家まで一緒に行こうか。

「じゃ、

おばさん。また」 ペコ

『うふふ。相変わらずかわいいなあ。もう小学校2年生になったのかあ。はやいよなあ。7年前怜勇が

大喜びしてたよな。妹と弟がいつぺんに出来るんだ！って。産まれた日は学校終わってすぐ三人で病院へ行ったもんなあ。一生懸命真っ赤になって泣いていたの思い出す。クスッ』

「ねー。笑ネエ。あんまり家にこなくなったね・・・サヤ寂しいよ・・・」

「俺も・・・。愁ニイもこないし。怜勇ニイはゴルフばっかで忙しいし。ねえ 笑ネエまた遊びに来て よ。ゲームしよ。俺、テニスうまくなったよ。たぶん笑ネエに勝つな へへん」

「なにー。よく言った。よし今度勝負してやるよ。うーん。よし、今度の金曜日の夜勝負だ」

「わーい。やったね。ココ」

「よっしゃー。約束ゲットだぜい」

「OK! じゃ、ここで。バイバイ。 車気をつけるんだよー

ーーーー」

金曜日か・・・。よっしゃ。気分転換だ。

私は私。だめだな、このままじゃ。私らしくない！  
何をっじゃうじゃ考えてんだか・・・。

えーい。やめた。やめた。

私の名前は？

笑<sup>エミ</sup>

笑うの笑<sup>エミ</sup>

いつでも笑顔！だろ！うんうん。

笑！FIGHT！

明日、クラブ見学に行こう。

写真部 ゴルフ部 新聞部 バトミントン部。あとは・・・バスケット部のバスケット姿見に行こう。

この中で入る部決めよう・・・。  
なんか、ワクワクしてきたぞう。

ただいまー！ー！ー！。

まだまだ 高校時代（後書き）

まだまだ、高校生の笑達三人。  
もう少しこのままで・・・。

高校時代 少し進んだよ(前書き)

笑は笑らしく、自分の夢を追う

## 高校時代 少し進んだよ

さーて、入部体験へ行くか。

「澪も体験行くの？何クラブ？」

「私？家庭科クラブ！笑もどう？」

「へ？家庭科・・・む 無理ー！」

「あ、そうだね。笑の家庭科・・・て」

「みなまで言うな。澪・・・って事で別々だね。終わる時間も違うだろから今日は帰りも別々と言う事で、 　また明日 　バーイー」  
「バーイー」

と、さてどこから行くかなあ。

まずは第一希望のあそこだね

と、次は・・・

と、次・・・ゴルフクラブか・・・

やめよかな行くの。入部する気ないしなあ。でも怜勇に体験は行くわって約束したしなあ。と考えているまについてしまった。ゴルフ部の練習場についた。

『え？え？何何 この人だから・・・もしかしてみな体験？』

「きゃー」「怜勇くーん」「ほらほら 　あそこよ」

なにやらあちこちそんな声が聞こえる。

なるほど・・・ファンクラブか・・・怜勇の。まだ入って間もないの

にこれですかぁ……。  
ため息をつきながらキョロキョロしてると。  
怜勇大変……。。

「あ、君　君　君も応援ならあっちね。ここは危ないから」

「あ、あ、いえ　体験に来たんですけど……。。」

「あ　そうなの。ごめんごめん　女子の入部希望少なくて……。現  
部員も」

「じゃ、こっちこっち。僕は一応このキャプテンの古閑。よろし  
く」

「あ。私星野です。よろしくお願いします。」

「はい。これ使って」

「で、こう握って。こう持つ。そしてこう振る」

「で、ここにボールを置いて、あ、ちょっと離れて　そして」

スパーン

「ナイシヨツ！」

「こんな感じ　どう？」

「さすがですね」

「はい。じゃどうぞ」とボールを置いてくれた。

「空振りになっても気にしないで。　　どんどん振ってみて」

「はい」

スパーン　　スパーン　　スパーン

「え？　ええええ？」　振り返り

「君、経験者だったの？失礼しました……。。」

「いえいえすみません。こちらこそ、言いそびれちゃって」  
「これはいい。入部してよ。現部員の女子二人も喜ぶよ！心強いっ  
て」

「は〜」

ゲゲゲ　くるな　くるなー

「よっ！来たな」

「うん？怜勇・おまえら知り合い？」

「幼馴染つす。こんな小さい時からの」ニッ

「そつかあ。じゃますます都合いいじゃん。怜勇からも入部誘って  
くれよ！」

怜勇が無言で首を傾けて　どう？みたいな顔してる。

「……。いや・すみません。まだ他にも考えてるクラブがある  
もんで」

「来週早々にはご返事させてもらいます　すみません。」

ペコと頭をバタバタとその場を走り去った。

ゴルフクラブ一番ないんだけど。私、あのクラブにほぼ心決まってるし……。

さ、さ　後はもう一人の学校の王子、愁を見に行こう！

次は、応援女子として（笑）



高校時代 決意（前書き）

笑は新聞部員として怜勇を見ることに決めました。

高校時代 決意

きやー  
きやー

愁月くーーーん

ハハハ。やはりここもすごい人ばかり。私も見学……  
うわー。見えるかなあ。

うわ。ぎゅぎゅ。やばい つぶれる……。  
はあ はあ あいてて。 うーん あ あそこ行こう。

ふー。すごいな。

愁……かつこいい。ほんとかつこいいよ。  
うっわー。まんがのヒーローみたい。 「ナイシュ」

幼馴染の二人が二人とも学校の王子ってどうよ。

なんか、出来すぎでない？

なんか 差を感じるんですが……

うっ。イカンイカン。またまたマイナスモードに入ってしまった……

私は私。あいつ達に負けないものがヒトツある。笑顔 笑顔 絶対  
自信の笑顔。

それと。エクボ。自分自身も大好きなえくぼ！ よっしやー  
ガッツ 立ち直り！

そして。

私は決めたぞ。

新聞クラブ。写真部とどっちにするか悩んだけど、新聞クラブにする事にした。

怜勇と愁の記事と写真をいっぱい書いて、二人を応援しながら写真がとれる！一石二鳥じゃん。

来週早々入部届けをだそう。今週は後2日。ゆっくりしよう。遷とお茶したり出来るのもクラブ入ったりしたらお互い難しくなるだろうし。エンジョイするぞ。高校生活。イエーイ。

「おー。ナイシュ」

「愁ーイケー」 「あーんもう！愁！こらー！しっかりしろー」  
ザワザワ・・・

「え？ あは あは小さく・・・」

愁・・・君のファンも怖いです・・・

幼馴染。単なる幼馴染と公言してください・・・

今、針のむしる状態です・・・

さ・寒い・・・

助けて~~~~

## 高校時代 それぞれの・・・

ふん ふふん

「漣、一緒かえろう」

と、声を掛けて、待つてる間に外をみると・・・

なんですかあ？あれは・・・

走つてにげてる？長身の王子・・・

それに戯れようとする・・・

我校の愁月王子様ファンクラブ軍団・・・

すぎよい、きよわい きよわすぎる・・・

愁・・・ご愁傷様・・・アーメン

ドド ドドドドドド・・・ドドド

うん？今度はあつちに砂けむり・・・？

いや、し・静かです・・・

しかし、なんとも近寄れない空気が・・・

あー！。こっちは、こちらでも我校の長身の王子・・・

怜勇王子様ファンクラブと当人ですか。しかし こちらはわきまえ

たもので、怜勇を筆頭に1mほど

あけて、軍団がついて行ってます。が、が、です。すごい長蛇の列

になってますが・・・

非常に迷惑ではないでしょうか？あつちの反対側に行きたい人が困

ってますよ。

ザザーツ

わ、潮がひいた・・・。

わ、真ん中を通らしていただいております。

すごい。やっぱり紳士のスポーツの代名詞のゴルフをしている怜勇のファンクラブ・・・

なんか、違うねえ。怜勇が言ってるのだろうか？それとも皆様自ら・・・？

あつはつは。おもしろいね。なんか二人のキャラが出てるといっか・・・

おもしろい。おもしろい。

愁は、ひとなつっこくて。やさしくて。誰とでもフレンドリーで。だから、あんな追いかけてごっこみたいな感じになるんだろうね。

怜勇は、別に気取ってるわけでもないけど、物静かで、冷静沈着。周りに友達いつもいるけどワイワイ騒ぐタイプではなく、クールに聞き役？みたいな感じだもんね。だから、距離をおいてゆっくり付いて行くって感じになるのか。

たしかに幼馴染の私でも、愁には今でも気軽に話せるけど、怜勇は「うっ。」て一歩引いちゃう感じになるもんね。なんかオーラが違うんだよ。優等生すぎるんだよ。・・・ふーっ。

「待った？ちよと 笑。何ニヤニヤしてんの。」

「え？ ああ。外見で見て。ほら。おもしろいっしょ？」

「ほんと。我校の二大王子か・・・」

「そ。なんか。ファン層がちがって。おもしろくて笑ってた。」

などと、いろいろ二人が話しながら、階段を降りて中庭にでると、校舎の影から膝からしたの足が見える・・・。どうも寝転んでいる男のようで・・・二人は顔を見合わせて

「なに？」 と同時につぶやいた。

そっと覗いてみると・・・

そこには、息を切らした

「愁！」 「山村君・・・」

「しっ！ やつと逃げきつたんだから・・・。」

「めずらし。愁でも。逃げたい時があるんだ。あははははは」

「あのなあ・・・俺でも。たまには静かに物思いにふけりたい時があるわけよ」

「あはは 明日は嵐だね」

「バカ言うなよ。はあく。笑 帰るのか？お前、クラブ決めたのか？」

「うん。決めたよ。新聞クラブ。来週から入部します。ハイ」敬礼ポーズ。

「は？新聞クラブ？なんでまた・・・。全然イメージじゃないんですが・・・。姫？」

「そう？高校では、のんびりしたくて・・・運動部はやめたの。でもジツとばかりかしてるのも退屈で似合わないし、自分がもたないから、新聞クラブだと、ほら取材いたりとかであっちこち行くじゃん。ちょうどいいくらいのペースかなと思って。」

「だから愁も気をつけてね。私。試合速報の取材やいろいろするけど・・・。フォーカスもするからね」ニッ

「へー。おお、いいかもな。俺の試合かっこよくリポートしろよ。」うんうん。ニコニコ。

「あつ！それより怜勇は知ってるのか？あいつ。笑とまたクラブだけでも、一緒にゴルフ出来たらいいなあ。って言ってたぞ」

「・・・。うん。体験は行くって言って。行ったけど・・・。まだ、新聞クラブにしたって言えてない。」・・・。怜勇、期待しちゃうたんだろつか・・・。私入部するって・・・。散々、キャプテンって人にも入部勧められたしな・・・。はあく。

「でもちやんと、今度会ったら言うよー。」

「それと、愁!? 二人の取材が目的で、新聞クラブにしたんだからね。だから愁も私がいい取材できるくらい活躍しないとだめなんだよ! わかってる?」

「もちろん! まっ、俺はいつでもヒーローインタビューだけどね」  
ウインク!

ははは・・・さすが王子様。

「じゃ、バイバイ」

「おう」「澪ちゃんもバイバイ」

「さすがの山村君もこう毎日、あれじゃあ疲れるんだ。あははは」  
「ははは。ほんと。愁、誰にでも愛想いいからなあ。本命な彼女出来た時、苦労するよ。彼女。もしかしたら愁もしんどくなるかもねえ。愁と怜勇、ほんと正反対だから・・・。あれで気が合うからねえ」

クスッ

「ささ。早く。21のドーナツとミスアイスクリームのダブルアイス食べに行こう」

「よっしゃー。いこ」

校門に向かって走り出した私達・・・。

ゲツ。キキーツ。 とととと

澪と顔を見合わせて

「すごいね。これも我が校の二大王子様目当て?」

「だろね・・・」 ガクリ。うんざり・・・

「ね。あなた達、ここの子でしょ。怜勇様、まだ学校にいた?」

「愁君は？」

「ねー。教えて」

ペラ ペラ……

漣！行くよ！ダッシュ！GO！

はあ、はあ、はあ。 ふうーっ。

「「いえーい！さすが。陸上部からスカウトされた漣に元テニス部  
エースの笑！」」 ハイタッチ。  
わはははは（笑）

## 高校時代 夢は・・・

昨日は楽しかったなあ。溇とアフター授業！また行きたいけど・・・  
・  
来週からのアフターはクラブだもんね。

さ、今日はさっさと帰って、爽快達と遊ぶ約束してた日だから、怜  
勇ん家にいなくなっちゃ。

溇は今日はクラブの方に用事があるらしいから、しかたない一人で  
帰るか・・・

相変わらず体育館入り口は混雑してるね〜。

ゴルフ練習場はここからじゃ見えないけど、観客席いっぱいなんだ  
ろうねえ。

などとブツブツ言いながらも、帰ってからの爽快達とのWIIIIII  
Iのテニス対決は負けられない！と作戦を考えながら家路に向かう  
笑であった。

「ただいまあ」

バタバタ ドタンバタン

「おかえり・・・。 笑！うるさい！もっと静かに」

「行つてきまーす」

「・・・は？ どこに？」

「怜勇ん家！ 爽快達とこないだ約束したからあ」

『バタン！』

『ピンポン』

『ガチャ』

「わー。笑ネエ。早かったね。どうぞ」

「あら、笑ちゃん。いらっしやい。ごめんね。爽快達の遊び相手でしよ」

「いーえ。私が遊んでもらうんです。でもね、いくらゲームとはいえ、テニスで勝負を挑まれたんで負 けられない！んで。」ニツ  
「うふふ。変わらないわね。負けず嫌い・・・」

「あーおばさん。うるさくしたらごめんなさい」

「はい。はい。少ししたらおやつ持ってあがるわね」 ニツ

「よーし。こい」

「快！がんばってー」

「笑ネエ、負けないぜ」

「望むところよ」

「えい」「こつちよ ほい」「えい」

「それー」「これでどーだ」

.....

「ふー。疲れた。なかなかやるわね。ゲームだけどなかなか、侮れないね。このゲーム。」

結構、本格的だね。まっ、本当のテニスではまだまだ負けられないよ。快はゴルフじゃなくて、テニスプレイヤーになりたいの？」

「うん。俺、ずっと笑ネエ見てて応援しててやり始めたたる、それでテレビでみたウィンブルドン決勝 戦！がめっちゃかっこよく

て・・・」

「そっかあ。笑も懂れたよ」

「やめちゃったの？テニスプレイヤー・・・」

「うん。ていうか。違う夢をみつけたの」

「ふーん。初耳だな。どんなゆめだよ。テニスプレイヤーの夢はなんとなく、違うようになったんだろ。うとは、思ってたけどな。

聞かせろよ。お前の夢・・・」

ホラ と、爽快にジューズとおやつを手渡しています。あのあのおばさんは？たしかおばさんが持つてくるはずでは？・・・

「怜勇ニイお帰りー」。」

怜勇大好きなサーヤが抱きついてジャンプしています。

まあ。怜勇も尻尻を下げて抱き上げてます。

うふふ。

つて。ど・・・どうしよ・・・。

なんか、とつてもいっぱい聞かれそうな気がするんですが・・・。

「ちよつとー爽快！もうそろそろプールの時間ですよー」

と階下からおばさんの呼び声が・・・。

えっ？

ニッ！

「後で、ゆっくり聞かせてもらおうか・・・いろいろな。最近あまり話してねーし。」

「今日、笑が来るとは思ってたぜ」

「あっ！母さん！俺と笑と一緒に爽快達送っていくよ」

えっ？えっ？なんで・・・？



高校時代 思い(前書き)

更新遅れてすみません

## 高校時代 思い

今、怜勇はさーやと、私は快と手を繋いでプールに向っています。

ほんと怜勇とこうして歩くの久しぶりだな……。

生まれたときからずっと近所で親同士も仲良く、となりにいるのが普通だったのに、いつからだろ、少しづつ一緒にいる時間が減って、隣にいるのも普通じゃなくなってる……。

「なあ、笑。」

「久しぶりだな。こういう時間持つの……」

「うん……。」

「たまには、またこういう時間、つくろうぜ。」

「さ、ついたぞ！爽快。しっかり泳いでこいよ」 ぽん ぽん。

と怜勇が二人の頭をたたいて、励ましている。

「ココ、またテニスのゲームしよーね。あ、リアルテニスでもいいよ。さーや、今度一緒に笑とお買い物 行こ。じゃ二人ともがんばってね。ココ達帰った時は、笑もういないかもだけど」

『ばいばい』

二人を送った後、しばらく無言だったけど、なんとなく隣にいる怜勇にドキドキしてた。爽快達がいなくなって余計に……。いつからだろう。怜勇の事こんな風に意識しだしたのは……。愁月といってもこんな感じにならないのに……。きつと私……。怜勇の事が……。

『えっ！……』

怜勇の大きな手が私の右手を握ってきた。

『うそ・・・』ドキドキして、心臓がとまりそうだよ。

「笑。俺。2年になつたらプロ登録しようと思ってる。学校にもあまり来れなくなるかも・・・」

お前が、ゴルフクラブに入ってくれてたら、プロになるのは卒業まで待つてたかもな。俺には夢がある だろ。アメリカのメジャーで優勝する事！全米かマスターズ。笑とこの学校に男女団体優勝を持ち帰る のが、高校時代の夢だったけど、なぜかお前が新聞クラブなんかに入つたから、叶わなくなつただろ。

なら、俺の小さな頃からの夢を叶える為、少しでも早くプロになつて、全米かマスターズ優勝の夢を叶

えたいんだ。そして、それが俺のその先にあるもうひとつの夢を叶るためでもあるんだ」

「もうひとつの夢？」

「そ。誰にも言つてない。大事な大事な夢。俺がアメリカメジャーで優勝した時にお前に教えてやるよ。 一番に」

「一番に？」

「そ。お前、俺をリポートする為に、新聞クラブに入つたんだろ？」  
「でも、高校卒業してからの優勝だったらどうすんのよ？リポート出来ないじゃん。・・・」

ん？そつか。私、レポーターか新聞記者になるよ。進路、決めたよし。サンキュー。怜勇。だから怜 勇、あんたもしっかり活躍してよね。後、愁にも言わなきゃ。愁にも活躍してよね って。怜勇も愁も

幸せよね。専属レポーターがもう決まっただんだよ」

それから、大きな暖かい手に繋がれたまま、時々会話をしながら家までの道を歩いて帰って行った。

怜勇は気づかなかつただろうか・・・

プロになってしまうと、今のように幼馴染として横にいて、時々手を繋いでくれたり出来なくなるんだろっなどと、怜勇と反対側を向いた時、涙が流れてしまったことを。

怜勇が好きだと気付いてから、初めて手を繋いでくれた今日という日を忘れないで、心にそっとしまい

、怜勇にはレポーターとして割り切って接しようと思った事を・・・

夢へ 動き出す(前書き)

遅くなりました。

すみません。

夢へ動き出すのでしょうか？

## 夢へ 動き出す

私は新聞クラブで、怜勇は

怜勇と愁の人氣は、ますます拍車をかけて増し、私は二人の取材に四苦八苦していた高二の春、とうとう

怜勇が『プロデビューするのでは?』という噂が飛び込んできました。

私は、幼馴染という事で、怜勇と愁の専属記者のようにされているため、部長の命で取材!となりました。

「ええと・・・怜勇は?」キョロキョロ

『キヤーツ!』 『わーツ』

居た!相変わらず凄い人気だねえ・・・  
うーん。チャンスをねらわねば・・・。

クラブ終わる時間まで待つしかないかなあ・・・。

暇だな・・・。

アツ。打席空いてるじゃん。ニツ。クラブまである・・・。ピーン  
打っていい!って事だよな。

スコーン スコーン・・・うーん。気持ちいい〜。

「君、やっぱり上手だね。女子メンバーの為にも入って欲しかったよ」

「ギヤツ!あ あ あ すすみません。勝手に・・・」

「いーよ。いーよ。使って。使って。君かわいいし。センスいいし  
大歓迎だよ。それに・・・」

ペラペラ・・・  
ペラペラ・・・  
ペラペラ・・・

「あの一ー。」

「あ！ 怜勇・・・。ま・待って・・・。行ってしまった・・・

」

『ど・どうしよ・・・。インタビューしそびれた・・・部長に怒られるだろうな・・・』

『それに、個人的にも本当に噂の真相知りたかったのに・・・あーあ・・・』

「あ、ごめん。君新聞クラブだったよね？もしかして海藤に話あった？もしかしてプロ転向の件？真相を直撃！ってか？」

「はい。部長の指示で・・・」

「そう・・・。ごめん。本人に聞けば確実だけど、たぶん高校在学中はプロにならないと思うよ。高校生活をenjoyしたい！一生に一度きりだから！って言ってたと思うよ。ちよつと前はね」

「そうなんですか？」

「うん。君幼馴染なんだろう？やけに嬉しそうな顔に変わったけど？早くプロになるの反対なの？」

「え？ イエ。そ そんなことありません。けど・・・」

「アハハ。君。わかりやすいね。ま、海藤に直接聞いてみな。じや。」

『ふーっ。早くかえろ。帰り怜勇ん家よって聞いてみよ。家までの押しかけインタビューはダメだろう か』

ピンポン

「はい」

「あ。こんばんわ。笑です」

「あら、いらつしゃい。怜勇　かな？」

「はい」

「部屋にいると思うわ。どうぞ」

「おじゃましまーす。爽快　こんばんわ。今日はちょっと学校の用事だから遊べないけど、また遊ぼう　ね。ばいばい」

コンコン

「はい」

ガチャッ

「笑。どした？　なーんて。来ると思ってたよ。インタビュー頼まれたんだろ？新聞クラブの部長　に」

「げっ。なんで。わかるの？」

「プロになる噂がマスコミで騒がれてるからな。ソロソロうちの俺専属記者がくるだろ　って思ってたからな。　ククク」

「あそ．．．。さすが．．．。入っていい？」

「あー。どうぞ」

「ガハハハ」

「愁！愁もいたんだ。おばさん言ってくればいいのに．．．」

「で、ズバツと聞くけど、真相は？」

「本当は噂通り、今すぐにもプロになりたいさ。でも、高校卒業してからにしようと思ってる。高校時代は二度とないから、思い出いっばい作ってからでいい！と思ったんだ。」

「うん。よかった・・・。まだ近くにいれるんだ・・・グスツ。本当はこんな事言ったらダメなんだろうけど、良かった。いっぱい思い出つくる。プロになつたらほんと、雲の上の人になつちゃうだろうか　ら」ズズツ　グスン

「あー。」「よしよしと頭をなせてくれる愁と怜勇。」

その時、愁が・・・

「笑。俺ももう卒業後どうするか決めてんだ。」

「愁は大学でしょ？それとも実業団？私、また愁と同じ大学受けよっかな　うふっ」

「おう。大学だぜ。ほんとに受けっか？同じとこ」

「うん。どこ？どこ？」

「アメリカ・・・。留学すんだ」

「え？　うそ・・・」

「とおい・・・よ。無理だよ。・・・。」

「高校卒業したら、みんなバラバラにそれぞれの道に進むんだね。」

「あー。今まで三人ずっと一緒だったのにな」

「おー。それぞれ夢があるからな。絶対叶えようぜ！俺はNBLで活躍したい。絶対に。その為に大学から、あっち行くんだ。」

グスン　グスン

「笑？」怜勇が優しい声で呼んでくれた。

「うん？大丈夫。卒業までいっぱい思い出作ろうね。あ、二人の事。新聞に書いていい？トップニュースだ！写真も早く早く・・・」

「

ポロ ポロ ポロ・・・

寂しい・・・。なんか急に二人が一度に遠くにいなくなっちゃうんだ。

応援しなくちゃいけないのに・・・。

ごめん。今だけ。今だけ。泣かせて・・・

夢へ 動き出す（後書き）

後一話か二話で社会人になった三人

夢が叶うのか 叶ったのか 近づいたのか・・・

お楽しみに

## 卒業へ 思い出作り？

愁から衝撃の留学話を聞いた笑は、速報号外として、

海藤怜勇・・・プロ転校は卒業後！日本と米国を二大拠点として活動！

山村愁月・・・卒業後、米国留学！すでにオファーも。

として、配布された。

これには、常に校外でスクープを撮ろうと、待機していた報道陣の数名も度肝を抜かれ、生徒と同じように号外を目を凝らしてよんでいた。

その光景を笑は、クラブの一員として、プロ達より情報を早く記事に出来たことを、満面の笑みで誇らしげに見ていた。そしていつものように、一部を綺麗に持ち帰り怜勇と愁の記事を大切にスクラップするのでした。

笑は、高校二年の一年を怜勇と愁の取材と撮影に明け暮れ、怜勇は、高校生大会のゴルフ試合とプロのトーナメントにアマチュアとして参加したりしながら、愁は、インターハイ・全国大会・全国高校選抜に選ばれ大会に出場したりと  
三人はそれぞれ忙しく活動し、幼馴染として一緒の時間を過ごせる後僅かな時間を楽しんでいた。

残り数ヶ月で三年生に進級するという、一月の下旬、笑は怜勇に下校する前に呼び止められた。

「笑、今日、一緒に帰れないか？」

「うーん。今日クラブ無いから早く帰ろうと思っていたんだけど・  
。。 怜勇はクラブでしょ？」

「うん。待っててくれないか？」

「。。。。。」  
「少し考えて「いいよ。何か話があるの?」

「うん。ちよつと。願いを聞いてほしいんだ。。。。。」

「わかった! いいよ。待ってる。ただし ミスアイスクリームの  
Wアイス! おごつてね」

「ハイハイ。OKですよ。笑姫さま。

「じゃ、後で。」

「あ! 笑! ゴルフクラブの練習見学ベンチでまつてて!」

「はー! ー! ー! ー! い。わかったあ。がんばつてねええ」

『。。。。。なんなんだ? 話つて?。。。。。まつ つか。せつかく  
だからカメラ持つてて写真でも撮ろうかな。また、文化祭でファ  
ンの子達用に生写真撮つておいて新聞クラブで売ろう。今年の文化  
祭でも 怜 勇と 愁 の写真、馬鹿売れ! だったもんね。』 ニヒヒヒ

『ベンチで座つて待つてて。。。。。相変わらずすごい人  
気! 座るとこ探すの大変だよこれは』

「えー! みー! ー! ー! 」

誰かが手振つてる。。。。。行つてみよう。

わっ! 結構いい席じゃん。

「よっ! 花ちゃん。どうしたの? あ そかさか。花ちゃん。怜勇、  
いや 海藤のファンだったよね。で、

見学? てか応援? ここいい? 」

「うん。いいよ。そ。笑、いくら幼馴染でも海藤君を海藤って呼び  
捨てにしたら。。ほら、親衛隊の子 達。。睨んでるよ私はまだ  
ただの憧れの的な感じだからいいけど。。怖いんだよ」



子団体戦と男女混合戦に出れるだ。」

「……」

「考えてくれない？俺も学生としてアマチュアとして出るの後一年で終わりだから、全ての大会に出たいんだ……。」

「……でも。私……。」

「今すぐ返事じゃなくていいから。」

「……うん。……わかった。考えとく。返事いつまで？」

「来週あたままで。土日で考えておいて……。」

## 卒業へ 思い出作り？（後書き）

すみません。まだしばらく高校時代の二人です。  
なるべく早く社会人編にいくようにします・。  
いましばらくお付き合いのほどを・。

思い出作り？

週明け私は学校に行く前に怜勇の家に行った。  
先週の返事を出す為に。

怜勇は毎日登校前に近所のゴルフ練習場で練習している。私も屋根裏部屋からマイゴルフバックを降ろし  
ドライバーとアイアンを2、3本取り出しそれをもって怜勇の家のインターホンを押した。

怜勇が自転車を押しながら出てきた。

「おはよ。早いな。もしかして返事？」

「うん。笑も一緒に練習連れてって」

「OK 後ろ乗れよ」

「うん」

久しぶりだな。怜勇の匂い。男らしい匂いになった気がする。こつこつやって自転車の後ろに乗せてもらったのって、小学校5年生依頼かな。あの時、捻挫した私を家に送るのにどっちが乗せるかって、

怜勇と愁

言い合いになったんだっけ。

殴り合いのケンカになりそうだったのを見かねた私は、泣きながら足を引きずり歩いて帰りだした。それを見た二人は、慌てて自転車でじゃんけんしながら追っかけてきて、勝ったからと言う怜勇の後ろに乗る事になったんだっけ。

二人でごめん って誤って。で、愁が次回は「俺だから」って。クスクスクス。

「何笑ってんの？一人で。きしょくわりーな」

「あはは。ごめん。ちょっと思い出し笑い」

「思い出し笑いですんのは、エロいやつらしいぜ。笑、エロッ」  
「ええ。ばか」

「あはははは」

朝焼けの空の下、二人の笑い声がこだました。新聞配達バイクの音にまじりながら……

スパーン スパーン

怜勇は、私が話すまで何も聞いてこなかった。

スコーン スコーン

「怜勇。」

「あん？」

「私でいいの？後何ヶ月ある？」

「あん？俺は笑がいいの。しかも。笑ぐらいしかいないだろ。うちの高校でそんだけ打てるやつ。」

「練習期間は、四ヶ月あるかないか……。たまに練習行ってたの知ってるし。大丈夫だよ」

「わかった……。」

「で？」

「……。」

スコーン スコーン

スパーン スパーン

「笑？」

「……。出るよ……。試合。」

「よっしゃーーー」

「怜勇。私出るって決めたからには、負けたくない！だから練習。いっぱい付き合って！」

「いいぜ。笑の性格は痛いほど解ってるつもりだけど？」 ニヤッ  
「みんなに迷惑掛けたくない・・・から・・・」

「うん」

それから、私は新聞クラブの部長に事情を話しにいった。

部長はなぜか知っていて、試合が終わるまでゴルフクラブにレンタル移籍だな。ガハハハ。と笑って許可してくれた。

そして、レンタル移籍先のゴルフクラブに挨拶に行くと、早崎さんと三島さんが「よろしく。うれしいわ。メンバーが揃って登録できる。がんばろうね」と歓迎してくれた。

ゴルフクラブの部長は「レンタル移籍なんて言わずに、ずっと居てくれていいよ」なんて、軽口をたたいていた。

緊張していた私は、みんなの暖かい応援と歓迎にホッとして、試合に向けて悔いの残らないように練習に精を出していた。

後、四ヶ月程しかないという事で毎日朝晩休まず練習した。ラウンド感も取り戻す為、怜勇のお父さんと怜勇にも頻繁にコースへ連れて行ってもらった。そのなかに時々愁も入っていた。元々愁もお坊ちゃんと言うこともあり、ゴルフは小さい頃からプレーをしていた。

そんな忙しいけど、楽しくもあつた四ヶ月余りの日々が過ぎ、三年生になった4月15日とうとう大会初日。まずは女子団体戦が始まった・・・。

## 思い出作り？（後書き）

次は二人の高校時代の最高の思い出となった話です。  
社会人編・・・もう少し待ってください

高校時代 最高最後の思い出？（前書き）

最高の二人の思い出となる。高校三年のゴルフ試合  
新聞クラブの笑が参加をした唯一の大会。

## 高校時代 最高最後の思い出？

第一回戦・・・女子団体戦。

第一プレイヤー 星野 笑

第二プレイヤー 三島 さくら

第三プレイヤー 早崎 悠子

まずは、私かぁ・・・。

出ると決めてから一生懸命練習した。する事だけは精一杯した。怜勇におじさん。三島さんに早崎さん。部長。たくさんの人に協力してもつらた。悔いの残らないようにだけ戦おう・・・。  
落ち着いて・・・ふーっ。

「笑！」

「楽しんで。 笑顔！ だよ」

ハッ！「そうだ。楽しもう。こつという経験の場を与えてくれたみんなに感謝して。」

「機会を与えてくれた、三島さん 早崎さん・・・。そして  
怜勇・・・。ありがとう」

スコーン。あつ。あー！。右へ行ってしまった。やばい・・・。

あ、あった。バンカーか・・・。怜勇にたくさん仕込まれたな・・・  
ふふ。

よし。なんとかパー。

次NICEshot!

う……。パター外れた……。ボギー。  
くっそ。落ちついて……

そんな緊張したラウンドをとりあえず終えた。

終わった〜。とりあえずイーブンパー。あがり……。これなら  
許容範囲かな。

さすがの二人は、 - 5 - 6上がりで……。

「やったぁー！。初戦突破ぁー！」

「ごめんね。足ひっぱて……」

「何言ってるの！初めての試合。第一プレイヤー！誰だって緊張するよ。上等だったよ。さすが笑」

「そうそう。参加出来ただけで、うちら笑に感謝してんだから……」

そして。

三人で円になって飛び上がって喜んだ。涙が流れた。泣くのは早すぎるのに。何故かとても爽やかな気持ちで自然と涙が頬をつたっていた。良かったぁ。嬉しい。気持ちいい。一生懸命するってやっぱり気持ちいい。

「よー！。男子団体……。見に行こう。応援行くよー」  
「おう」

三人は、男子の対戦が行われてる浜辺コースへと向った。

『今どこにいるんだろ……。』キョロキョロ探していると、  
しっかり者の早崎さんが、係りの人に聞いているみたい。  
挨拶してこっちに走って戻ってきた。

「明日のスタートらしいよ。練習グラウンドかな？行ってみる？それか、他校チームの視察する？」

「えと、だれだっけ？ほら海藤君のライバルとか言われてる・・・えと、川田・君だっけ。今ラウンドしてるらしいから見に行く？」

「だね。あまり会う機会ないし・・・行ってみよっか 笑？ いい？」

「え？あ あ うん 行こ」

すごい。うまい。さすが！怜勇のライバルって言われてるだけある  
ー。

川田君もファン多いんだ。

なんとなく、愁っぽい。うふふ。愁がゴルフしてるみたい。練習一緒に回ってくれた時も、なんか緊張が取れる感じしたもんね。そんな雰囲気もってるな。

5アンダーかあ。三人で10アンダー・・・。現在トップ！  
怜勇達、大丈夫かなあ？

「ね。ね。うちの男子チーム見にいこ。パター練習場かな？調子とか気になるし・・・」

「だね。行ってみよっか？あれ？ミー・・・。こらライバル校のやつに見とれてるんじゃない！」

「ダハハ。だつてー」。 あああ ちょ ちょ待つてー」

うわっ。ピリピリしてる。明日なのに・・・何この三人の空気・・・。スゴイ！

声をかけようと思って見にきたけど、声かける雰囲気じゃないな・・・

あそここのベンチに座って見よ。

ふーっ。

うわー。綺麗な夕焼けえ……。

ピタッ！

「うわっ つめた！」

そこに、怜勇がコーラーを持って立っていた。息が止まってしまっ  
ほどのステキな笑顔を浮かべて。

「怜ー勇。お疲れ！」

「笑こそ。お疲れ！すごくがんばったらしいな。早崎と三島が喜ん  
でた。」

「ううん。足ひっぱっちゃた。でもね。久しぶりに楽しかった。こ  
う。なんていうか 力が漲って、ワクワクした。」

「そっか。俺が誘ったのに、応援行ってやれなくてごめんな」

「いいよ。いいよ。怜勇明日ラウンドだし……。それに見られて  
たらもつとスコア悪かったかもだ し……。」

「俺……。この試合だけは絶対勝ちたいんだ。女子団体。男子団  
体。ペアマッチ。シングル。どれも勝ちたい。勝って高校時代の  
大切な思い出にしたいんだ。俺……。本当は高校在学中にプロに  
なるつも りだった。でも、そしたら、せつかく笑と同じ高校入っ  
たのに、笑との高校生としての思い出が残らな いな と思って。  
卒業してからにしたんだ。在学中にプロになったほうが、俺の夢！  
マスターズ日本人 初！優勝！ に早く近づけるんだろっけど、高  
校生は今しかないもんな。」

『ええ？うそ……。怜勇？私との思い出の為に？』

「愁もアメリカに行くから、愁との思い出もいっぱい作らないとダメだな。うん。笑？」

「あ。そだね。三人での思い出もね」

『そーよね。私との思い出に怜勇は特別な思い出なんかないよね・・・』

「あ！男女混合ペアマッチのペア聞いたか？ 笑は俺とだから・・・

「！え！ ええ？優勝したいんでしょ？なら、早崎さんのがいいじゃない。変更できないの？」

「変更？ 無理なんじゃね？」

「うそ・・・。ごめん。なんで私となんかになったんだろね？くじ引きかなんか？だとしたら、怜勇って くじ運ないんだね・・・」

「ははは。いいんじゃない？気にすんなあ」

はーあ。気にすんなって。優勝目標なんでしょうが。プレッシャーだよおおおお。

高校時代 最高最後の思い出？（後書き）

大会はフィクションです。実際の全国高校生の大会に団体戦やペア混合戦があるのか、ないのかは存じ上げません。あくまで、作者の夢物語です。

ご了承ください。

## 最高最後の思い出？

男子団体戦は、僅差でライバル校、川田君のいる弥生高校が優勝。  
如月高校は準優勝。

女子団体戦は、反対に僅差で初優勝を飾った。

新聞クラブの記事には、悔しい顔をごまかし切れてない怜勇の顔。  
部長の放心状態の顔が載り、女子の優勝が一面にのった。その三人  
の顔は涙でグシャグシャ ドロドロの見るも無残な写真が載った。

笑は、またきつちり綺麗な新聞をスクラップしたけれど、自分の顔  
があまりに情けないので、新聞クラブの部長を少し罵ったのでした。  
だって。一生残るんだよー。

そして、いよいよ。混合ペアマッチの始まりです。

『う。。。めっちゃ緊張なんですけどおおおお』

「えーみ。緊張してるんでしょう。大丈夫よ。海藤君がいるじゃない。笑のミスは俺が全部ホローして 絶対優勝してやる！ って  
言ってたよ。大船に乗った気でOKよ」

「がーっ。だからあ それがプレッシャーなんじゃない」

言ってたとおり、怜勇が本当に凄くがんばってくれて、私のミスを  
すべてカバーしてくれて、なんとか決勝までコマを進めることが  
できた。

怜勇がここまで鬼気迫る感じの試合をした事がないのでは？と思う  
ほどで、怖かった。私には笑顔でやさしく接してくれていつもとな  
んら変わらないけど、かもし出すオーラが違う。。。。

『怜勇。ありがと。後1戦だね。がんばるよ。二人の思い出の為に!』

「笑……。ここまで来たんだ。よくがんばったな。最後は笑ってブレーしようぜ。いい思い出になったよ。ありがと。」

「怜勇!何言ってるの。優勝するんだよ。絶対に。川田君チームには勝とうよ。ね?」

「よし。わかった。でも楽しくだ!わかったか?行くぞ」

怜勇……。ティーグラウンドで方向を確認している怜勇の横顔をポーっと見つめていたら

「おーーーーーい。怜勇ー!。笑ーーーー!。」

はっとしてギャラリーの方を見ると、愁がいた。

「愁!」といいながら駆け寄って

「愁。来てくれたんだ。練習は?」

「アハハ。サボった!」

「ええ?一度もサボった事ないのに・・・」

「バカ!こんな組み合わせこれから先もないだろう。見逃せねーよ。それに一日ぐらい練習さぼったって俺には何も影響ない!」

「ほら、行けよ。怜勇が見てるぜ」といいながら怜勇に手を上げる。

「うん。がんばるから応援してね。しっかりと!近くの女の子ばかりナンパしないで!だよ」

「笑。リラックスできたか?愁、いいところ来てくれるぜ。あいつ。

がんばろうな」



で、まるで小さな頃の二人に戻ったように普通でいれた。

イエーイ。ハイタッチ。

ニコニコ、しゃべりながら。

あっちを見たり こっちを見たり……。

最終ホール……

1打差。

そんな事、どうでもいい。楽しい。怜勇とこの時間をもっと過ごして  
ていたい。怜勇はどう思ってる？

怜勇もそう思わない？

スコーン。

よっしゃー。イケー。

~~~~~ 『ナイ ショツ』 ~~~~~

「笑！グツ！」

「エヘヘピース」

ハイタッチ。

「よし！やってやるぜ！俺に任せろっ」

コロコロカラ ン……

『ウワーーーーッ』 『オーーーーーッ』 『ブーッ』

ーーーーッ』

イーグル！

逆転！後は……。

相手のバーディトライ……

コロコロコロ　　クル　　ん・・・。
はずれたー！。

ポロポロポロポロ

涙が止まらない・・・

涙でかすんで見えない・・・

怜勇・・・どこ・・・

やったね怜勇・・・

ふわつと後ろから抱きしめられた。

怜勇の匂いがした。

怜勇・・・。。。。

クルツと振り返り怜勇に抱きついた。

『パチパチパチパチパチ』

大歓声にやつと現実に戻った。

川田君達がこちらに歩いてきて握手を交わした。

「いい戦いだつた。楽しかったよ。ありがとう　おめでと」川田君が
言ってくれた。

「おめでと。あなたゴルフクラブじゃないそうね。ゴルフすればいいの
にいいライバルになれそうなんだ　けど？　おめでと。」

また機会があればよろしく「宮崎さんが素敵な笑顔で言ってくれた。

「おーい。やったな。二人共」

「愁！やったよー！。帰ったらお祝いしてねー」

「愁月」よつと手を上げ

「怜勇　ああ」と親指を上にもむけた。

二人は心で会話しているのだろう。と笑は微笑んで見ていた。

結果発表 優勝チームのみ前へ

女子団体戦 如月高校

男子団体戦 弥生高校

混合ペアマツチ 如月高校 海藤怜勇 星野 笑チーム

個人戦結果発表 優勝者のみ前へ

男子個人 海藤怜勇

女子個人 宮崎紫音

ちなみに個人戦3位に早崎さん。10位に三島さん。

そして。私は・・・精魂尽きてブービー賞となった。

最高最後の思い出？（後書き）

いよいよ。次話で高校を卒業します。

私たち卒業します（前書き）

やっと卒業します

私たち卒業します

怜勇とペアマッチで優勝して、新聞クラブに一面にのり、
ヨンケイスポーツや報来新聞等何社かのスポーツ紙に二人の最終ホ
ールで抱きあつてる写真が掲載され、

一時、時の二人となったのですが、私は普通の女子学生という事で、
怜勇が参戦を決めたプロトーナメントの記者会見で、私のことを幼
馴染で一切の恋愛感情はない と言明してくれた。

やっぱり……。と落ち込んだけど。これでいいんだ と思い切り、
残りの高校生活をエンジョイしている笑でした。

愁月も留学に向けてどんどん忙しくなり、夏休みには先行体験とい
う事で二ヶ月程アメリカに行っていた。

怜勇は、プロトーナメントにアマチュアとして何戦か参戦し、その
うちアマチュアによるツアー二週連続優勝という史上初の快挙をあ
げ、益々多忙になり、ますます注目されるようになって、プライベ
ートでの外出に気を使うと・・・疲れきっていた。

進路の決まっている二人とは別の意味で忙しい毎日を送っている私
ほぼ毎日進路指導室に通い、自分の進む道を模索していた。

マスコミ関係に就職したいとの思いがあり、マスコミ関係就職率が
門の広い大学を受ける事にした。

そして

三月……。

「怜勇！あのね・・・私。怜勇・・・」

「笑！俺・・・。ずっと・・・幼稚園の頃から・・・」

「怜勇・・・。ういあ。ううん。あの夢を叶えてね。絶対

に。私も夢・・・叶えるよ」

「えみ・・・。すいや。俺も夢叶えるよ。一個はもうかな
つたからなプロゴルファー。後はマス ターズ優勝。そして

がんばるぜ」 『そして、マスターズ優勝！その夢を叶えたら最
後の夢を 叶えるぜ。それが本当の夢だから。それまでの夢はそれ
を叶える為の手段になるゆめだから』

「じゃな。」「じゃね」

「愁も元気で・・・夏休みにはアメリカに行くよ。怜勇はハードな
んでしょ？ツアー参戦。体気をつけ て。たまには見に行くね」
「おう。笑。アメリカ絶対来いよ。おいしいステーキの店連れてっ
てやるよ」

ポロポロポロ ポロポロ 涙が止まらない。

それから 四年間。

毎年夏にはアメリカに行き、愁の活躍を実際に目で見た。

怜勇はたまにトーナメントチケットを家までもって来てくれるから、
大学の友達と何度か見に行った。

二回も賞金王に輝き、ますますファンも増え、多忙な日々を送って
いる。怜勇とはこの四年間はほとんどゆっくり話せてない。チケッ
トを届けてくれた時たまたま私が居たら少し話すぐらいかな。

私はいよいよ就職。

マスコミ関係の月星TVに就職した。

所属は企画部

22歳。

いよいよ社会に飛び出します。

希望に満ちた日々が待ってる気がします。

わくわく ときどき。

私たち卒業します（後書き）

いよいよ次から社会人編です。

社会編 ？（前書き）

とうとう社会人。 怜勇&笑はとうなるのでしょうか。

社会編 ?

入社一ヶ月が過ぎた。

入社当初は右も左も全くわからずに、右往左往して毎日が知らぬ間に過ぎていたが、一ヶ月たった今、気心の知れた仲の良い同僚もでき、楽しいOL生活を過ごしていた。

「笑い。お腹すいたね。ランチいこっ」

「え？もうそんな時間？ ほんとだ。行こうか。どこ行く？今日は、日本食が食べたいなあ。いい？」

「よいよ。ほら、じゃさ、最近オープンした>せがわくに行く？ランチおいしそうで値段も手頃だったよ」

「うんうん。広告入ってた？」

「ふふふ。新とこないだ晩御飯食べに行ったんだ。」

「あー。アナウンス部の？彼氏だっけ？」

「いやいや。大学でサークルが一緒だったの」

「ふーん」

と、疑わしい笑みを浮かべて、凜を見た。

でも、当の凜は本当に友達だよ。って感じで、知らん顔。私がジロって見ても。

うん？なに？ みたいな平然とした顔で。

『藤見さん……。つらいねえ。がんばれ！まだまだ あなたの気持ち通じてなみたいですよ 凜には』ププ

笑みは少し先に見えてきた行列に目を見張って

「うわー。すごい人気だね。」

「だって、ここの料理長TVによく出てるもんね」
「うん、そうそう。うちの今度の特番企画にも、出てもらうように交渉しようか」とかって、部長が言っ てたな。そういやあ。」
「ま、しかたない、並ぼうか・・・」
と凜が平然という。笑みはいつも思うのだが、
『凜ってこうあっさりしてるよなあ。なんでも躊躇すると言つことはないのだろうか』と。

「うわー。かわいい。美味しそう。」

「でしょ？で、この値段つて。どうよーって感じよね。夜も素敵だったよ」

「夜は、やっぱ、ちょっと高かったりする？」

「さー？ どうなんだろう。新が予約してて支払いも、とつとと新がしちゃったからねー」

「ねー。つて。」・・・きつと高いよ。絶対高いつて。・・・藤見さん。ご愁傷さま・・・。
凜ってすごい人のコイバナには敏感なのに、自分の事にはとんと疎いのよね・・・はあ。

「あ！そうだ。笑。新がさあ、企画部とアナウンス部で今度コンパしようぜ つて言ってた。笑も絶対だよ。誘っておいてって言われるから。パクパク おいしーね」

「え？私も？いいよ。私は面倒くさいし・・・」

「ダーミーメ。ホラ、二つ上のアナウンス部の先輩で翠川さん ているじゃん？あの人が、必ず星野さんを誘うように！て新に命令したの。新、先輩に逆らえないから頼むな つて言ってきたのよ」

「・・・。うっ。いやだ。」小さな声で凜には聞こえてないらしい。

「いい？日時決まったら連絡あるから。予定しておいてよ！」

「・・・はい」

「なんだか、急に美味しかったランチがお腹いっぱいになって食べきれなくなったのは気のせいでしょうか・・・。」

部長が探していたらしく、ランチから帰ると、

「おいおい、探したよ。昼休憩だったの？ならちゃんと行き先表には、昼休憩と書いていけよ。探し回ったんだぞ。お前らの行き先知ってたもんが後から教えてくれたけどな」

「はーーーーい。すみませでした」

「あ、そうだ。明日、アメリカツアー参戦から海藤怜勇が帰ってくるらしぞ。しばらく、こっちでオフらしいから、なんか特番でも考えてるから、お前たちもまた企画考えておけよな」

「はーーーーい。ねね。笑。特番くんたらスタジオで怜勇君に会えるかな？キャー。必死で企画考えよ」

「ららんラン。スキップする勢いでデスクに向かう凜を、呆れ顔で見っていた笑。」

『そっかー。怜勇かえってくるのかあ。なんか、長い間会ってないな。一年くらいは余裕で会ってないよねえ。企画かあ・・・。』

社会編 ？（後書き）

これからの進展に乞うご期待あれ

ランキング参加しました ポチッとお願いします。

社会人？（前書き）

更新遅くなりました。楽しみに待っていただいていた方申し訳ございませんでした。

お待ちせしました。怜勇に熱愛疑惑です・・・

社会人？

あれから3日後の火曜日、怜勇は帰ってきた。

帰る前日の女性週刊誌に

「海藤怜勇熱愛か！？ スーパーガールズのメンバーとsushiデート」とフォーカスされていた。

私は仕事に追われてて芸能報道を目にすることはなかった。しかしその日の午後ある事で、その報道を知る事となった

その日の午後部長に呼び止められて、

「おい、星野。今度特番で、いろんなスポーツ界のスターに来てもらって、いろんなトークをしてもらおう。司会進行を今若手で売り出し中の笑わせ隊にやってもらおうと思ってる。そんな企画が進んでるんだ」

「あ そうなんですか？面白そうですね。で、メンバーとかは、もうアポとられたりしてるんですか？」

「いや、ま、これからだ。メンバーは絞れてるんだがな。」

「そこでだ、お前と春川に 海藤怜勇と丸岡重雄と池端祐樹のゴルフ界の若大将三人衆のアポを頼みたいんだ。」

「はい？ え あ そうなんですか？ 分かりました。春川君とですよね？」

「そうだ。絶対 出演交渉成功させてきてくれ！今回は、海藤のフォーカス後では内が一番早く会えるだろうから。笑わせ隊の二人のトークで熱愛報道の真相をつましく引き出してくれたら、万々歳なんだがなあ うんうん」

「え？怜勇・・・いえ。海藤さんに熱愛報道でてるんですか？」

「そうだ。お前しらないのか？今日の週刊誌トップだ。まだ疑惑だ

がな。相手はスーパーガールのメンバーの一人 RUKAだ。あ、休憩室に雑誌置いてあったから見ておけ。お前もマスコミ界で働いてるんだから、全てを信じなくてもいいが、一応なんでも知っておく事は大事だぞ！」

「はい」

『知らなかった・・・怜勇。初スキャンダルかあ　はあ』
そう思いながら、雑誌を見てみるべく休憩室に向かった。

休憩室の扉を開けると、凜がコーラーの入ってるストローを口につけながら、その雑誌を食い入るように見ていた。私には気づいてないようね。

「凜！」

「うわっ　びつくりしたあ。忍び足でよって来ないでよ！」

「はあ？　あのね、扉も普通にボタンで閉めたし。ヒールの音も普通にコツコツいってましたが？」

「あれ　そう？　それより見て見て」

「うん。それを私も見に来たの。部長に聞いて。凜、集中して読んでたね。だから音がまるつきり聞こえなかったんでしょあ。　で？

どう？凜の見解は？」

「うーん。そうねえ・・・。恋愛のカリスマの私としては、この写真から見て感じる雰囲気は・・・

・　ジャジャーーン。　恋人って感じはしないわね。少なくとも怜勇君の目は至って普通って感じ？

ま、RUKAの方の表情までこの角度じゃわからないけど」

「そつかあ。で凜は怜勇君のファンでしょ？どんな？」

「どんな？って言われても・・・。うーん。もしこれが本当に熱愛なら、まだまだみんなの王子でいて欲しかったからシヨックだけ

ど、彼も年頃の男の子だもんねえ。浮いた話も一つや二つ出る頃なんじゃないの？だって新と同じ年だよ！」

「そうね……」

などの会話をしながら パラパラとそのページをめくって読んでみた。

「おい。星野。お 桜木も居たか。二人でちょうどいい。星野は海藤が明日帰ってくるから、明日一度事務所に電話入れて、話して会って交渉とか頼んだぞ。なるべく早く。他の二人は今からでも連絡とつてくれ。収録は再来週の木曜日だからな。」

で、桜木は、バスケ界の本多俊輔と永山栄太と山村愁月！を担当してくれ！」

「え？部長。愁……いえ。山村さんもくるんですか？」

「ま、彼はまだアメリカだから どうなるかわからんが声はかけたいな と思って。彼もバスケ界では一番人気の王子だから！アメリカ人のファンも多いみたいだな」

「笑は ゴルフ担当かあ？いいなあ。ま、私も愁月君と近づけるチャンスだからワクワクするっう」

「さ、さ そろそろ仕事の戻ろっか？」

「だね」

私は、長い間会っていない怜勇に恋のスクヤンダルが出たことに不安を覚えながら仕事をこなすべく、池端さん丸岡さんの事務所に電話をし、日程の空きを聞き、出演交渉をし、本人達に説明する日時のアポをとったり、春川君と打ち合わせをしたりし定時を過ぎ、午後八時頃に凜と会社を後にした。

玄関をでたところで、アナウンス部の藤見 新 と翠川 基虎にば

ったりであった。

「あれ、新じゃん。今帰り？」

「お、凜じゃん 星野さんも 二人も今帰り？」

「うん。」

「こつちも。今帰り。腹減ったからどっか飯食ってかえるか？って
言ってたところ。ちょうどいい！凜達も一緒にどう？多いほうが楽し
いし。合コン前打っ合わせをかねて・・・どう？」

「笑どうする？」

「うーん グルグルグルルル・・・」

「・・・・・・・・・・・」

「アハハハハ。お腹がOKって返事したね。行こうぜ。藤見。いい
よね桜木さん・星野さん」

「アハハ。そうね、いいよ。笑も返事しちゃったしね・・・クス」

「それでは、レッツゴー！」

と四人は局近くの居酒屋へむかったのです。

社会人？（後書き）

本日、出来れば、もう1話と 思っております。

出来れば・・・です・・・

その時は、すみません。早急に掲載するようになします・・・
お許しを・・・

ポチッとお願いします

社会人編 ？（前書き）

もう1話UPできました。よかったです。

社会人編 ？

> かんぱーいーいー
カチン カチン と

急なお食事会もとりあえずビールからはじまり、乾杯が終わりま
した。

「くーいーっ ウマイ」

「で、なに乾杯なんだろう？」

などと、好き放題話し、好きなだけ飲み・食べ、昼間聞いた怜勇の
熱愛報道の事を一瞬忘れて、笑は楽しいひと時を過ごしました。

「ね、星野さんの笑顔はとても素敵ですね」ニコッ

「はい？え？そうですか？でも、友達とかにも笑は、いつも笑顔で
いてね。とか、笑顔に癒される〜とかは良く言われますね。ふふふ。
両親も笑顔は人を幸せにするから！って笑ってつけたんだけど、本
当に名前の通り、笑は、いい笑顔を持つてるね。神様に感謝しなき
やな っって言われます。でも、翠川さんの笑顔も素敵ですよ。藤見
さんも。月星TVの二大新人ですもんね。うふふふ」

「アハハ。ありがとうございます。」

「あの・・・星野さん。間違ってたらすみません。星野さんて何年
か前にスクープされませんでしたか？高校のゴルフ大会、如月高校
男女ペア戦で海藤怜勇とペア組んで優勝して後ろから海藤怜勇に抱
かれてる所・・・似てるような気がして・・・もう四年程たっ
てるから僕の記憶違いかも知れませんが・・・」

ドキッ『えっ？』

「すごい。二人のプレーが生き生き楽しそうで。しかもその女の子の笑顔が印象的だったんです。似てる気がして……」

『ど・どうしよ。嘘をつく？いつかばれるかも知れないのに？今まではただ、誰にも言っただけだけど……。どうする？嘘をついても隠す必要があるのだろうか……。ただの幼馴染なだけなのに……』

「星野さん！星野さん！」

「え？ あ ああ はい」

「あの……。別に知られたからってどうって事ないんだけど、あまり人に言わないと約束してくれませんか？」

「藤見にも？桜木さんにも？」

「え？ あ はい。怜勇 結構ファン多くて、あのゴルフしない子でもファンだったりしてるじゃないですか？注目株だし……。私がマスコミ関係の仕事してなかったら、気にしないでいいんだけど、このことを利用されて怜勇に近づいて話題を作ったりが嫌なんです。会社の為に……。って。なんか、怜勇にも迷惑かかるかもだし、なんか違う気がして……。聞かれたりした時はきつちり言おうと思っってますが、わざわざ言う事でもないような気がして……。すみません。だから、愁・・山村愁月とも幼馴染なんですけどそれも誰にも言ったくないんです。」

「やっぱそうかあ。初めて社内で君を見た時そうじゃないかと思っただけで決めたんじゃないよ。実は僕もあの大会出てたんだ。あの日は回ってないからギャラリーとして、君達のプレーを見てたんだ。二人の雰囲気がよく良くて、纏ってて、うわ。こいつらには勝てねーなって思っただよ。そんな時。で、合コンで近づいて聞いたかったんだよ。内緒だろ。分ってるよ。僕も一応ゴルフをたしなむ紳士だから約束は守るよ うん。でも凄い二人の幼馴染をもったもんだね。」

「ありがと。そうなのよ。凄いいことでしょ？ふふふ。そつかああの時、いたんだ翠川さんも。でも私、ゴルフクラブでもないし、怜勇に迷惑かけないようにするだけで必死だったんですよ。優勝なんて・・・。怜勇ごめんなさい。って感じで。でもやっぱり怜勇ですよ。ね。すごい気迫でカバーしてくれて。結果、あーなっちゃったんです」

「あはは。じゃ。久しぶりに今度の日曜、ゴルフ行かない？」

「えー。無理ですよ。もうしばらくクラブ握ってないし。」

「じゃ、2 3回練習一緒に行つてラウンドしよう。ね？取引しないで内緒にするけど、さらに強硬な口止め料をプラスするとして。どう？」

「ふー。はい。分かりました。いいですよ。私もゴルフ嫌いじゃないし。でも練習は一人です。退社時間や都合合わすの大変でしょうし、月星TVのプリンスは顔がさしますから。ふふふ」

「OK。それで妥協しよう。じゃ。今度の日曜日」

約束をさせられ他愛もない会話をしながら、時間が過ぎていき、急に行われた食事はお開きとなった。

翌日、怜勇は帰国した。案の定マスコミに取り囲まれレポーターにもみくちゃにされてる、画像がその日のTVをにぎわした。そして、会見ではツアーの事を聞かれた後、熱愛のことについて答えていた。ただ一緒に食事をしただけです。恋愛感情はないです。いい友達です。と言いつつ切っていた。

ほんの少し。ホッと安心した私が出た。

その夜今度の日曜日の為に、近所の練習場に足を運んだ。

『あの試合前の練習以来かな？』なんて、車から道具をおろした。

『あの頃は怜勇と二人自転車でここまで来てたのに。クス。』

「ゲッ!」な・なんだあ?あの写真は……。しかも、それには怜勇のサインらしきものが書いてある」

「そうです。昨日翠川さんとの話に出てきた、高校時代のあの例の写真の切り抜きに怜勇のサインが書かれているうえに、額に入れて受付カウンターの壁に掛かっていたのです。」

「しかもご丁寧に、こうなるまでに二人が一生懸命練習したのはこの練習場です。今でも時々海藤選手は練習に来ることがあります。って横に説明が書かれていた。」

「私は それを見たときたんクルツと踵を返して帰ろうとしたが、運悪く近所のおじさんに気づかれ」

「笑ちゃん ひさしぶりだねえ。練習かい?」

「アハ はい。」

「OLになったから、接待ゴルフでも行かなきゃいけなくなったのかい?笑ちゃんの噂はそこそこ知られてるだろうから、白羽の矢があたったかあ?」とケラケラ笑っている。

「白羽の矢って事は全くないんですが、ま そんなところです。おじさんも相変わらず練習毎日来てるんですか。」

「そうだな。健康の為にな。ま。わしはこれで帰るけどしっかり練習して帰んな」

「はーい。さよなら」

「お そうだ。おーい 笑ちゃん。あの写真の頃懐かしいだろ。」

あのショットは本当にいい写真だよ」

と、大きな声で先ほど私が見つつけて帰ろうと思った額を指差していた。

そして言いたことだけ言って、手を振りながらさっさとおじさんは帰って行った。

『あの写真。みんな いい。と思ってくれてるんだろっか……。私と怜勇はあの写真を撮ったカメラマンさんから青春の思い出にどうぞ！と大きく引き伸ばしてくれた写真をいただいたのだ。そして、私の部屋には今でも額に入れて大事に飾られているのです。』

社会人編 ? (後書き)

次回のお話は日曜の為に練習していた笑。ある日練習にきた怜勇に
ばったり会います。そして、打ち合わせで怜勇にあった笑。特番に
二つ返事で「出る!」と言ってくれた怜勇の何かありそうな微笑に
疑問を抱く笑です。

社会人編 ？（前書き）

怜勇と練習場で再会

社会人編 ？

『さーっ、今日も練習がんばるぞお』

と、まずは、7アイアンから・・・。

『後、二日かぁ・・・。楽しくまわれるかなぁ・・・。ま、ゴルフをしに行くんだ。深く考えるな！うんうん』

スコーン スコーン

いい感じいい ニコニコ

次は・・・5アイアン？ うーんドライバーにしよ っど。

ガヤガヤ ヒソヒソ・・・

『うん？なんだぁ？』

笑は、クラブを探しながら入り口から入ってくる背の高い青年に目が行く。

帽子を目深にかぶってる為、よく顔は見えないけど、雰囲気は爽やか素敵系に見える。

『へーっ。かつこいいじゃん。そりゃ目を引くわね と、ささ私は

練習 練習』

『あの、こんばんわ 隣いいですか？』その青年が笑に声をかけた。きた。

笑は、振りむいて返事をしようとすると、その青年が帽子をクツと上に上げニツと笑を下から見上げ笑っていた。それは、笑が良く知る・・・。

「れ・怜勇ーっ」と叫ぶが先か

「しーっ！」と言うが先か声がかさなって。笑は慌てて口を押さえた。

「あ、あ どうぞ って どうしたの？こんな時間に」笑は最後の方を小さい声で聞いた

「笑の匂いをかぎつけて来た て言うやつ？」

「は？何それ」

「うそ うそ。 たまたま近所にジョギングに行こうとしてたら、おばさんにたまたま会ってさ。笑、最近また、ゴルフの練習場に夜、毎日行ってるわ。今日もいるんじゃないかしら。 って教えてくれたからさ。 ランニングを止めて、練習にした。 そしたらすぐ笑は見つかるわ。 隣空いてるわ。 ラッキー！てな」

「てな。 って・・・。 怜勇さあ。 スターなんだからもう特別待遇VIP席なんじゃあないの？目立ちすぎ！」

「だから、変装してんだけど？髪も黒染めスプレーしてきたし。 伊達眼鏡だし。 服装だっていつもは絶対着ないのきてきたし・・・」

私はため息交じりで、ジロっと睨んでみたけど、当の本人は鼻歌交じりで隣の打席に行き、準備をし始めた

「ちょ、ちょっと ん その隣の子！ ちょっと」

と手をあげ、おいでおいでして、怜勇を呼んだ。

「うん？」

「あのさ、受付の人にはばれなかったの？」

「うん？海藤怜勇です って帽子脱いで挨拶したよ。 もちろん。VIP対応で！ だから絶対のトップシークレットだから大丈夫！」

「あそ。でもさ。怜勇のスウィング見たら わかる人は分かるんじゃないの？」

「アハハ。大丈夫！」

と、片手を挙げて打席に戻って行った怜勇。しばらくボーツと怜勇をみていると、練習を始めた。

『え？ええ？ 何？あの振りは・・・』「アハハハハ」
声を出して笑ってしまった。『そりゃ、ばれないわ、でもへんな癖
つかないのかな？』
そう思いながら私も練習を開始した。

すると、しばらくして隣の怜勇から

「君、上手だね。どう？休憩しない？」って缶コーヒーを差し出し
てくれた。

「あ、ありがと」と言って受け取ると、
怜勇が、打席後ろの籐の椅子に座っておいでおいでをして、呼んで
いる。

私は、素直に隣の籐の椅子に座った。

「怜勇、役者だね。笑ったよ。でもあんな振りしても飛ぶんだ。私
なら空振りね。アハハ」

「たまに、遊びで愁とあんな打ち方してたんだ。だいぶ昔だけどな
愁と二人でいるとどうしても目だつて、注目されるだろ？あいつも
バスケ界では有名だし。で、二人でわざと、どんくさくするわけ。
すると、女の子たちは、なあって。かっこ悪い！ ってすぐどっ
か行くわけ。 懐かしいな。あの頃が」

なんだか、怜勇が少しさみしそうな目をしたような気がした。

『疲れているんだろうか・・・。着実に夢に近づいているのに。や
はりたまには、普通の青年として居たい時もあるんだろうな。』と、
私はコーヒーを口にしながら怜勇の横顔を見ていた。

3時間ほどを 二人でどっちがピンの近くにのせるか？とか。あそ
こまで飛ばせるか？とか昔のように二人でワイワイ騒ぎながら過

していたが、時間もすでに結構な時間になったので、

「そろそろ、帰ろつかない」と私が口にする

「俺も。帰るとするか。笑。駐車場でちょっと待ってて。車だよな？」

「うん。車だよ。何？」

「いいから。俺、この人に挨拶して帰るから、待ってて」

「わかった。じゃ、後で」

と別れた。怜勇は普通の人が帰る方向じゃなくて関係者以外立入禁止の札の掛かってある部屋へと消えていった。

駐車場でしばらく待っていると、怜勇がやってきた。

「笑。はい。これ、アメリカの土産。」

「うわ。ありがとう。何かな。今開けていい？」

「いいよ。たいしたもんじゃなけど」

「うわ。ブレスレット。いいの？しかも、五番街のマルファニーの……。いいのかなこんな高価なお土産貰っても。」

「いいの。」

「……ありがとう。大事にするね」

笑はすごく嬉しかった。

『うれし……。ありがとう。ずっとつけておこう』と思った。

「それと、今日少しだけ時間ある？焼き鳥で、一杯どう？お互い車置いて、徒歩で。昔よく家族で行った太郎庵！で。」

「わー。懐かしい！いいよ。タロおじー（太郎庵のオーナーで幼馴染の3人はこう呼んでいる）。歓迎してくれるかなあ。じゃ、現地集合で」

「おま。夜も遅いから迎え行ってやるよ」

「えー大丈夫だよ。じゃ後で。現地でいいからねえ。バイバイ」

ガラガラ

懐かしい 太郎庵と書かれた赤いちょうちんの横の引き戸を開けて中に入ると

「よっ！いらっしやい！ 笑嬢。久しぶりだな。きれいになりやがって。さ、さ、入んな。いつもの奥の部屋にクルオが待つてるぜ」
クルオ・・・怜勇にタロおじがつけた呼び名だ。ちなみに私の事はさっきの通、笑嬢と呼び、愁のことはチャラ愁！とつけている。

「ありがとう。タロおじ。元気してた？ いつものお願いね」

「おう。まかしときねー」

「お待たせ。変装してないんだね。」

「ここは、俺達の店だろ？ここでは昔からの海藤怜勇でいたいから。タロおじもわかってるし。」

「だね。ここはほんと、昔のまま。落ち着くもんね」

社会人編 ？（後書き）

練習場での笑と怜勇が長くなってしまうました。
もう少し二人の時間を書かせてください

ポチッとお願いします。

社会人編 ？（前書き）

怜勇と笑、なつかしの場所で楽しいひととき

社会人編 ？

「へーい。おまち。ビールにねぎま・チーズ明太につくねと笑嬢はししとう焼きと。クルオは鮭おにぎり だろ？」

「タロおじサンキュー。そそ この鮭おにぎりこれを食わなきゃ、はじまんないっつと」

「かんぱーい」カチャン「かんぱい」

「うーん。おいしっ。汗かいた後のビール美味しい。ね 怜勇」

「昔は、俺達がコーラーで笑はタロおじ特製オレンジジュースで乾杯！だったのに。俺達 すっかり おっとなーだな あはは うまい」

「そそ。あ そうだ。後でタロおじに特性オレンジジュース頼もっつと」

美味しい焼き物にビールを昔話などをしながら食べてると、突然怜勇が

「週刊誌みた？」

「うん」

「きれいよね。RUKAは。どう？やっぱ直に見てもきれい？」

「うん。きれいだぜ。でも。ほんと、すし食いに行っただけだから。」

「そう……。ほんとっかなあ。あ、他にもっと素敵な本命さんがいるのな？うん？海藤さん？どうですか？アハハ。今インタビューしちやおうかな。なんて。特だねだね。臨時ボーナスもんだね」

「ばかじゃね？俺は、昔言ったとおり、マスターズ優勝まで、ゴルフ一筋なんだ！ だから。笑は何があっても噂やスクープを信じず、

俺の夢だけを信じてて欲しい・・・」

笑は、真剣な怜勇の顔を見て、とびっきりの笑顔で

「OK！わかった。」

と頷いた。

怜勇はそのとびっきりの笑顔の返事にホッとして、

「次 何食おうかなー」と お品書きを見入っていた。

そんな怜勇を見ながら笑は

『それを 言いたくてココに誘ったのかな？』

と、ふと思ったのでした。

「クルオ 笑嬢 わしも一緒させてくれ」

と、タロおじが芋焼酎の魔王一升瓶を提げてやってきた。

「タロおじ、いいけど。店は？」

「もう、今日は店じまいだ。ささクルオもこれ飲め！うめーぞ」

と、ガラスのコップに注ぎ始めた。

「あーん。タロおじ待ってえ。特製オレンジジュースを酔う前に作ってえ」

「特製オレンジジュースウ？ あーあれかあ。笑嬢、コーラー飲めないーって泣いたとき、初めて作ってやって、それから来るたんびに頼んだ、金のとれーねー飲みもんな」

と、ニヤニヤしながら言った。

「もう！タロおじのいじわる！いつからそんな意地悪おじさんになったの？」

「アハハハ。嘘だよ。しかし今日はオレンジがないんだなあ。あ！よしじゃ今日は特性りんごジュースだ！ちよつと待ってるよ！」

と言いながら厨房のほうへ出て行った。

すると、タロおじが

「おーい。お前らこっちこい。今日はもう店じまい！貸切だから

「こっちでてこいや」

「ちえ、タロおじ勝手だなあ・・・笑。行くぜあつち。魔王持ってこい」

「はいい」

「はいよ。特製りんごジュース。」美肌効果たっぷり。」

「ありがとう」

笑が腕をのばして受け取ると、早速つけてきた、怜勇からもらったブレスレットがキラリと光った。

「お、笑嬢も色気つきやがったな。そんないいもんつけて。誰かい人にもらったか？うん？」

とニヤニヤして笑をおちよくってくるタロおじ。

すると笑は少し俯き頬を少しあかく染めはずかしそうな顔をしながら

「違うよ。タロおじったら。へんな事言わないで！これは怜勇がアメリカのお土産にくれたのよ」フンと横に顔を向けた。

「ふーん。クルオのお土産ねーん」

とニンマリ顔で怜勇を見ていた。

当の怜勇はまるで聞こえないかのように、タロおじに注いでもらった魔王を焼き鳥片手に口にしていた。

三人は昔話に花をさかせ、わいわいと楽しんでた。

ご機嫌のタロおじはとうとう18番の天城越えを歌い始めた。

その歌を聴きながら怜勇は

「俺、絶対マスターズ優勝するから。その瞬間を笑に見せてやるからな。」

「うん。がんばって。」
と、語った。

「あ、そうだ。それで思い出したんだけど、今度、内の局で」

スリート達の明日くって言う特番をするの。怜勇にも是非って部長が言うから、事務所に連絡入れてあるから今度打ち合わせに行の、よろしくね」

「いいぜ。打ち合わせになんか来て何すんの？」

「あ、出演交渉」

「いいぜ。もう出てやるよ。交渉こなくても、俺が出るって事務所に言うておく」

「ほんと？じゃ、契約書持っていくからサインして。一回ですんで良かったあ」「ニコ」

笑がまたまたとびきりの笑顔で喜んだ。

怜勇は、その笑顔をまた嬉しそうに微笑んで見ていた。

「おーい。お前ら、静かだなあ。何やってんだ。ささ 飲め 飲め。 笑嬢も魔王飲んでみる！うめーから。 なーいあ、クルオ」

「アハハ。タロおじ 楽しそう」

「ありや、だいぶ酔ってるな。明日は店休みになるんじゃない？」

「アハハ。ほんと」

「だけど、タロおじは、ずっとあの頃と同じ様に俺達に接してくれる。この町の人は俺を普通の22歳の男として接してくれる。ここに帰ってくるとホツとする。俺、この町が好きだ。この町の住人で良かったって、本当に思う・・・」

「うん。私も好き。 愁もいればもつと楽しかったのに・・・」

愁 元気してるかな？ちよつとは帰ってくればいいのにな」

「ああ ほんとだな」

怜勇に偶然、特番の出演OKをもらった、太郎庵の楽しい時は、明け方近くまで続いたのでした。

社会人編 ？（後書き）

楽しい時間を過ごした笑は次の日、二日酔いに悩まされるのでした。

同僚と四人とゴルフコースをまわる笑。そこに現れる・・・。

ポチッとお願いします

社会人編 ？（前書き）

何かがおきる少し前・・・
って感じでしょうか

社会人編 ？

「あー頭いたい！失敗した……。」

とぼとぼ、半分寝てるような顔で出勤中の笑に、

「おはよ！」バン と思いつき切り背中をたたいて凜が声をかけて来た。

「おはよ あまり大きな声出さないで……」

「ふーん」と言いながら凜はクンクンと匂いをかいできた。

「なるほどお。二日酔いね。珍しい！合コン嫌いだし。女子会の飲み会でもあんま飲まないのに。なんかあつた？」

「いーえ。とにかくくしばらく声かけないで……頭痛いから。」

と、ふらふらと先に歩いていく笑をみながら、あきれていた凜。そ

こへ月星TVの二大新人アナの一人の翠川基虎がやってきた。

「桜木さん。おはよ」

「あら、基虎君。おはよ」

「星野さんどうしたの元気ないみたいだけど……」

「アハハ 二日酔いなんだって。笑にしたらめずらしい。」

笑は、二日酔いの午前中をなんとか無事のりきり、やや通常の体調にもどりつつあつた。

午前中は、怜勇の出演交渉だったが、昨日返事をもらっていたため契約書にサインをもらうだけになったので非常にたすかり、

「では、海藤さんこれを読んでもらいたさき、サインいただけますか？」

「OK。わかりました。」

プルルル プルルル……

「はい。春川です。あ・それね……ちょ……あ、すみません。ちょっと外出ます」 そう・そ……で……

と、頭を低くぺこぺこしながら扉の外へと出て行った。

「おい、笑！お前二日酔いじゃねーの？」

「ねーのじゃないよ。頭割れそう。そういう怜勇は？」
「俺？あれぐらいじゃ、全く平気！」
「そう・・・うらやましい事で・・・イタタ」
と春川君が出て行ったとたん。小声で幼馴染モードでの会話になった。

「ところでさ、笑。今度の日曜日、グリーンパールゴルフ倶楽部でラウンドなんだって？」

「な　なんで知ってるの？」

「俺、プロだぜ。それにあそこは俺のホームグラウンド！知ってるだろ？」

と、ニンマリ右の口角をあげて言ってきた。

「そうよ！悪い？何年もクラブ握ってないのに、誘われたの。だから毎日練習行ってたのよ。」

「あ！そうだ。怜勇。翠川基虎　って知ってる？」

「ああ。笑んとこの男アナだろ？」

「そうなんだけど、高校の時。あの大会に出たらしいんだけど？」

「うん。そうだな。あいつも、うまかったからな。いつもそこそこの順位だったんじゃないか。で、それが何なんだ？」

「その人に、誘われたの！怜勇と愁と幼馴染だという事の口止め料として！」

「なに？」

笑は、怜勇の顔が一瞬厳しくなった気がして慌てて

「あー。二人じゃないよ。凜と凜の彼氏？かな藤見君は・・・ま、その子と四人で」

「ふーん。」

「じゃ、これサインしたから」

ハイと渡された。

『何？怜勇。急にどうしたの？』

「あ どうも・・・」

「じゃ、星野さん。僕はこれで・・・」
と急に立ち上がった

「じゃ、当日楽しみにしていますよ。楽しい番組になるといいですね」ニッコ

「な なによ 急に・・・」>ガチャ<「あ すみませんでした。
長くなってしまつて・・・」

と私と春川君の声がかさなつた。

『あ そういうことか。さすが怜勇すばやい!』

「あれ、終わつたんですか？」

「はい。じゃあ私達もこれで失礼します」

二人で頭を下げて怜勇の事務所を後にした。

春川君は、怜勇の人柄にひどく感激したらしく、さんざん褒めちぎつていた。

仕事が終わわり、凜と日曜日の話をしたら、日曜日は翠川君が9時に家まで迎えに来てくれる事にいつの間にか決まつたのかそういう事になつていた。散々自分の車で行くよーって、ダダをこねたけど、簡単に却下された。

また、ひとつ憂鬱な事が増え、せつかく二日酔いから完全復活した笑に、またまた頭痛が襲つたのは言うまでもなく、トボトボと元気がなく家路に向かう事になつた笑であつた。

そんな姿にいつまでも元氣よく手を振っている凜は、『なんだあ？まだ二日酔い直りきつてないのね。どんだけ飲んだのよ』

とお氣楽な思いで笑の姿が見えなくなるまで見送つていた。

笑は、なぜにここまで、お迎えごときでこんなに落ち込むかつて？

実は22年間のうち、男の子車に乗ったのは、父親 愁 怜勇。
なんとこの三人の車しかプライベートでは乗った事がないからなの
です。

仕事上ではやっと、ここ何ヶ月かで、仕事と割り切る事で乗れるよ
うになったのです。

しかも車の中では仕事の話しかない！と決めたからでした・・・。

社会人編 ？（後書き）

次回は、四人で楽しくゴルフ？

？ 楽しくゴルフ？（前書き）

更新遅くなってすみません。急激な暑さに体がダルダルで・・・暑さに負けず、がんばって投稿するので見捨てずお付き合いください

? 楽しくゴルフ?

とうとうゴルフ当日!

日曜日午前9時。

burrorrorrooooo-

家の前で待つ笑は、音のする方を見た。

向こうから真っ赤なスポーツカータイプの車がやってきた。

『まさか・・あれ? だとしたら、何年か前に流行ったトレンドイ
ドラマから飛び出た! ってこの事ね』

キュルルルル キキーッ

『やっぱり・・はぁー』

「おはよ。星野さん。」

「あ、おはよう。ごめんね。わざわざ」

「いえ。迎えにこさせていただいて光栄です。」

と、あの朝の顔の爽やかイケメンフェイスで、答えてきた。翠川基
虎。

笑は、作り笑いとばれないように、必死でいつもの笑顔をつくるの
だが、

『どうも引きつっているかも知れないな』 と思いながら開けてく
れたドアから車に乗り込んだ。

笑は少しドキドキしながら、爽やかな会話に少しづつ緊張も取れて、
ゴルフ場までの一時間弱の道のりを楽しんでいた。

ふと外に目をやると、懐かしい光景が見えてきた。ここは、パパと
怜勇のお父さんが怜勇と私を連れてコースデビューさせてくれたコ
ースで、それからは何度もラウンドさせえてもらってるコースだ。

何度 この道を通っても、初めて来た日の事を鮮明に思い出す。

怜勇は目をキラキラさせて早くつけばいいのに！とずっと言っていた。その反対に、私はと言えば、緊張して言葉数が少なくなっていた。

すると、怜勇は

「エミ。どうしたの？」

「うん・・・ちゃんとできるかな・・・」

「大丈夫だよ。僕がちゃんと一緒にいてあげるから！」って

ギョッと手をつないでくれた。そして ニコツと笑ってくれた。

その手がとても暖かくて、まだ小さい怜勇の手がやたら大きく感じて不思議な気持ちになった。

怜勇は、車の中で言ってくれた通り、ずっとそばに居てくれて、私のボールを探して打つてから、走って自分のボールのところに行き、打つ！という事をしてくれた。その時は、全く分らなかったけど、しばらくたって、あの時、怜勇は通常の二倍三倍歩いてた事に私は気づいたのでした。

「ね。そうだよね」

返事がないので、基虎はもう一度

「うん？あれ？聞いている？星野さん？」

「え？あ ああ そうよね」

「はー。そうね って聞いてなかったろ？」

「・・・ごめんなさい・・・。ちょっと昔の事思い出して・・・」

「ま、いいや。さ、もう着くよ」

「おーい。おはよう エーミー」

と、クラブハウスの入り口あたりで、凜が手を振って迎えてくれている。

その隣では、新見新が二つのキャディバッグを開けてなにやら確認している。

「おはよ。凜！自分の本数ぐらい自分でチェックしなよ！」

「だって、新がしてくれる って言うんだもん」

「でも、自分で見ないと何を入れたかとか、やっぱりこれ変えようとか・・・あるじゃん」

「いいの。私は。そこまでしたって代わんないから・・・」

「あそ。」

「よし、じゃ受付に行こうか」

翠川君が先頭で入っていった。

今日は、カートに乗ってキャディなしでのラウンド。

二台のカートに結局

新見桜木ペアと翠川星野ペアにわかれての事となった。

なんだか、久しぶりのラウンドだし。懐かしい思い出のゴルフ場だし。

楽しみになってきたな。

? 楽しくゴルフ? (後書き)

いよいよ ラウンド開始です。

そこで、思いもしない人物と・・・

？ 楽しくゴルフ？（前書き）

ゴルフ場でごたいめーん！
な・なんで？

？ 楽しくゴルフ？

ナイスショットー！

「さすがあーだね。ホラホラ次は笑だよ」

「うん」

ナイショット！

「ありがとう。次 凜どうぞ」

スコーーン

「わー！。あーん。最悪！ちよつと、新ー！。どっち行つた？」

四人がティーショットを打ち終わり、翠川君と藤見君はすばらしいショットで、私はまずまず。凜は一人ブータレしています。藤見君に半分あたりながら、ブツブツとセカンド地点を二人で

「あのあたりじゃね？」

といいながら、並んで歩いてます。

『凜 って、新の事は友達いがいのなんでもない！なんて言ってるけど、こうして見ると本当いい感じなんだけどね・・・』

「星野さん。さすがだね」

いつのまにか横に並んで歩いていたら翠川君が話しかけてきた。

「翠川さんこそ。さすがですね」

「ねね。僕も笑ちゃんってよんでいい？同じ部署の人は笑ちゃんってよんでるよね？」

「あ。別にいいですけど・・・」

「やったー。じゃ、僕の事もキトって呼んで。櫻木さんにも言っておいて」

と、超爽やかイケメンビームで笑って言う。

「うん。わかった。」

久々のゴルフは付け焼刃の練習がこうをなしたのか、そこそのスコアで楽しく前半のハーフを終える事が出来た。

昼食を食べにクラブハウスに行くと、なんだか騒がしい。

「何？すごい人ばかりじゃない？」

「ほんとね。何があつたのか聞いてこよう」

と、好奇心旺盛な凧はそそくさと、聞きに行ってしまった。

「ちよつとー。凄いわよ！ニュースニュース。今日は海藤怜勇が来るんだつてえ」

と、息をきらして走ってきた。

「あの 人だかりはファンクラブの人達だつて。隠密ラウンドだったのにつて。凄いですね。ファンの方々の情報網は・・・つて。この係りの人が言つてた」

『怜勇〜。わざとだね。太郎庵で聞かれたような気がしてたもんなあ。あんな急に練習していつ？どこでゴルフだ？つて。私、半分ボーツと答えたんだらうな・・・』

『でも、なんで来るのよ！神様・・・どうか ばつたり！つて事になりませんように・・・』

凧は一人興奮して、ばつたり会えないかな。で、教えてくれたりしないかなあ？なんて、うかれながら食事パクパク食べている。

そんな凧に対して、藤見君が、

「俺が教えてやるよ。凧はまだまだ海藤怜勇に教えてもらえる程じ

「やねー。俺で十分！」

などと、二人はにぎやかに食事をしている。

『ほんと、微笑ましい二人。こっちまで笑顔 になるのに恋人じゃないなんて・・・』

「さ、さ。そろそろ 行こうか。時間だぜ」

と、翠川君がポンと背中を叩いて席をたって行った。

後半のラウンドも楽しくゴルフが出来た。

スコアは午前中がんばりすぎたせいか、疲れてちよつとスコアが悪くなった。

それでも、帰りの荷物運びを四人で賭けていたので、ハンディを足したら最下位ではなくて良かった。

お風呂にゆつくり入り、クラブハウスのラウンジで座ってみんながそろつのをアイステイを飲みながら、

『よかった。なんとか怜勇に会わなくて。』

なんだかファンの大群は目にしたけど、本人とのニアミスは避けられた。

「キト、残念だったな。お前には珍しくスコア乱れたな」

「さー。キト君に運んでもらわなくちゃね、荷物」

「あはは。ほんと。ご苦労様。キト君」

翠川君は四人分の荷物をフラフラしながら運んでいる。

先の方を三人でワイワイ言いながらたまに振り向いて

「おーい。早くー」

とか手を振り呼んだりしていた。

「少し もったげるよ」

と二人に言いながら、

「きとお」

と後ろを振り返り走り出したら

「あ！笑！あぶな」

という凜の声が聞こえたたん、背の高い誰かにぶつかった。

「あ イタ。あ ごめんなさい」

と、誤りながら上を見上げると、そこにいたのは、絶対ファンや外では見せない冷たい微笑みの怜勇がいた。
すると

「いーえ。君こそ。大丈夫ですか？」

と、付き合いの浅い人なら素敵な笑顔と通る笑顔で、こけないように支えてくれた。怜勇は小声で誰にも聞こえないように

「笑。楽しそうだな」

耳元で囁いてきた。

「はい。大丈夫です。すみません。騒ぎすぎですよね……。」
と誤ると、怜勇ファンの凜が飛んでやってきた。

「きゃー、海藤さん！私ファンなんです。こんな時なんです、サインしてもらえませんか？」

と、寝ぼけた事を言う凜をじつと見た。すると怜勇は

「いいですよ。どれにします？」

と、王子スマイルで凜を悩殺していた。

「笑。笑もしてもらいなよ！」

な・なんですとおー。凜。私はいよいよーと言おうとしたら怜勇が
「あなたも。どうぞ。サインしましょうか？」
と聞いてきた。

早くここから立ち去りたい私は、翠川君からシューズケースをとり、
それにサインをもらう事にした。

翠川君は私が怜勇の幼馴染なのを知ってるので、下を向いたまま笑
いをかみ殺していた。

「ありがとうございます。またトーナメントがんばってくださいね。ホラ 笑も」

と、私の頭を手のひらで押して頭を下げさせた。

「はい。がんばります。ありがとうございます。」
と爽やか笑顔でさっさといった。

凜は、もうテンションあがりっぱなしで。うるさく三人でしゃべっている。

私も適当に相槌をうとながら、そっと怜勇がたちさった方を振り返った。すると、怜勇もこちらを見ていた。

『な なんだあ?』

と思つて顔を元に戻せずにいたら、怜勇はまたもファンが知らない不敵な笑みで

ニヤリと笑い手をあげて行ってしまった・・・のでした。

笑は

『あの、何かをたくらんだ笑みは何だあ?不気味・・・』
と、ブルツと肩を震わせたのでした。

？
楽しくゴルフ？（後書き）

次回、特番に怜勇出演！愁も久々登場！

？ 特番収録（前書き）

収録の日

全国にはねる・・・

？ 特番収録

「こんばんわー！『アスリート達の夢の共演。あしたへ』の時間がやってきました。司会のお 君を食べたい 笑わせ隊のお アナですホリです。じゃやないほうとか言わないで！必ず覚えて穴掘りアナホリです。」

ち言いながら二人の決めポーズ。つるはしとシヨベルで、穴を掘る格好をする。

パチパチパチパチ・・・

「アナ 今日スゴイ人達が来てますね〜」

「ですなあ。老若男女とわずトリコにしているのにいー！。嘘かほんとか週刊誌をにぎわしたあ。海 フンガ フガフガ・・・くるしい！」

「ホリ大事なところで、口ふさぐな！くるしやるが・・・ま ええわ。と、バスケ界のプリンス久々の日本メディアに出てくれるそうですし・・・。美人トランポリンナーも来てますよ。ジュールジュール」
ニターッ

「こら！きもいねん。なんやねん。その顔とよだれは！ 人変わってるやんけえおまえ！」

私と凜はこの番組の企画に携わったという事で、舞台の袖で色々裏方の仕事を手伝ったりしながら、番組を見守っていた。

「ねえねえ。この番組。この時間帯ひとり勝ちじゃない？だって。ゴルフ界の若大将三人衆でしょ？それに日本でメディアに露出したの四年振りのプリンス愁月君！美人のトランポリン選手ミホっち。その他・・・。ね？」

「そうね。お金かけたよね。部長なんて社運をかけた番組だあ！
なんて言ってたもんね。」

バタバタ休憩時の飲み物の準備したり、メイクさんに挨拶したり、見学に来られた副社長の相手をしていた部長に呼ばれて凜と二人挨拶に行ったりしながら、それなりの時間をすごして後、番組も残すところ、30分となった時、笑わせ隊の二人が恋バナトークに移っていた。

アナホリの好きなタイプを言って、アスリート達にタイプや意中の人がいるか？どうやってアタックするのか？どうやって射止めたのか？など、巧みなトークでうまく聞き出している。

かと思えば逆に非常にうまい切り替えしにアタフタさせらりして、ナカナカたいしたもんで、大盛り上がりの終盤を迎えていた。

「さーここでえ。みなさんお待ちかねのバスケット界のプリンス山村愁月選手・ゴルフ界の涼風王子海藤怜勇さん・みんなの萌え〜王女富永美帆ちゃんに聞いてみましょう！」

わー！ キャー！ キャー！

抽選で番組見学に訪れた100人の歓声につつまれた。

「まずは、やはり初スクープの海藤さん。週刊誌の事、この際正直に言っちゃってください。あなたの心を穴掘り隊。気持ち聞かせてえー！。ほんとの気持ちをおー！。いわせ たああああい！と」

派手なジェスチャーで怜勇にマイクを振った。たぶん・・・今日の一番の見せ場だろう

「ハハハ・・・そうきましたかあ？ なかなか僕に質問が来ないな？と思つてたんです。こないだの週刊誌の事絶対どこかで聞かれる

と思っていたので……。最後の最後とは……。参りました。」

「全くこの間の週刊誌の事は事実無根です。実際本当にたまたまあつちで偶然会つて……。食事しただけなんです。ま、こう言つても証明するもんがないので信じてもらえるかどうかわかりませんが……。」

とにかく僕はマスターズに優勝するまでは色恋沙汰は封印していません。マスターズ優勝が僕の夢ですが、それは僕の最大の夢を叶える為に絶対必要条件なんです。ていうか、僕が最大の夢を叶える為に架した夢なんです。なので、マスターズ優勝！という夢が叶うまで皆さん。暖かな目で応援お願いします。」

「海ちゃん！またまた優等生な答えをしてー！。ホリはそんなんで許せないよー！。ぜったい！何かを言わせ隊！」

すると怜勇が

「分かりました。それでは、一つ僕の秘密を教えましょう。愁！こいよ」

「へ？山村愁月くんと 何？ どのような関係ですか？」

ザワ ザワ ザワ

放送時間も残り少なくなつて、見学者達も何が起こるのかソワソワしている。

「OK！怜勇。」

愁はさつと柵を飛び越え怜勇の横に立った……。と、思ったとたん、怜勇が舞台袖に向かって歩き出している。

『何？なんで？もしかしてこっち来る？ 何？え？ え？』
と、思っているうちに、私の腕をつかまれて

「笑。おいで」
とにつこり微笑まれた・・・
隣の凜は目がもうこれ以上開ける事は出来ませんぐらいのびっくり
眼で、私の顔をみつめている。
もちろん部長も。メイクさんも。ディレクターさんも。他多数の人
も。

怜勇と愁の間に立たされた私は二人に肩を組まれ

「僕と愁。そしてここにいる月星TV社員の笑は、家が近所で小さい
時からの幼馴染です。三人で約束しました。それぞれの夢を叶え
ようぜ。絶対に！って。叶えるまではどんな努力も惜しみなくしよ
う！と。そして、この三人だけは応援し合おう！と。この写真覚え
てませんか？この写真が僕の今の支えなんです。この写真を見ると
昔三人で誓った事を思い出せてがんばれるんです。だから、僕に今
恋はありえないんです。恋はもう少し先ですね。信じてもらえます
か？」

「怜勇の言ってる事に偽りは無いと思います。僕も一人アメリカで
戦ってます。僕もNBAでエースポインターになる為に。心の支え
は欲しいですが、相手に辛い思いをさせてしまうなら、もっと自分
に自信がついたその時に、一緒にいたいと思う子を迎えに行きたい
と思います。と言う事で僕もまだまだ恋はさきですね」

「はー。そうですかあ。社員の笑さん？でしたっけ？今までスタ
ー二人と幼馴染と言うのと、あの有名な高校生カップルの女の方は
私です。って言うのは内緒だったんですかあ？」

「は。はい。ごめんなさい。騙したり内緒にしたりしようと思っ
たわけではないんですが、二人とも有名で。夢に向かってがんばっ
てて。なんか、言いくいのと邪魔したくない！っていう思いなど

が色々まじって……。すみません」

「でも、これですつきりしました。二人の応援にどうどうと行ける気がします。」

と、なんだか私まで巻き込まれてTVに映っちゃうわで。テンヤワ
ンヤのエンディングとなりました。

収録後どつと疲れて座り込んでいたところへ、部長がやってきて

「いやー。エンディング前の視聴率が最高を叩きだしたよ。24・
8%だったそうだ。」

とニコニコしながら握手をされて

「星野君は結構TV映りが良くてびっくりしたよ。」

と、言って副社長の元へ頭をさげながら向かっていった。

「笑……。ごめんよ。」

怜勇の声が後ろから聞こえた。

「俺、笑に疑われるのが一番いやだったじから。それにここでTV
で幼馴染って顔見せてたら、どうどうと会ってもしゃべっててもい
いじゃん。笑との関係を知らないよ、笑と一緒にいるところ見られ
ると、また写真にとられて……。笑にも迷惑かかるだろ？だから強
行手段だったけど……。ごめん。愁も。おまえと普通に今まで通りい
たいからって。この作戦に乗ってくれたんだ」

「うん。わかった。ありがと。もう普通にしていんだね。」

「おっ」

と、怜勇は、あの時写真のようなやさしい微笑みで頭をなでてくれ
た。

？ 特番収録（後書き）

とうとう全国ネットで怜勇との関係が暴露された。
ただの幼馴染として。

笑は、少し肩の荷が下りてホッとしたのでした。

? 落ち着いた日々へ・・・(前書き)

とつとつ、 怜勇 愁 笑の関係が表に出てしまいました。
さて、これからどうなっていくのでしょうか・・・

？ 落ち着いた日々へ・・・

翌日の新聞紙面三面記事欄や各局の情報番組のオープニングでは、「恋はお預け！海藤怜勇 目指すはマスターズ優勝のみ！ 今後はゴルフが恋人」と載り、スパガのRUKAとはお友達！以外の何者でもない！と芸能レポーターの分析も加えて結論づいた。

そして、月星TVは、私が社員と言う事で朝の番組「爽快 モーニング！」、社長命令で、「特番での怜勇と愁のびっくり告白について、司会者からの質問に答えるように！」
と言われた。

いつもはフレックスタイムなんで始業時間の規定はないが、だいたいい9時か10時に会社に着くようにいくのだが、入り時間が早い為、始発での出勤となった。

メディアに露出される事に、朝から苦痛ではあったけど、衝撃告白にまだまだ聞きたい事もあるだろう。とは思っていたので、覚悟は出来ていた。

それにこれで、今までなんとなく凜や周りの人に後ろめたさを感じていたので、堂々していられる様になる事に安堵していた。

メイクさんにきっちりTV用メイクをしてもらい、髪もセットしてもらいなんだか照れくさかった。

質問も、怜勇と愁の小さい頃がどんな子供だったのかと言う簡単な質問から、二人の初恋を聞かせて欲しいとか、多種多様な質問がされた。そして、一番ドキツとしたのがあの高校生の大会の時、二人は本当にただの幼馴染と言うだけで、お互いなんの感情も持ち合わ

せていなかったのか？と言う質問だった。

私は

「本当に二人は、幼馴染という関係でしかなかったです。小さい時から一緒にしかも家族ぐるみでの付き合いもあったので、身近すぎてそういう感情にならなかったんでしょうね……。怜勇はどうか分かりませんが、私は気になる人はいましたけど。」にっこり笑のチャームポイントの笑顔でしめくくった。

生放送の収録が終わり、どっと疲れて自分の所属の企画部に帰ると、上司や同僚が拍手で迎えてくれた。

「お疲れ！ 素人にはきついよね」とか

「お疲れ様！ちよつとゆっくりしてください」とお茶を出してくれた後輩もいた。

席に座って、後輩が入れてくれたお茶を飲みながら、ため息をつくと、凜の声がしてきた。

「笑。お疲れ。笑かわいく映ってたよTV。」

「ありがと……。あのお 凜？ ごめんね怜勇の事黙ってて……」

「ほんとっ！ 怒ってるんだから！」

「……。凜？ だよ。凜、怜勇のファンだったもんねえ。 はあ

ー」

「アハハハ。笑ったら。嘘だよ。何本気にしてんのよ！何年、私といるの？そんな事で怒るわけじゃないじゃない。笑の気持ち……。解る気がするし。幼馴染が偉大すぎだよ……。しかも二人も。ってねー？ 反対に同情するわ あははは」

「ふふふ ありがと。実は少し肩の荷がおりたの。あの時は、告白に度肝を抜かれたけど、今は二人に感謝してる」

「そうね。ところで、その代わりといっちゃん悪いんだけど、今度トーナメントが近くのゴルフ場であるじゃない？笑！私と一緒に」

くこと！いい？」

「いいよ。わたしこっさり行くつもりだったけど、もう堂々と行けるし。そんな事で許してくれるの？」

「だから許すも許さないもない！って言うてるでしょ」

「じゃ、もひとつお詫びに」と言ったら変だけど、実は愁がこの夏休みに試合を現地に見においで！って言うてくれているの。それで誰かと一緒においでってチケット二枚と航空券二枚くれるの。行かない？

泊まるところはこっちで探さないといけないんだけど・・・どう？」

「えーーーーー！いいのお！行く行く絶対行く。キヤー笑ありがとう」

と言って抱きついてきた。

「ちょ ちょ りん・・・くく うれしい・・・」

と、就業中と言う事をすっかり忘れていた私達二人は、声が大きすぎて。部長にデスクに呼ばれ大目玉をくらったのでした。

しかし、凜はすっかり舞い上がり、怒られている最中も上の空で、全く懲りていなかった。

と、こんな感じで翌日は、周りの目線や質問攻めに疲れたけど、それもほんど日に日に落ち着いていき、3日後くらいには通常の雰囲気に戻っていき、業務に支障もなく、平凡な日々になりました。

？ 落ち着いた日々へ・・・（後書き）

だんだんとお互いの夢に近づきつつあるのでしょうか。
怜勇と笑の関係に進展は？

初めて評価をいただく事が出来ました。感動です。評価して下さった方がありがとうございます。お気に入り登録してくださってる方ありがとうございます。まだまだ未熟な文章ですが完結目指してがんばります。エンディングをお楽しみに！

？ 怜勇 優勝宣言？（前書き）

トーナメントのお話。

？ 怜勇 優勝宣言？

いよいよ明日は怜勇のトーナメントの決勝ラウンド1日目。ムービングサタデー。

「えみいー。怜勇君が来たわよー！」

「怜勇君がんばってるわね。明日は応援行くわ。怜勇君のお母さんが来てやって！って。今日特別チケットくれたのよ。初めからお父さんと一緒に行くつもりだったんだけど。ありがとね。」

「こちらこそ、見に来てくれるなんてありがとうございます。今、優勝も狙える位置なんで狙いますよ！地元優勝したいですから」

「どうしたの怜勇！こんな時間に。明日もまだあるのに・・・」
笑は階段を降りながら声をかけていた。

「おう。明日来いよ！見に。」

「うん。行くつもりだけど？凜と一緒に。」

「ほい。チケット。これで来い！じゃ、その凜さんの分も」

「わ！いいの？特別チケットじゃん。ありがと」

「じゃ、怜勇君。明日ね」

と言いながら、笑の母は奥のリビングに消えていった。

すると、父と母の賑やかな笑い声と話し声が聞こえてきた。

「怜勇お。明日がんばって！二日とも見に行つてしっかり応援するからね」

「おう。じゃな。帰るわ」

「うん。」

さすが人気者の地元開催のトーナメント！

朝もまだ早いのに、こんなにくさんの人が来ているなんて。

「ねー。笑すごい人ね」

「そうね。怜勇見えるかなあ」

「おーい。笑ネエ！」

「おはよ。快！ 爽！ おじさん・おばさん おはようございます。」

「すごい人ですね。さすが怜勇って感じですね。」

「まあ今回は丸岡君と池端君もいい成績で決勝に進んでるから、おもしろいんじゃないかな。ゴルフファンとしては。」

「あつ！こちら、月星TVの同僚で仲良しの凜です。怜勇の大ファンなんですよ」

「で、こちら怜勇のご両親と双子の姉弟の爽と快」

「こんにちわ。櫻木凜です。ずっと笑が幼馴染だつて事全く知らなくて、最近の急展開にちよつと戸惑ってます。でもなんか、ご家族に紹介してもらえるなんて夢みたいです。ラッキーって感じですよ。」

「アハハハ」

と凜は相変わらず凜と挨拶をした。おじさん・おばさんも人当たりがいいので、素敵な笑顔で

「これからも、ファンでいてやってくださいね」と言っていた。

「あ、愁二イのおじちゃん おばちゃんも来た。笑ネエのおじちゃん達も。爽。気付いてないから呼び行こうぜ」と走って行った。

爽快達が、私の母の手を引っ張ってこっちにやってきた。

凜に愁のご両親を紹介し、さつきと同じような凜として答え、私の両親にはご無沙汰してます。と頭をさげていた。

「あのさ。私達、今日簡単なレポートしなくちゃいけないの・・・会社につまぐ利用されちゃって・・・だからちよつとあっち行くね」と練習コーナーの「方を指差した。

「爽快たちも行く?」

「ううん。いいや。仕事の邪魔しちゃ悪いし」

「笑ネエ。後でちゃんと爽達のとこきてね」

「OK。じゃね」

「なんか、海藤さんの暴露によって私のまわりもゴロツと環境が変わったから、さすがの私も少し戸惑い気味・・・」

「あら!めずらしい。やめてよ。嵐を呼ぶの!あははは」

「えみい!。どういう言い草よ!フン。でもさ、会社も会社よね!プライベートで来てるのに簡単なレポしてこい!なんて。なにがミッション達成祈る!よ」

「そうね。本番前だし。ピリピリしてるよね・・・三人衆! ま!見に行くだけ行ってみよ!」

「あ。いたいた!三人そろってる。」

「すごい人だからね。これは部長のミッションは無理ね。見た事だけの事を報告になるね」

「凜!ちゃんと感想書いておいてよ。私はパスだからね」

二人で遠巻きに見ていると、池端さんが練習を終えてこっちに向かってきて。前を通り過ぎた。

『やっぱ、すごいオーラ。怜勇とはなんか雰囲気違うけど、もってるオーラは同じように強烈ね』

と、通り過ぎるのを目で追っていたら、池端祐樹がクルツと踵を返してこっちに向かってきた。

『ん？もしかして・・・』

「や！きみ 怜勇の月星TVの星野笑さんだろ？怜勇の幼馴染で高校のときペア組んだ」

「え？あ！はい。この間は特番に出演いただきありがとうございます。しました。」

『うーっ。ファンの子の視線が痛いんですけど・・・』

「あ、私も月星TVの櫻木凜と申します。よろしくお願いします。」

「あ、よろしく」

「あの、少しだけ聞いていいですか？」

「いいよ。怜勇の幼馴染さんとその友達って事で優遇措置！」

って事で少し色々話が聞けた。凜が話をしている間に、ふと怜勇のほうを見ると、怜勇も私達に気が付いたみたいでこっちを見ていた。怜勇に手を振ろうと手をあげたところで、ピイツと冷たい顔で向こうを向いてしまった。

『どうしたんだろ。怜勇。あ、そっかファンがいるから手振ったりして慣れなれしくしたらダメなんだ。いくら、前よりオープンにしても良いとは言え、やはり、その時々弁えないとだめなんだよね』
簡単な話が終わって

「がんばってください。」

と言っで別れた。

凜は簡単にノートへ解りやすくまとめ、感想などを付け加えて整理してる

「凜。私トイレ行ってくる」

「OK。ここでまってる」

「うん。行ってくる」

トイレは結構離れたところにある。人も多いし、移動が大変だ。道順覚えておかないと、凜とはぐれてしまうので、キョロキョロしな

がら進んで行った。少し進んだ人の少なくなった木陰でふと、誰かに手首をつかまれた。

「誰？」と振り返ると、そこには怜勇が立っていた。

「怜勇」

「……」

「いいの？誰かに見つかるよ？」

「……」

「怜勇？」

「……」

「俺、この大会絶対優勝するから！久々に笑の前で優勝してやるよ。プロになってからは笑の目の前ではまだ優勝してないからな！」

「うん。楽しみにしておく。がんばって！」

「おう！俺しか応援するなよ！」

「わかった。口だけでも他のやつにがんばって！って言うな！」

「へ？社交辞令だよ？」

「でも。ダメ！」

「わかった……」

「じゃ、そろそろ行くわ！ちゃんと俺のラウンドについてくるんだぜ！」

と言いながら手を振り振りさっていった。

笑は、何がなんだかよくわからなかったけど、もともと怜勇の応援に来てるんだけど……

と思いつつトイレを済まし、凜の待ってるところへ急いだ。

「おまたせ」

「海藤君が俺今回優勝するから！って言ってたって書いてていいよ。って、去って行ったんだけど……。なんだったんだ？」

と、私につぶやいた。

私は何も答えず、しばらくして

「始まるから行こう」と歩き出した。

？ 怜勇 優勝宣言？（後書き）

一話で終わらすつもりだったのですが、二話にまたがってしまいました・・・

ごめんなさい。

評価よろしければお願いします。

反省材料と励みになります。

ポチッとよろしくです。

？ トーナメントリーダー（前書き）

かっこいい。かっこ良すぎです。海藤怜勇。

? トーナメントリーダー

決勝トーナメント 一番ホール
すごい人です。

「ちょっとおー。笑い。この人 人 人……。どうよ？見えないんじゃない？海藤君」
スタートホールは、絶対見送りたいのに・

「笑ネエ！こつちい！」
爽と快の声がある。声のする方に振り向くと、スタンドから二人が立ち上がって手を振っている。

「いた。ラッキー」
「凜！あそこ。席確保してくれてる」
と、スタンドの前席を指差しながら、腕を引つ張り小走りでスタンドに向かった。

二人で顔を見合わせて
「よかつたね」
と、笑顔で微笑んだ。

席につくと、快は凜の事が気に入ったのか盛んに話かけている。
凜はサバサバした性格で、物事をキビキビ話す。相手に対して対応が変わる事ないので、きつい感じを受けるけど、快はそういう人が話しやすいのだろう。子供として関わられるより、一人の人間として扱われるのが好きな子だから。
二人を横目に私は、もうすぐティーンランドに入ってくるであろう
怜勇を見る為に、入り口の方を見ていた。

『よかつた。間に合ったうえに、いいところから怜勇を見れて。怜勇
気付いてくれるかな……。』

会場がざわついた。怜勇が来たのだろう。

爽が、私の前にきて耳元で

「お兄ちゃん来たよ……」

と言った。

「うん。がんばってほしいね」

拍手で迎えた。爽も必死で拍手している

『ふふふ。怜勇はこんな爽の姿にメロメロなんだもんね』

『怜勇……がんばって！』心で手を合わせる。

怜勇がこちらに顔を向けて、観客に挨拶している。

爽が思いつきり手をふっている。

怜勇がこちらに気付いたような気がした。

一瞬、ふと動作が止まって爽に微笑み、私には、

『ずっと、しっかりと見てるよ！』

と、言うように口をギュツと結んで頷いた。

私も、にっこり笑って頷いた。

私達にしたのかどうかは、定かではないけど、爽と私は顔を見合わせる

せて
「気付いたね」

と二人で言い合った。

怜勇はきつと気付いてくれた。そう、二年前あの時のように……

二年前、取材先で行った先が、怜勇がトーナメントに参加してるゴルフ場の近くだった為、私は取材が終了してもすぐに帰らず、有給休暇を一日申請し、翌日怜勇の応援に誰にも内緒でこっそり行った。もちろん、怜勇にも連絡を取らずに……。その時も一番ホールをスタンドから見えていたら、今日と同じように観客に挨拶している怜勇がこつちを見た。でも、その時は今日ほどの確信は持てず、『気付いてないよね』と、思っていた。すると、その日の夜遅くに、私

の携帯に怜勇から電話が入り

「笑、ありがと。見に来てくれるなんて思ってもなかったよ。一番ホールで、笑を見つけた時は一瞬疑ったけど、何回見ても笑だった。アハハハ。そのおかげでいきなり一番からイーグルを取れて今日の大爆発のスコアを生み出せたよ」
と。。。

その時、私も本当にびっくりした。あの大勢の人の中で行くとも言っていない私に気付くなんて。

でも、あの人混みの中でも私を見つけてくれた事を知ってもものすごく嬉しかった。一人部屋でニコニコ浮かれていた時、コーヒーを持ってきてくれた母が気持ち悪そうな怪訝な顔していたのを今でも覚えてる。

そんな事があつた事を今思い出し、怜勇がこっちを向いて頷いた事に確信を持った。

『ね。爽！』

と、心のなかで爽に言うと同時に頭をなでて

「さ、グリーンの方へ行こうか。早く行かなきゃ、怜勇のいい所見れないもんね」

と、爽と手を繋いだ。

すっかり快に懐かれた凜は、スタスタ二人で先に歩いている。

いつも通り、礼儀正しく愛想よく、淡々とゴルフをしている怜勇。

ときには怖いぐらいの顔で真剣にラインを読む。

時に穏やかにファンに微笑む。

大事なパーセーブ。ここでボギーを叩きたくない場面での力強いガッツポーズ！

ここで引き離したい、イーグルパットが決まった、これ以上ない嬉

しそんな笑顔でのガッツポーズ！
すごい。ちやくちやくとスコアを伸ばしてる。他の追隨を許さない。

『怜勇！かつこいいよ……。すごいよ。まだ、明日があるのに・
・なんか、涙が出そうだよ・・グスン』

「笑ネエ？」

「うん？何？爽。」

「泣いてるの？」

「うん。違うよ！怜勇 かつこいいなあ と思って。ね爽？ し
かも 今、リーダーだよ」

「うん。怜勇にいい かつこいい」

最終18番ホール！PAR4！

「ナイス ショー！ツット！」

会心の当たり！グリーン端。イーグルチャンス！

二打目、イーグルパット。

怜勇が気合の入った顔でパット……

オーーーーーッ あー……

『あーん。惜しい……。』

しかし、余裕のバーディでホールアウト！

トーナメントリーダーで明日の最終日へ……

? トーナメントリーダー(後書き)

有言実行へ 怜勇!
発進!

お気に入り登録ありがとうございます。評価ありがとうございます。
これからも応援よろしくお願いします。

ポチッとお願いします。

？ 有言実行（前書き）

ちよつと同様した怜勇！

しかし、怜勇はきつちり有言実行

？ 有言実行

決勝トーナメント最終日。
単独リーダーの怜勇はもちろん、最終組！

今日はゆっくり、観戦しようとして、最初から一番ホールのスタンドに、怜勇の両親・爽快・愁の両親・笑の両親・凜と一緒に席に座っている。

快は凜の隣を陣取り、ゲーム好きの二人は新作ゲームの話で盛り上がってる。

爽はまた私の足の間に立っている。

「ねえ。笑ネエ。今日も怜勇ニイ気付いてくれるかな？昨日はちゃんとわかったって言ってたよ」

「そうねえ。気付いてくれたら手を振ろうね。」

そうなのだ。やはり思った通り、怜勇はちゃんと気付いてくれたのだ。

メールで。「どこにいるかすぐわかったぜ。サーヤと一緒にいたり？明日も応援よろしく。おやすみ」
って、届いたのだ。

怜勇が入って来た。相変わらず、爽やかな笑顔で観客席に挨拶し、手を上げている。

怜勇ファンクラブが大拍手！

私と爽は大きく手を振っている。

「爽あ。今日はさすがに気付かないかもね。この歓声と人だからじやあ・・・」

「ううん。大丈夫！怜勇ニイは絶対わかるよ。」

「うふ。そうね」

『ほんと、爽は怜勇の第一崇拜者なんだから・・・ふふふ』

ナイシヨット！

怜勇今日も会心のテイシヨット！

スウィング後、スタンドを振り向いて、爽やかな笑顔で挨拶し、少
してこつちに？親指を立ててグツジョブ！と口を動かした・・・？

「ね？笑ネエ。解つてたでしょ？」

と、爽は食べちゃいたいくらいの笑顔でドヤ顔を私にして見せた。

「ほんとね。」

と笑いながら、髪の毛がチリチリパーマになってしまつぐらい頭を
グリグリした。

5番ホールぐらいで、爽と歩いていると、

「あの一。星野さんですよね？」

と色黒の背の高い体格のいい男の人に声をかけられた。

爽と一瞬立ち止まつて

「爽、先行つてて、お母さん達かココ達と」

「うん。はやく来てね。怜勇ニイ、すぐ気付くからね」

と走つて快と凜に追いかけていった。

「あのお。どちらさまですか？」

「同じ職場なんですよ。僕」

「あ、そうなんですか？知らなくて・・・ごめんなさい。」

「いえ。部署が違うとなかなかわからないですよね？僕はたま

たまある、きつかけで星野さんを知ったんですよ」

「そうでしたか」

などと、急に声をかけられて、一瞬ひるんだけど、職場が一緒つて
事ではらく一緒に怜勇のラウンドを付いて回ることにした。

仕事の内容や、同じ大学の後輩が藤見君で、藤見君とはわりと一緒に
飲みに行ったりすることが多いとか。藤見君は密かに凜の事を思

つてるとか、いろいろ楽しい話をしながら、移動していた。

すると、どうしたんでしょ、急に怜勇のショットやパターが乱れだしたのか、観客のため息が立て続けに聞こえた。

「どうしたんだろ？急に調子が悪くなってるみたい・・・」

「そうだね。気がそれると言うか・・・今までのいい感じの緊張の糸が切れたって感じたね。珍しいね海藤君にしたら・・・」

「そうですね。」

『怜勇。どうしたんだろ・・・ あーあスコア追いつかれちゃった』

「あの・・・ごめんなさい。私、ちょっと前から応援していいですか？また、いつか藤見君たちと一緒に飲み会でもしましょう。今日は幼馴染として、応援来てるんで、このままじゃ、やばそうなんです・・・」

と、言い終わるか終えないかで走って爽に追いついた。

『え？怜勇！二位に落ちてる！なんで？最終ホールでバーディ取ってプレーオフ。バーディ必須か』

「爽・・・」

「笑ネエ・・・」

「大丈夫！怜勇はバーディとってくれるよ！」

「怜勇！」

ついつい大きな声で呼んでしまった。

怜勇はこっちを振り向いたけど、なんか冷たい視線だった。

『なに？どうしたの？』

「見てるから……。信じてるから」

と言って爽と笑って手を振った。聞こえてるかどうかわかんない。人が多いし皆、口々に応援の言葉を言っているから。

でもしばらくすると、怜勇は下を向きながらフーツと息を吐き笑って、爽と私のいる方に微笑み掛けた！

昨日の一番ホールのように、ギョツと口を結び何かを決意したようなすうどい目をして頷いた。

爽と私は目を見合わせて笑った。

怜勇は水を得た魚のように今までとは、打って変わって最終ホール、テイシヨット。ナイスシヨット。

昨日と同じイーグルチャンス！惜しくもイーグルならず。しかし、バーデイ奪取！

塩崎さんのプレイオフ決定！

爽と手を繋いでいた手に力が入る。爽も力が入っているのか、小さい手ながら力強く手を握り返してくる。二人の手の汗も尋常じゃない。

一回目、両者共PAR

二回目、同じくPAR

三回目、両者ともバーデイチャンス……

塩崎……惜しい！バーデイならず！

怜勇……怜勇の空気が変わった！ コロン……。

バーデイ！

二人が握手した。死闘に決着が付いた！

爽快二人とおじさんおばさんが近づいて行って。ねぎらっている。

拍手 拍手 拍手。

私も手が真っ赤になるくらい、拍手した。有言実行の怜勇が涙で見えない。

『おめでとう。かつこいいよ怜勇!』

心の中で大きな声で叫んだ。

涙で霞んでよく見えない中、爽と快が怜勇の手を引いて、こっちに来てる。

怜勇は爽やかな笑顔で、頭をさげ、もう一度ニッコリ笑って親指を立てていた。

あのポーズは高校時代に優勝した写真に二人でとったポーズだ。笑の目からは涙が止め処もなくながれた。

その夜怜勇からのメールで、

「笑が知らないやつと歩いているのに気付いて気がそれた……。俺もまだまだだな……。でも、最終ホール笑の姿が見れてまた、気合が入ったよ。有言実行出来て良かったぜ!サンキュッ」
と届いたのでした。

？ 有言実行（後書き）

もうそろそろ、完結に向けて後、数話の予定です。

？ 祝勝会（前書き）

更新遅くなってごめんなさい。

今日・明日で二話投稿したい！ と思っ
ていますが・・・。

がんばります。

？ 祝勝会

怜勇の地元優勝を記念して、海藤家・山村家（残念ながら愁不在）
・星野家で三家族ご用達の太郎庵で祝勝会を開いた。

「怜勇くーん おめでとう！」

「かんぱーい」

何年かぶりの近所会！怜勇の優勝にこじつけて・・・という感がぬ
ぐいきれないが・・・。
大変楽しくご機嫌に盛り上がってる！

「怜勇君よかつたわね」

「怜勇君のおかげで、久々に三家族で楽しく食事できるし うふふ」

「ほんと。怜勇さままね ふふふ」

「ここに愁君も居ると言う事ないのに・・・。春ちゃん（愁の母
親）も寂しいでしょ？」

「まあねえ。もう慣れたわ。愁月があつちにいる事で年に何回もア
メリカ旅行がパパと出来るしね アハハ」

と、母親達は昔のように飲み食いしながら会話を楽しんでいる。

父親達は同窓会さながらの盛り上がりで、ご機嫌ですっかり出来上
がっている。

そのなかに何故か、タロおじも混じって・・・。

この四人はすごく気が合うのだ。すっかりタロおじは店放棄状態！
この日は、最初から仲間に入るべく、タロおじは、貸切につき臨時
休業！の札をかかげ、なるべく自分も給仕をしないで、どっしり構
えて飲み食い出来るように、料理の類は早々仕込んでいたのだ。

そのなかで、忙しく動き回りながらも楽しそうなのが、爽快の二人！
店についたとたん、何やらタロおじにカウンターのの中に入れられ、
ビールサーバーの使い方を教えられていたのだ。そう。店員さなが
ら、生ビールを常に運んでいるのだ。

いつもは、出来ない仕事な上に、みんなに

「おう、ココ サヤ ありがとな」

「おー。うまいな。エライエライ」

と誉められまくるので、ご機嫌なのだ。

あと、もう一人、忙しく汗だくで焼き物を焼いているのが、太陽ひかり（
高二の愁の弟）だ。

太陽も、着いたとたん、タロおじにコソコソ何やら耳うちされてい
たのだ。

「おい。太陽。お前なんでそんな事してんの？」

と怜勇が聞いた。

「タロおじに頼まれたんだ。バイト料やるから、焼き物係りだけし
てくれ。好きなもの焼いて食いながらでいいからよ！ っ。来た
とたん焼き方教えられたんだ。」

と、タロおじの方を見ながら言った。

「相変わらずね。タロおじ。人を使うの上手いわね。見て爽快達。

何も知らずにご機嫌に働いてるわ」

「ほんとだな。昔から人使い荒いから……。俺達三人もうまく口
車に乗せられた事あったもんな」

「おーい。太陽！ 焼き鳥もってこーい」

「だってよ！ 早く焼け！ アハハハ」

「ヒカ。私にもししとう焼いて！」

「ほーいーい」

「えみ……。俺ちゃんと約束守つたる……」

「うん……。かつこ良かったよ。有言実行！さすが怜勇だね」

「有言実行の話。親達には内緒だぞ」

「ふふふ。わかった。ねえ？今年も賞金王ねらい？」

「さあ？それは後からついてくるもんだからな。」

「なんか、みんな楽しそうだね。こんな光景久しぶり。ワクワクし
ちやう」

「だな。祝勝会と言いながら、俺、うまく利用されただけっばいけ
ど……。ま いいかあ。アハハハ」

「ね？有言実行のお祝い何がいい？」

「え？笑 何かくれるのか？なんでもいいのか？」

「うん。怜勇みたいに稼いでないから、高い物はあげられないけど。
……」

「ほんとに、なんでもいいか……」

怜勇は、急に神妙な顔をして黙り込んでしまった。

『なに？怜勇……。そんな難しい事？高いもの？』

「じゃあ。来年のマスターズ。俺と一緒に同行して欲しい。同じ飛行機で同じホテルで同じ期間。一緒に居て欲しい。」

？ 祝勝会（後書き）

怜勇のお願い・・・

これはどう言う事でしょうか？

笑の返事は？

結果は後々の話にて・・・

？ 辞令（前書き）

愁に会い行く前の笑に突然の辞令です

？ 辞令

怜勇の地元優勝で盛り上がった祝勝会もおわり、それぞれが普段の生活へと戻って行った。

怜勇は、今九州のトーナメントへ遠征中！

「暑いねえ。ねえねえ笑。一週間後だねアメリカ行き！もう楽しみ過ぎて仕事にならないのよ〜」

と、凜が来週の愁の応援アメリカツアーで頭がいつぱいらしく、仕事OFFモードになっている。日ごろはパキパキと仕事をしてる凜にはめずらしい状況である。

「何言ってるのよ！ちゃんと申請してないと申請してる長期休暇、部長に取り消せられるよ！あと少し頑張れ！」

「ホイホイ。あー暑いし・・・ブツブツ」

と、手をひらひら振って仕事へと戻っていった。

「ありやりや、大丈夫かね〜」

笑はふうとため息をついた。

「怜勇。がんばってるかな・・・。来週からアメリカに行く事言えてないけど、いいよね・・・。怜勇も忙しそうだし・・・。」

笑は、手にある一枚に辞令を見つめていた。

「星野 笑 アナウンス部への移動を命ず」

「なんで？私が・・・。アナウンス部に行ってなにするんだろ・・・。」

」

「笑くん！」

「あつ 部長……。私……」

「おいで。喫茶室に行こう」

笑は、部長の後ろから付いて行った。

「何を頼む？ あつ！僕はいつものを！」

「じゃ、コーヒーで……」

「うん？プリンパフェでもいいよ 笑くんここのプリパよく食べてるだろ？気分のすぐれ無い時は、好きな物を食べるといいんだよ！
つて事でプリパで！」

「プリパって、部長さんたら。フフフ。若い子ぶっちゃって。かしこまりました。少々お待ちください」

「どうしたんだ？何か聞きたいことあるんじゃないか？」

「……」

「お待たせしましたあ」

プリパとコーヒーが来た。部長は、笑が口を開くまで急かす事なく、
コーヒーを美味しそうに飲んでいる。

「うん？ ささ、とけるよ！食べなさい！笑くんが遠慮するなんて似合わんよ フォフォフォ」

と豪快に笑っている。

笑は、苦笑いを浮かべ、大好きなプリパを一口食べると口を開いた
「部長？私、アナウンズ部に行つて何するんでしょ？」

「やはり、元気なかつたのは、その件か。レポーターとして一年間
がんばって欲しいそうだ……」

「私がですか？急になんで？ずつ企画しかした事Bないのに……」

「うん。君は自分の事をどう思っているのか知らんが、結構視聴者に君のファンがおおいんだ！あの、特番でTVに少し映っただろ。あれからあの女の子は誰なんだ？とか。もっとTVに出せ！と言う問い合わせや意見が局に多数寄せられていてな……。私は反対したんだが、上層との話し合いを重ねた結果、一年のレンタル辞令と言う事で、話がついたんだ。君が表舞台に立つのが嫌で企画を受けた事をよく知っている……。私の力不足でこういう事になってしまったて……。すまない」

「部長のせいじゃないです。頭を上げてください。すみません。私こそ暗い顔して……。」

「あの、本当に一年でいいんですか？」

「そうだ。一年だ」

「わかりました。」

と、笑は言ったとたん、モクモクとプリパを食べ始めた……。

その、豪快さに部長は目を大きくあけ、啞然と見つめていた。

あつと言うまにプリパをたいらげた笑は、さっきまでの憂鬱な顔は影を潜め、いつもの満面の超特級笑顔で

「一年間、レポーター！おもいつきり楽しみます」

と手をおでこの横にあて、敬礼ポーズをとってみせた。

「そうか。その調子！笑くんらしく！頼んだぞ」

『すまない。無理をしてるんだな……。しかし、君ならきつとやり切れる！』

と、心の中で詫びを胸に、しっかりと握手した。

「準備や何やあるだから、この一週間はゆっくり移動の事に力を入れるといい。そして、こころおきなくアメリカ旅行に凜くんと呼びなさい」

「はい。ありがとうございます」

それから、少し怜勇の話や愁に会いに行く話など、他愛もない話を

して、喫茶室を後に企画部に戻っていった。

すると、ドアノブに手を掛けながら

「席はこのままにしておく。補充人員も入れない！一年後、いろいろ体験して大きくなって帰ってこい！待っている！笑くん」

と、部長の背中越しに聞こえた・・・

？ 辞令（後書き）

次回は、凜とのアメリカ旅行編
またまたドタバタ旅行になりそうな予感！

？
アメリカ旅行？（前書き）

ちよつと日本を離れて、アメリカ旅行のお話。

？ アメリカ旅行？

急な移動に凜がびくつきりして、部長に噛み付いた私の移動の準備も済み、今凜と二人アメリカ旅行中！

ケネディ空港についた。

「うーん。どこだろ？愁が迎えに来てくれるはずなんだけど……」

と、キョロキョロしていると、背が高く色の黒いシルバー色の短髪の男とがっしりマツチヨマンの髭の男に私と凜は腕を？まれ、真っ赤なオープンカーに乗せられた……。

『え？嘘！何！ど・どうしよ……』

二人声を合わせて

「ギヤーツ」

と声を発しようとしたところ、口を手で塞がれた……。

凜と目を合わせ、頷き、同時にその塞がれたてをガブツと噛み付いたすると、

「おいおい！落ち着いてくれよ！いてて！」

と、言いながら銀髪の男は帽子をぬいでこっちを見た！

「し 愁！」

「オーノー！ジャパニーズガール！ツヨイネ」

「愁！どうして？そんな格好？ わからないじゃん？この間のＴＶで見た髪の色と違うよ？」

「色変えたの！で、少しは変装しないと、俺達ちよつとした有名人だから！ あ それとコイツはチームメイトのボブ！」

「ヨロシクデス アナタ エミ！ アナタ リン アツテマスカ？」
「そう！あつてるわ！私凜。こつち笑！あなた日本語上手ね？」
「ジョーズ？ナンデスカ？エイガデスカ？」
「あはは。上手！うーん！グッド！ OK？」
なんか、さすが凜！初対面の人なのにすっかり懐いてる！一瞬、人攫いに会ったのかと、ドキドキしてパニックに陥りそうになったのは、つい10分程前の事なのに……。

「ほんと、ボブって日本語上手ね。」

「あいつ、すごい日本贔屓なんだ！ワイフもジャパニーズガールがいい」と言ってる。

「それで、俺が日本語の先生で、ボブがこつちの生活の先生！気が合うんだ！」

それから、簡単に変装した愁とボブと四人でニューヨークの街を觀光した。

後からわかったことだけど、愁の銀髪はその日だけ染めたもので、ボブの髭も付髭だった事が後でわかった。髭モジャの熊五郎みたいだったボブは髭を取ると、ブルーアイにシャープな顎のラインのイケメンだった。チームで一 二を争う人気ぶりらしい。

久しぶりに会った愁は

「どう？ 怜勇とはなにかあった？ 関係がかわった？」

「へ？ どういう事？ うーん。何かあった？ 何も無いなー。あ！ そうそう。地元優勝したの知ってる？」

「うん。親がこの間こつち来て、そう言ってた。タロおじの店で祝勝会したんだろ？」

「そうそう。楽しかったよ。愁が居たらもつと楽しかったのに！ つてみんな言ってた……。あ、まあまあそれは別として、あの優勝有言実行だった」

んだよ。みんなには内緒な！って怜勇言つてたけど、愁だけには教えてあげる。私に、絶対地元優勝するから見に来て！ってあのトーナメントに呼んでくれたんだよ。それくらいだよ。何かあったとしても」

『ふーん。あいつ。とうとう動きだしたか！？来年のマスターズくらいおもしろいかもな』

と、笑の言葉を聞いてニヤツと笑う愁でした。

「何？愁気持ち悪い！でもイケメンは幸せね。意味不明な笑いをしても、キヤーツってかっこいい！って騒がれるから。ほんと、不公平よ。ブー」

「アハハハ。笑も十分かわいいじゃんか！」

「そんな事言うの愁だけよ。愁は女の子なら誰にでもかわいい！って言うしね。フン」

「ナニハナシ シテマスカ？」

「笑がかわいい って言ったのに。フンって怒るんだこの姫は」

「オーノー。エミ カワイデスヨ シユウ ホントノコト イツテルデスヨ」

「ま！ボブまで。さすが気が合う同士ね。軽さまで一緒ね・・・クス」

「オー エミ ソノ エガオ イイデスネ。トテモ ステキナカオ シテイマス」

その日は、ちょっとした観光をして食事をして、ホテルまで送ってもらって、さよならをした。

「明日は、俺達の練習見に来てよ。迎えにくるから！」

「リンモ キテクダサイ ワイ ガンバレルカラナ」

と、二人は手を振って帰っていった。

「ワイ っ。自分の事よね。なんで？ ワイ？」
「きつと、愁よ！日本の若い子は自分の事を ワイ っって言つとかなんとか言つて騙したのよ。きつと……。愁ってちょっと、そういうところあるからねー フー」

明日は、愁のチームの練習見に行つて、お土産を見に行こうねと、話して二人は夢の中へ落ちて行つた。

？
アメリカ旅行？（後書き）

次回、あれは？愁の彼女？金髪そばかすの元気印ガール登場です。

？ アメリカ旅行？（前書き）

愁と久々の再会を果たし、たくさんいろんな話をしたかった笑ですが、それより愁の・・・
発見をしたお話

？ アメリカ旅行？

昨日は疲れていたのだろう。

二人ともピロートークの途中で夢の中へと誘われた。

「おはよ」

「うーん おはよ」

今日の練習観戦は、夕方からなので、午前中は凜とシヨッピングに出かける事にした。

五番街を練り歩き、大好きなブランドのティファニーですつと欲しかった物を買った、他のブランドも見てまわった。両親 爽快達 怜勇の両親 太陽 愁の両親 タロおじ 部長等のお土産選びに奮闘しながらシヨッピングを凜と楽しんだ。

『後は怜勇の・・・何にしよう・・・』

「ねえ凜？藤見君には何か買ったの？」

「まだ。あいつさあ。お土産待ってるからねー！。なんて言うのよ。餞別もくれないのに・・・」

などと、文句を言いながらも心の中はちゃんと藤見君にびつたりのお土産を密かに考えてるようだ。

と、いろいろ見て回っていると、ディオールのお店について。ディオールも笑の好きなブランドの一つである。怜勇が中学の頃海外遠征に行つて笑に買つて来てくれたお土産がディオールのキーホルダーだった。今でも大事にオルゴールの中にしまつてある。その事がきっかけで好きになつたブランドである。

そこで素敵で男性用のネックレスを見つけた。

凜はその特別待遇にメロメロで、足が今にもスキップをしそうになつていた。

愁の正面から、ポニーテールのチアガール姿の女の子がやってきた。「ハイ！ シュウ！」

「おう、キャロル！ もう練習終わりかい？ オレの練習見ていくだろ？」

と、英語で話している。

いつもの軽い愁とは思えない真摯な受け答えをしているし、瞳に暖かい思いを感じる。

『愁！もしかして……。』
と、思っていると、

「ハイ！ YOU エミ ね？ シュウ ガ イツモ YOU のコト ハナシマス。 エト レオ？ ト 三人 BEST FRIEND ッテ」

「YES MY NAME IS EMI SYU PRAY
IS BASUKE TTBALL IN JUNIOR HIS
CHOOL」

「エミ ニホンゴ OKネ シュウ ニ センセ シテ モラッテ
マスカラ」

「へー 上手だもんね。 キャロルさん。 私も愁みたいにキャロル
って呼んでいい？ こちら リン。 私の仕事仲間。」

「HOW DO YOU DO リンって呼んでね」

キャロルはとても人懐っこく、元気な女の子だった。愁のチームのチアガールのリーダーなんてかっこいい。

アメリカに留学したての頃の愁の第一印象はキャロルにとって最悪

だったそうで、大嫌いだったそうだ。

チャラチャラしてて、飄々として、つかみどころのない青年で、慣れ慣れしくて、練習もみんな一生懸命しているのに、なんか不真面目に見えて・・・なのに、レギュラーポジションを軽々とつて。みたいな感じで本当に印象が悪かったよう。ところがある日、遅い時間の体育館に明かりが付いているので、忘れものを取りに来たキャロルは、体育館を覗いたら、そこに愁が汗だくになってストイックに一人でモクモクと練習をしていた。それをみて影では努力を人一倍してるんだ！って思って少し印象が変わったんだって。すると毎日、日を追うごとに愁を見ていると、今まで気付かなかった意外な面が見えてきて・・・。

って話してくれた。

笑は

『うん？これは 何かあるな！愁に詰め寄って聞いてみなくては！』と、心の中で薄笑いを浮かべた。

今もキャロルと愁は楽しそうに話してる。

『愁ってあんな顔して女の子と話すんだっけかな？日本に居た頃は怜勇よりは愛想いい感じで話してたけど、どこか心がないと言っか上辺だけでいい人的な顔だったような。あまり愛想よく話さないけど怜勇の方が心がある感じがしたもんなあ』

と笑は思いながら、楽しそうなイキイキした愁をみつめていた。

そう、キャロルは今まで愁の周りにはいなかった、意見と意思をはつきり持った元気な男の子っぱいさっぱりした女の子なのである。赤毛でポニーテール。少しそばかすがあるけど、グリーンの瞳で笑顔がキュートな綺麗というよりかわいい感じの女の子である。ちなみに本人は全くモテないと思っっているけど、チアガの仲間内ではファンクラブまであるモテモテガールなのだそうで・・・。

アメリカ滞在は、愁の練習試合観戦・愁の恋愛？―（これは、まだまだ本人達は気付いていない関係。でも笑は毎日の二人の言動により二人の心の中の気持ちをしっかり悟ったのでした。）と観光・ショッピングに凜と二人楽しい一週間の休暇を満喫したのでした。

？
アメリカ旅行？（後書き）

愁の近況を土産話に怜勇に会うのを楽しみに日本へ帰る笑

？ 土産話（前書き）

付き合っていないのに、告っていないのに、なぜかどんどんラブラブモードになって行く二人。それはお互いすこしずつ大人になっているから。

〃
〃
〃
〃
〃
〃

「うーん。ついたあ。楽しかったけど、やっぱりちょっと疲れ
たね。笑 お迎えは？」

「来ないよ。凜は？誰かくるの？」

ニツコリ笑って指差しながら

「ほら あそこ」

「うん？あれ 藤見くん。」

「そ。休みだから迎えいくって言うてくれたから。笑も乗ってきな
よ」

「ええ？いいよ。タク拾うから。じゃね。バイバイ。藤見くんによ
ろしく」

「そうう？笑も乗ればいいのに。新喜ぶのに。新、笑のファンだか
ら」

『凜？何言つてんの。藤見くんの一番のファン。ううん。思い人は
あんた。凜だから！藤見くん可愛そう・・・凜にはまだまだ気持ち
伝わってないわね』

「ハハハ。じゃまた。明日はゆっくり家でくつろぐわ
と、お互い手を振って別れた。

『さて、タクシー乗り場は？』

キョロキョロして見つけたタクシー乗り場へ向かった。

『げ！結構並んでるな・・・しかたない。並ぶとしよ』

並んでる間にスーツケースに腰掛、母親に空港に付いたからタクシ
ーで今から帰る事を伝える為携帯メールを打っていたら

《パーン》

と、ホーンの音がした。タクシー乗り場に並んでいた数人が一斉に
乗車口へ乗りつけた真っ赤なスポーツカーを見た。もちろん私もそ
つちを見た。

『へ？なんか見覚えある車だなー』

「笑！お帰り！帰るぞ！乗れよ」

『怜勇おーい。目立ちすぎい……。ここにいる女子達が貴方の事を見る目がハートですからあ』

女子全てが

「誰？笑ってどのこ？」

とキョロキョロしてますからーい。

今ここで、うんって出て行けませんからあーい。

と下向き拳動不審行動をして、

『タクシーで帰るから気付くな！早く去れ シッシッ』

「おい！笑！その後ろのほうにいる。シャネルのサングラス掛けてシャネルのミュールを履いた。真つ赤なミニスカっ娘。早くこいよ。タクシーが困ってるだろ」

またまた女子が今度は男子も一斉に。そう後ろに並んでて俯いてい
る笑を見た。

『おーい。やめてーい。皆の目がキョワイーい』

「ちよつと。あんたの事じゃないの？」

『つて。そうです。私が笑です。うう』

「あ。そうみたいですな……。ちよつと必死でメール打ってたも
んで聞こえませんでしたあ。アハ アハ」

つて。急いで荷物を持って怜勇の車に駆け込んだ。痛い 痛い み
なさんの目が痛い。

「笑 おかえりーい」

って怜勇は自分のサングラスをはずそうとして手を掛けた・・・

「ダメー！早く出して。サングラスははずすなー！」

と背中をポカポカたたいた。

「はやく はやく はやく」

「え？ああ わかった」

ブロロロロ・・・

キツ笑は怜勇を睨んだ

「どうして来たの？」

「笑ママから聞いた。到着時間・・・」

「あのさ・・・。怜勇。あんた有名人で知ってる？よね」

「来てくれるなら、早くにメールしてよ。場所、目立たないところに設定するの・・・」

「笑。びっくりさせてやろうと思って」

「普通に目立たなく来て！しかもサングラスははずそうとするし・・・

」

「あー。あれはポーっとしてて」

「嘘！わざとでしょ！わかってまんまと罠にのった私。何回もひっかかる・・・落ち込むわ」

「アハハ。いいじゃん。笑らしくって」

「ふんっ！」

ニコニコすながらまつすぐ前を見て運転してる怜勇が口を開いた。

「えみ。改めて・・・おかえり」

「ふん。何よたかが一週間よ」

「俺、今回ツアーなかったから家にずっといたんだ。待ってるのって長く感じるな・・・」

「ふん。そうっ？」

「ハハハ。で、楽しかった？愁 元気だったか？」

「うん。元気だったよ。それでね。愁つたらね。かくかくシカジカ・
・・・」

「へー。今度俺もそのキャロルちゃんに会ってみたいな。今度は俺と二人で一緒に行くか？愁んところ。な 笑！」

「うん。うん。行こう！行こう！いい子なんだよ キャロル。それでね・・あーでね・・」

笑は

『なんだ？なんか、また怜勇ペースに嵌って普通にしゃべってる？しかも、一緒に愁のいるアメリカに行く？私、返事しちゃった？もしかして。？？？？？まいいか。二人きりじゃないよね』

と怜勇と会話しながら ふと思い、
怜勇は

『さすが、笑。話に夢中で、俺が何気にアメリカに二人で行こうって言ったのに、軽々しく返事しやがった。きつと今頃頭の中で、あれ？って思い直してるんだろうな。クツクツクツ』

『ま、その前に来年のマスターズに付いてきてもらって・・・の事だけ。俺がんばらねば。』

車で、笑はしゃべりっぱなしであった。怜勇はそんな笑の話を樂しげに聞いていた。

星野家に到着したら、笑ママが怜勇にお礼を言い、

「お茶でも飲んで怜勇君。笑の部屋に運ぶから」

と言ってくれたので笑の顔を見ると、コクコク頷いている。まだまだ土産話をしたいようだ。そんな時間も大好きな怜勇は笑の荷物を部屋に運んでやりながら一緒に家にあがった。

「怜勇。お土産話もまだまだあるけど・・・。ハイこれ。」

「デイオールの店で見つけたの。トーナメント中でもつけられるかなって思っで・・・。スポンサーの制約があるからダメかな・・。」

「イヤ！大丈夫だよ。ありがと。大事にするよ」

「うん。怜勇がはじめて海外ツアー行って買って来てくれたのダイヤモンドだったんだよ。覚えてる？だから私も初めての海外旅行のお土産はダイヤモンドにしたの　ふふふ」

「スポンサー　なんか言うだろうか。でもこれは絶対つけて出る！承知させるよに話をしよう」

笑にもらったネックレスを拳で強く握り心に誓う怜勇であった。

ペアのネックレスを笑が持っている事をこの時はまだ知らない怜勇である。

笑も、女性用のネックレスを自分につけるのはまだ先の事。それまでは、怜勇にもらったキーホルダーと一緒にオルゴールの中に大切にしまっておくのであった。

？ 土産話（後書き）

怜勇のマスターズに秘めた決意とは・
いつになったらわかるのか・・・。

? お互い楽しいね(前書き)

- ・ 凜と笑
- ・ アメリカから帰って三カ月後。仕事が一人ともいい感じで

？ お互い楽しいね

アメリカ旅行を終え、2日程ゆっくりしレポーター一日目として出勤してから早や三ヶ月が経っていた。

笑は、はじめこそドキドキして

『こんな私できるのかしら・・・』

と思いつながらこなしていた仕事、今まさに楽しくてしょうがない。笑を企画室から引っ張り出し大抜擢したプロデューサーも、笑の人氣レポーター度に大満足していて、さすが鬼の天眼！神前プロデューサーと名を派していた。

凜もイキイキしている笑を見て

『もともと持つて生まれた天性ね！なのに何故今まで裏方がよかつたんだろ・・・』

と思っていた。今日は久々に笑が局勤めの日で一日局にいるという事で、二人はランチの約束をしていた。

「笑！こつちよーリー」

と、凜が大きく手を振って呼んでいる。

「ごめん。まった？」

「ううん。さつき来たところよ。それより毎日充実してそうね。レポーター役も板についてきたし。」

「まあね。楽しいわ。いろんな物見れて。いろんな人に会えて。なんか新鮮」

「表舞台、あんなに嫌がってたのに嘘みたい」

「ほんとに嫌だったのよ。恨んだわよ。神前さんを。でも今は感謝してる。怜勇と愁を昔からみてたでしょ？いつも誰かに見られて、息苦しいだろうなって。私は嫌だなんて。怜勇とゴルフの大会出て優勝して、しばらく色々言われたり追いかけられたりしたの。たっ

た一回ですよ。だから・・・」

「そっかあ。でもそれが何故？」

「アメリカで愁に会ってかな。愁も結構日本では無理してる感があったのよ。たまに。私には本音でウゼーッ って言ってたし。でもアメリカの愁はつき物が落ちたみたいに、根っから明るく笑ってた。キャロルとも本当に普通に付き合っていて。変わったな って。何がそうしたのかわかんないけど、きつと何かを吹っ切ったのね。だから私も。笑で居ようって。TVに出ても私は私で笑として居ようって思ったらなんか、肩の荷が降りた？って感じかな」

「ふーん。ま、何よりイキイキしてて嬉しいよ」

「うん。ありがと。 って 凜こそ おめでとう！ドラマ企画通ったって？」

「うふふ。ありがと。 やつとって感じ！」

「凜はずっとドラマがしたい！って言ってたもんね。夢叶ったね」

「サンキュ。今日はゆっくり昼から乾杯しよ！笑も今日は時間いいんだよね？」

「いいけど。凜は忙しくないの？」

「いいの。今日はホラ笑と会ったの言ったら。部長がゆっくりしてこい！見逃してやるよ！って」

「わーい。さっすが部長。じゃ昼から乾杯 行きますか？」

二人はほんの少し贅沢にHOTELのランチに向かったのです。

『凜 良かったね。夢に近づいて・・・私の夢はいつ叶うんだろ・・・』

『怜勇は何ヶ月後かのマスターズで夢を叶えるんだろうか・・・』

凜の話を楽しく聞きながらも そんな思いがこみ上げる笑であった。

？
お互い楽しいね（後書き）

次回、いよいよ怜勇についてマスターズへ出発です

? いよいよマスターズに向けて ? (前書き)

マスターズ出発を後数日に控えての笑は・・・

? いよいよマスターズに向けて ?

あれから数ヶ月。

怜勇はマスターズ優勝に向け、合宿・練習と大忙しの数ヶ月を過ごし、笑はそのマスターズに同行して暫く休みを貰うので、その分あつちこつちとレポーターで飛び周り殆ど実家には帰っていない状況であった。

疲れた体を温泉で癒し、眠ろうとした笑の携帯が鳴った。

「もしもし?」

「あー。怜勇どうしたの?久しぶり!.....」

「うん。わかつてる。行くよ。付いて行けばいいんだよね?足手まといじゃないの?優勝したいんでしょ?私行ったら気が散るんじゃないの? うん。うん。そう。わかった。うん、じゃあ ばいばい」

怜勇は一カ月後に迫ったマスターズ行きの事の念押しに掛けてきたのだ。

ここ数ヶ月、私が実家に帰ってないことで、少し心配していた。休みを貰うためだからって言えば納得してくれたようだ。

休み明けからは少し仕事を減らしてもらう話は、もう神前さんに言っている。

忙しく数をこなしているだけで、以前の充実感が得られなくなっていると感じているから。

神前さんもそれには理解を示してくれた。ありがたいと思う。

なんとかマスターズ同行前の仕事を全てこなし、明日から1ヶ月の休暇に入る。

帯でしていた番組のレポーターの仕事も番組編成でこの間の収録で

最後となった。少し寂しい気持ちもあるが、新しいことへ挑戦をする為の充電期間で番組を卒業します！と紹介され、スタッフからの花束サプライズで涙涙の卒業となったが、気持ちを落ち着かせることが出来た。

凜の部署を覗いて帰る事にした

「こんにちはー」

「うわー。笑さん！お久しぶりです。今日はどうしたんですか？」

「うん。ちよつと久しぶりに覗いてみようかな。って思ってたみてみたの。凜いる？」

「いますよ。」「あ、凜さーん！」

手を振って笑を指さす。

笑に気付いた凜が手を振りながらやって来た。・・・何故かその後ろに部長も来ていた。

「よー！星野！元気か？1ヶ月程休んだって？」

「あ、部長。ご無沙汰してます。そうなんです。充電期間です。アハッ」

「そうか……。やっぱりきつかったか？表の仕事は……。画面を通して見る限り、イキイキしてるようには見えてたけど、ずっと気にはなってたんだ……。お前嫌ってたからさ……。最後は納得して移動してくれたが……」

「いーえ。本当に楽しかったんですよ。色々行けて、いろんな人にめぐり会って。感謝してます。部長。いい経験させていただいて。だから気にしないでください」ニッコリ

「そか。ありがと。お前の笑顔にはいつも本当救われるよ！ま、ゆつくりして行ってくれ。私は席に戻るよ！凜くん！喫茶室行ってもいいぞ」

「はーい。ありがとございます。行こー！笑」

「うん。相変わらず部長は優しいね。」

「ほんと、上司が部長でよかったよ。家庭でも奥様にも優しく、子供達にはいいお父さんらしいよ！月星TVのおしどり夫婦で有名でベストフアーザーでも有名なんだって」

「へー。わかる気がする。私もそんな風に言われる夫婦になって素敵な家族を持ちたいな」

「何？笑 結婚したいの？彼氏でも出来たの？」

「はー？違うよ！いずれ！そういう時が来たら！って事」

相変わらずの二人はいろいろ話しながら喫茶室でお茶をしてたくさん話、5日後に怜勇についてアメリカに行く事を話した。

凜にも決勝チケットを渡しているので決勝日には行く と言ってくれた。残念ながらホテルは別になってしまったが、どうも近くのようなので、連絡を取り合うよう約束をして別れた。

その夜、怜勇から電話がはいった

「もしもし・・・あ 怜勇」

「笑 お疲れ！ しばらく休暇だろ・・・」

「うん。」

「一緒に行こうな。俺。今年絶対優勝するから！お前の目の前で！しっかりと見てろよ！」

「うん。あのお・・・」

「何？」

「えと・・・。ホテルなんだけど・・・」

「うん？」

「怜勇と一緒になんだよね？」

「そうだよ。」

「あの その 部屋は・・・」

「は？ 一緒に決まってんじゃない！何？意識してんの？幼馴染じゃ

ん。気にしねーだろ？昔はよく泊まりっこしてたじゃん！親父もいるし……」

「は？ダメよ ダメ！もう私達大人だし……。おじさん居てもそのお。着替えとか気使っし……」

「無理！もう部屋満室だつて！諦める！予約時点でほぼ満室だったから。」

「え？ダメよ 優勝したいんでしょ？ゆっくり一人で休まないと体に響くよ！じゃああのホテル自分で違う所予約するよ」

「バカ！お前アメリカで女一人？危ないだろ！ダメ！」

「じゃーお母さんについて来てもらう！」

「だめ！じゃな 5日後迎えくるから用意ちゃんとしてるよ。それまで最後の追い込みあるから会えないかもだけど。わかったな！じゃ」

プープープー……

『……言いたい事だけ言って切っちゃったよ……。どうしよう……。おじさんも一緒とはいえ、同室う？……』

笑は一人焦つて うろたえるのであった。

そして翌日母親に相談した。

しかし母の答えは

「いいじゃないー！。怜勇君と同じ部屋だなんて。母さんも一緒に行きたいわ。怜勇君イケメンになったもんねー。それにあんだ達幼馴染なんだし！あんだこそ何意識してんの？おかしな子ね。昔は裸で一緒に布団で寝てたのに……」

と軽くあしらわれた。

『は？昔裸で……。て。赤ちゃんの時の話じゃん。もう私年頃の女なんですが……。お母さん！あなたのあなたは時間が止まったままですか……。』

? いよいよマスターズに向けて ? (後書き)

次回 アメリカに出発です

21 いよいよマスターズに向けて ? (前書き)

アメリカに出発しました

21 いよいよマスターズに向けて？

『うーん・・・眠れなかった・・・』

笑は、いよいよアメリカに出発するという今日を迎え、昨夜は何度も寝返りをうち目が覚め、眠れずの夜を過ごした・・・。

『何をやってんだか・・・。海外旅行初めてでもないのに・・・。』
重い体をひきづって、洗面所へ向かった。
鏡を見て、更に笑は落ち込んだ。

「はーっ。クマが出来てるよ・・・」

昨夜の怜勇からの電話で、迎えに来るといふ時間があと一時間半に迫っているなか、しゃきしゃき体が動かずダラダラ用意をしている笑に、

「笑！のんびり用意していると怜勇君来ちゃうわよ！」
母親の声がとぶ。

「ふぁーい！お母さん！オレンジジュース入れておいてー」

「はいはい！」

「おはよ！笑！」

「おはよ！お父さん」

「いよいよだな。怜勇くん。おまえ、足手まといにならないようにしっかりしろよ！優勝するってえらく気合入ってるようだな。なのに、なんでお前を連れていくんだ？」

「私だつてわかんないよ！幼稚園の頃の約束だから！つて言った・・・。私だつて気を使うよ・・・。怜勇、変なところ律儀だから・・・。ま、せいぜい邪魔にならないようにだけしますっ」

新聞を読みながら、話す父親に答えながら、笑は母が入れてくれたジューズを口にしていた。

父親にハムエッグをもってきた母が

「ま！笑……。その目」

「うー！。目立つ？」

「まあねえ。ま、化粧でなんとか頑張んなさい……」

そんなこんなで、ダラダラボソボソ用意をし、怜勇が迎えに来てくれるのを待っていた。

プププーッ

「ほら、来たわよ」

「おはようございます。おじさん。おばさん」

「怜勇くん。おはよ！TVの前で観戦してるよ。気合も入って、調子もいいようだから期待できそうだな！有言実行！」

「怜勇君。私もアメリカに行きたかったわ。でもお父さん一人置いていけないし……。がんばってね。お父さんとTVで応援してるわ。」

「えみー！早くなさい！」あら？怜勇君お父さんは？」

「別別に行くので、空港で落ち合う事になってます」

「なんだ。そうか。あいつにも一言言っておきたかったのにな……。じゃ後でメールでもしておくか」

「怜勇ー！。おはよ」

「おはよ。すげー荷物だな……。お前なんでゴルフバッグ？アハハハハ」

「だって……」

「笑らしいよ！まったく」

四人は大爆笑した。そして

「じゃ、行ってきます」

二人は、荷物を怜勇の車に積み込み、手を振って家を後にした。

「どうして おじさんは？荷物は？」

「おいおい。親父と荷物を同じくくりにしてやるなよ！あはは。親父は空港で待ち合わせ！荷物は先にホテルに送ってる」

「ふーん。家も近所と同じところ行くのに別便なんて……。もつたいない！庶民には考えられないわね」

空港についた。

おじさんが手振っている。荷物を持って走って行こうとすると、怜勇がゴルフバッグをしようと引張っている。

「だめよ！怜勇。自分のは自分で持つから。お父さんから言われているの！足手まといになんないって」

「なんも、足手まといになってないじゃん。」

「だめ！持つならここで捨てて行く！」

体をはって抵抗する笑に、とうとう怜勇が折れた。

「はあはあ……。おじさん。おはよございます。」

「おはよ。なんだ？笑ちゃんそのゴルフバッグは？」

「怜勇がどこかで練習するなら、私も一緒に打ちたいなあ。って思っで……。そんな機会ないですかねえ……。」

「アハハハ。そうかそうか。いや。あるんじゃないか。アハハハ。それより、なんで怜勇は持ってやらないんだ？」

「違うよ親父！俺は持つ！って言ったんだ。そしたら……。」

怜勇はおじさんにさっきのやり取りを説明していた。するとおじさんも、「なかなか笑ちゃんらしくていい。」と言い。「この度は、その笑ちゃんらしさですつと頼む。それが笑ちゃんの同行をお願い

した理由だから。怜勇が平常でいれるのは笑ちゃん居てこそ！だから。今の怜勇は平常でいれる事が一番強くなれるんだ！」とこっそり耳元で言われた。

そして笑は、

『よし！そういう事か！私が私らしくいる事が一番いいなら、その任務ひきうけましょう！』

と、心のなかで誓い何故か、怜勇と二人席でおじさんやスタッフの人達と離れている事を不思議に思いながら、空の上の人となった。

その二人きりの空間も、笑は昨夜の睡眠不足がたたり、しばらくすると深い眠りに陥り夢を見ていた。

怜勇と二人の空の旅を楽しく会話している。そして何故か突然怜勇がおでこにKISSをしてきて意識を失ってしまったところで真っ白になった。

怜勇は、ぐっすり眠ってしまった笑に、ため息をつき

『仕方ないな・・・』と頭を自分の肩にのせてやり、頭にチュッとKISSをして自分も目をつぶったのでした・・・。

21 いよいよマスターズに向けて ? (後書き)

せっかく二人席にしてくれたスタッフ達に感謝した怜勇!でも、笑
には伝わらなかったみたいです。次回 アメリカに着いた怜勇と笑

22 どうとうアメリカにやってきました？ (前書き)

マスターズ参加の為にアメリカに着いた怜勇と笑。

22 とうとうアメリカにやってきました？

「おい！笑！着いたぜ。起きろ！」

うーん

やっと着いたあ。伸びをする笑に冷ややかな顔で見ている怜勇が

「お前、よく寝てたな！おかげでこっちは肩が凝ったよ」

「へ？なんで？」

「お前の頭ずつと肩に乗せてたから・・・」ニヤツ

「う！うそ・・・。ほんとに？ごめんなさい・・・。どうしよ・・・

・大事な・・・手」

「いいぜ！部屋一緒だし。夜マッサージしてくれたら・・・」

『ガーン』

『忘れてた・・・部屋一緒だったんだ』

部屋一緒・・・この事で頭がいっぱいで怜勇との会話もおじさんの話も、もちろんホテルへの道のりも

全く記憶にない笑であった。

「ふーっ！着いた」

「さ、荷物を整理して今日はゆっくり過ごすとするか・・・。怜勇！後で少し明日からの予定をスタッフと打ち合わせだけするからな。後は自由だ」

「OK！親父」

『・・・。すごい部屋！扉もいっぱい・・・しかもメゾネットタイプになってるよ・・・』

と入り口でポカンと口を開けたまま立ちすくんでいる笑に

「笑ちゃん？どうかしたかい？」

「え？あ ああ いえ・・・」

とろろたえている笑に

それを見てケラケラ笑っている怜勇が

「笑！部屋はあっち」

と指を刺した。

「あのお。おじさん。部屋はやっぱり一緒ですか？私も・・・」

「うん。すまん。この大部屋しか空いてなかったんだ。ま、小さい頃から常に一緒だし！気にしないだろ？」

『って！お母さんと同じ事言わないでえ。私も怜勇も年頃で・・・一応噂になつたら困る立場なんですが・・・』とため息をついた。

が、ここでどうこう言うわけもいかず、怜勇が指指した部屋へと荷物を運びに行った。

とたん、笑が部屋を飛び出してきた。

怜勇はすでに大爆笑している。こうなる事をすでに予想していたのだろう。

「ちよ。ちよ。ちよつとお。なんで怜勇の荷物があるのぉ？」

「だから、部屋一緒！って言ったじゃん」

「なんで？なんで？こんな扉いっぱいあるのに・・・」
もう、笑い過ぎて怜勇は話せる状態ではない。

「こら怜勇！もうこれぐらいにしておいてやれ！笑ちゃん真剣にうるたえてるじゃないか！」

それでも怜勇は話せない！笑い過ぎて話せなさそうなので、

「笑ちゃんの部屋は本当はこの上。私達は打ち合わせしたり色々バタバタするから下の部屋を使うよ。上にはちゃんと別にトイレも風呂も洗面もちゃんとあるから別の部屋なのと余り変わらないよ。安心したろ？ただ出入り口が一つなだけ」ニッコリ。

この笑顔……。怒れなくなる笑顔は本当に親子だな！と思う笑であつた。

上で荷物を整理している間に、怜勇は明日からの練習等の打ち合わせをスタッフ達としているようだ。

『すごいこの部屋。バルコニーにジャロジー付いてるう』

『よし。怜勇たちまだまだ時間かかりそうだし、入ってみよ』

『はー！ー気持ち良かったあ。こんな部屋に泊まる機会最初で最後だろうから今回はラッキーかな。部屋一緒と言っても上と下別々で感じだし。満喫しよーっ』

ふんふんと鼻歌交じりに着替え終えて洗面から出ると、壁にもたれて怜勇が腕を組み待っていた！

「！」

「遅い！」

「遅い！って何？怜勇なんで居るの？勝手に！」

「ご飯食いに行くぞ」

「ちよつと！答えてよ！レディの部屋に勝手に！」

「バカ！ならカギかけとけよ」

「何よ！打ち合わせしてると思ってたんだもん」

「バカ！俺でよかつたんだぞ！他のスタッフもいる！自分の部屋はカギを必ずかける癖をつける！なんかあつたらどうすんだよ！つく！」

プイと横を向いて怒っている。めずらしく怜勇が怒っている……。なんか勝手に入る怜勇のほうが悪いと思うのだけど、何故か心配してくれてるのを申し訳なく思い

「ごめんなさい」

と誤った。

「うん。行くぞ。腹減ったろ？今日はみんなで決起会だから」

「わかった。ちょっと待ってて。鞆持ってくるから」

笑は、こないだのアメリカ旅行でこつそり買った怜勇とお揃いのネツクレスを今回は持って来ていた。

あれから怜勇はずっと着けていてくれていたが、笑はオルゴールの中にずっと大事にしまっていた。

怜勇はもちろん同じ物の女性用を笑が持っている事をしらない。

『この大事なツアーの間は着けよう。せめて一緒にツアーを戦えるように』と着ける事を解禁してオルゴールより出して持ってきていたのだ。

鞆を取りに寢室へ入った笑は鞆をとり、そして大事なネツクレスを身に着けて服の下に隠した。

「怜勇！行こ！お待たせ」

怜勇の大好きな笑の上等笑顔で言った。

怜勇は、いつも安らぎを与えてくれる笑の笑顔に目を細めて頷いた。

22 とうとうアメリカにやってきました？ (後書き)

次回は決起会の模様とマスターズモードまでのつかの間の二人のアメリカ旅行。そこに愁もやってくる・・・

23 どうとうアメリカにやってきました？ (前書き)

愁との再会

23 とつとつアメリカにやってきました？

「かんぱーい」

『すごい！大広間貸切！・・・』

「笑！乾杯！一緒に来てくれてありがとう」

「うん。こちらこそ！ありがとう。なんか圧倒されちゃうわ・・・

。何も力になれないけど、怜勇が怜勇らしく落ち着けるように私

は一緒にいるから」ニツコリ

「うん さ 食おうぜ！」

笑の笑顔に癒され頷いた。

マルマルモリモリ・・・

と、笑の携帯の着信音が鳴った。

「怜勇 ちょっとごめん」

と、笑が携帯片手に席をたった。

怜勇は少し訝しげな顔をしたけど

「気をつける！ここは日本じゃないから！」

と声をかけて見送ってくれた。

「はい。あー。久しぶり！うん うん いいよ・・・」

と。五分ぐらいしゃべって、携帯を切って席についた。

「ごめん 長くなっちゃった」

「いいけど。遅いからも少しして帰って来なかったら迎えに行くところだったぜ」

と、少し不機嫌そうな顔で答えた。

「ったく！ここはアメリカだぜ！心配なんだよ」と笑に聞こえないだろうと小声で呟いていた。

しかし、ちゃんと笑には聞こえていた。

「怜勇！」ニコニコ

「な　なんだよお。気持ち割りーなあ」

マルマルモリモリ・・・

「はい！うん　OK」

「怜勇　ちよつと下まで行ってくる！」

『何！』

「待て！」

と言った時には笑は扉を開けて出て行ったところだった。

『くそ！あいつ！何回もココはアメリカだ！って言ったのに』

慌てて追いかけたがエレベーターは下に降りて行っている所だった。次に来たエレベーターに慌てて乗って追いかけた。

ロビーに着いたが笑の姿は見えない。エレベーターを振り返ると上に上がってる機があった。

『クソ』

慌ててエレベーターのボタンを押し、来た機に飛び乗った。

走って大広間に行くと、そこにはアメリカ人と談笑してる笑の姿があった。そばには怜勇のお父さんもいた。

「あ！怜勇ー！こつちこつち」

怜勇は頭を抱えなくなつた。行動力のある所と能天気な所それも笑の好きな所ではあるが、神経をすりへる所でもあるのだった。

「ね。ね。怜勇　誰だかわかる？」と二人を指して言う。

「俺の知り合い？アメリカにはいないけど？」

「本当にそう？」

怜勇は二人をじつと見て考えるが、どう見ても記憶がない。ツアーであったプロゴルファーだろうかとも考えたがそれも違うと思つた。

「怜勇　白状なやつだな　お前」

銀髪の男が言つた。

「何？」

「え？その声 愁？」

「バカが！やつとわかったか！」

「なんだ その髪の色は！」

「お前自分のことばっかで人の事TVでも見ねーから、わかんないんだよ」

「そつだぞ怜勇！父さんはすぐわかったぞ愁君だつて。いつもTVで活躍を見てるからな」

「そつだよ。おじさんすぐ しゅうくん！ って声かけてくれたんだぞ」

「もう！二人とも！何を言い合ってるの？楽しみましようよ。せつかく来てくれたのに。あ そうそう怜勇こちらキャラル！ほら前に話したでしょ？」

「あ ども はじめまして・・・ペラペラペーラ」
と英語で話し始めた。

『さすが怜勇・・・ふん。でもキャラルは日本語で話すんだから』
と、思いながら二人を見ていた。

ところがこの会話は英語ばかりの会話で笑は少しふてくされてしまった。しかしそれでめげる笑ではなく、

「キャラル！あっち行こう 美味しい食事に飲み物いっぱいあるよ。行こう」
と腕をひばって行ってしまった。

「怜勇サンキューな」

「ああ」

「今回マジ優勝狙ってたわ俺」

「ああ。だから笑連れてきたんだろ？わかるよ！しっかりやれよ！

俺もお前の優勝直に見たくてきたんだから」

「ああ。今日は楽しもうぜ！お前 宿は？」

「ああ。キャロルの実家がここの近くなんだ！そこで泊めてもらう」
「つて！おまえ……。付き合ってるのか？」

「いいや。俺は気に入ってるが……。相手が超鈍感で……。お前達みたいなもんかな……。」

「なのに、泊めてもらえんのか？」

「アハハ キャロルが俺のチームのチアガだろ。で、おやつさんが俺らのチームの大ファンなのさ！そういう縁で泊めてくれんだつてさ。お前の事も言ってるんだ！おやつさん結構ミィハーで、日本のスターの友達が REO KAI DOU？つて大喜びさ」

「そーかー。お前、キャロルに勝算は？」

「さあ？ ま とにかくはお前だ！ 夢 叶えるよ！そして……。」「ああ！わかつてるさ！今回はほんと勝負だよ」

二人はたくさん思い出話・近況報告・飲み食いをし、怜勇のスタッフに愁を紹介し、結構日本でも有名な愁はあつと言う間に人気者になり皆で決起会を楽しんだ。

笑とキャロルもすっかり皆に溶け込み楽しんでいた。

「おい！キャロル 笑 外に出るぞ！せっかく今日はおじさんのお許しがでんだ。街をプラプラしようぜ！」

「よし。今日ぐらいかもしれないから、愁とキャロルに街を案内してもらおうぜ！」

「わーい！」

キャロルと笑は抱き合って喜んだ。

そう女の子はお買い物大好きなんですもの。

「親父い ちよつと行ってくる！」

「ああ！楽しんできなさい！気は着けるんだぞ。 弱い女の子連れてるんだからな！」

四人はその言葉を背中で聞いていた。

「ね。怜勇。いい子でしょキャロル。」

「うん。話しやすい子だな。愁にお似合いだよ。」

「うんうん。日本語上手なんだよ！怜勇は英語で話してたから、わかんないでしょうけど！」プイ

「は？笑。すねてんの？英語話たいの？」

「別に」

「いいよ。今度教えてやるよ」

「ほんと！」

「わーい」

「あ！笑。くれぐれも言っておくけど、俺は明日からマスターズモードになる。遊びに連れてってやれないと思う！一人で絶対出歩くな！愁とキャロルには笑の事頼むって言っておくけど……。わかつたな。なるべく……。いや！いい」

「うん。一人では出歩かないよ！約束ね」ニッコリ

そんな話をしながら二人で歩いていると、愁とキャロルがショーウインドウを覗いて何か話している。

そして、店の中へと入って行った。

怜勇と笑は追いついて、一緒に覗き込んだ。そこは小さなアクセサリーショップであった。

「わー。かわいい。素敵」

素敵なおアンティークな指輪があった。

「笑、指にはめてみたら？」

「うん。わー！ぴったり！」

「買ってやろうか？お土産に……」

「え？いいよ！指輪は好きな女の子に贈るもんだよ！怜勇。いくら幼馴染でも指輪はダメだよ！」

と、言いながら愁とキャロルの元へと寄って行った。

「ねね。キャロル何買ったの？」

「ブレスレット ヨ。シユウ ガ カツテクレマシタ」

「へー。見せて見せて」

「コレデス。ドーデスカ？」

「わ！かわいい。キャロル似合ってるよ」ニコニコ顔で拍手する笑。と言いながら三人は店を出た。

そんな笑を見てため息をつく怜勇。

笑が見ていた指輪をじつと見つめるながら……。

そして、怜勇は三人に遅れて店を出た。

「もう！怜勇遅いよ。何してたの？なんか気に入ったのあったの？男物もあつたもんね」

と言いながら四人は歩き出した。

四人は買い物や食べ歩きうを堪能して、アメリカの夜のひと時を楽しんだ。

そして

「じゃねキャロル 愁！またね。退屈になったら連絡するう」

「愁！またな！お互い頑張ろうぜ！」

「おう！笑またな！怜勇はとにかく今は目の前の事だけ考えろ！応援してっから！」

「エミ レオ マタアイマシヨー バイバイ」

23 どうどうアメリカにやってきました？ (後書き)

いよいよツアー開始です

24 決戦！マスターズ

前日祭（前書き）

前日祭を楽しむ
む怜勇と快・爽の兄弟と家族

24 決戦！マスターズ

前日祭

あれからの数日、怜勇はコースラウンド練習を繰り返した。日々感触を得ているようで、気持ちも体調も絶好調であった。

「笑 行くぞ ゴルフバック用意しろ！お前せっかく持ってきたる？」

と、夜には二人の時間を怜勇は作ってくれ、打ちっぱなし練習場には私も一緒に行って隣で練習した。

怜勇の夜の打ちっぱなしは、数打は真剣に打つのだが、後は楽しく笑と談笑しながらのリラックス練習になる。笑は

『こんなんでいいのだろうか？優勝狙うマスターズに来てるに……』

と、思うのだがその度に怜勇のお父さんの言葉を思い出していた。

『後残り、大事なものは怜勇がいかにか平常心でいれるか！と言う事だと耳元だんて囁かれた事を！』

帰りの車で笑が

「いよいよ明日、前日祭だね？爽快達くるんでしょ？おばさんも。」

「ああ。もう来てるかもな」

「ほんと？」

「たぶん時間的には……」

「ねえ。怜勇 明日から楽しんでね。もちろん優勝！楽しみにしてるけど、何より怜勇に思う存分楽しんで欲しい」ニッコリ

『この笑顔！ほんと堪ないぜ』

「OK！まかせろ！」

チンッ

エレベーターが宿泊階に着いた。

ピンポン

「はい！」

『爽の声だ』

笑はニコリと微笑んだ。

「サーヤ。俺！着いてたんだな」

ガチャリ

「怜勇ニイ！お帰りー。笑ねーも」

「爽あ」

笑が爽を抱きしめた。

「ココは？」

「パパとゴルフの練習してるよ。明日の為に」

「そつかあ。じゃサーヤは俺とするか？」

「うん」

『ほんと、爽は怜勇にい！怜勇にい！ね』うふふ

笑は、怜勇の母親と挨拶を交わし、取り合えず先にシャワーをする旨を伝え、上の階へとあがって行った。汗をさっと流す程度にさつさと入り下の階に下り、みんなで談笑した。

明日の為にそれぞれ早めに床についた。

爽は私の部屋を訪れ

「エミねえ 一緒に寝よ！」

「いいよー」

二人は一つのベッドで並んで寝た。

朝爽が

「これ！怜勇ニイのと一緒だね。大きさ違うけど・・・」

『ドキッ！しくったあ。はずしておくべきだった・・・』

「爽は目ざといね・・・。怜勇にはいつか時期がくればちゃんと言
うから、それまでは爽と笑だけの秘密ね。もちろんココやおじさん
おばさんにも！」

と、ウインクしてみせた。すると、爽は笑との二人だけの秘密がや

けに嬉しかったみたいで、ニコニコと

「うん！」

と大きく返事をした。

朝から大忙し！特におばさんは、

「ココ サヤ ちゃんと持った？あれは？これは？」

と行ったり来たりバタバタ走り回っています。それをソファーに座りのんびりおじさんが見えています。

どうも怜勇は先に行っみたいですよ。

「もしもし、怜勇？もうついた？うん。私も今から行くのかな・・・」

「

ダメだ！親父達と一緒に来い！一人行動は禁止！って言ったただろ？」

と、大声で携帯で怒鳴られた・・・。

「わー綺麗！TVで見るのとはやっぱり全然違うのね」

と思わず声に出して言ってしまった。

「おーい。ココロ サーヤこつちだ。練習するぞ」

「はい」

二人はバッグを抱え走って行った。

私は、デジカメを用意しカメラマンを引き受けた。今日はカメラ撮影が許されている。

ファインダーを通じて三人の楽しそうな笑顔をみてるこちらまで幸せな気分になる。おじさんおばさんもニコニコしている。

怜勇はいい表情でプレーしている。緊張はしていないようだ・・・。

『いよいよ明日から！』

笑にも気合がはいる！力強くシャッターを押した。

24 決戦！マスターズ

前日祭（後書き）

次回いよいよ本戦です。

25 決戦マスターズ 開始(前書き)

いよいよ架橋です。マスターズも始まりました。

25 決戦マスターズ 開始

快晴！すばらしい大会日和となった。

怜勇は朝早く出掛けて行った。

笑はまだ夢の中でした。

携帯メールに怜勇からのメッセージがあった。

「笑！ここ数週間ありがとな。決めるぜ俺！どんな事があっても逃げずに見てるよ！」

「覚悟しとけ！」

とあった。笑はそれを大事に保存しバッグに入れていた。

「りーん」

「愁！キャロル！」

大きな声で叫び手を振る笑に三人はそれぞれの方向から歩いてこっちへやって来た。

三人はそれぞれの久しぶりの対面を喜んでいた。

『うん？あれは藤見君？』

「ちよつと凜！藤見君と一緒に来たの？」

「あ！えと！うん・・・」

「なんでこっち呼んであげないの？一人で可愛そうじゃない！」藤見くーん！こっちこっち」

「笑・・・あのお。」

「うふふ。また後でゆっくり聞いわ！今日からの四日間は私も忙しいの！怜勇と一緒に戦うって決めてるから」

「何？まさかキャディするの？」

「は？まさか！気持ちで戦うのよ！だから他の会話は禁止なの！私の中で」
笑はきつぱりまっすぐ怜勇を見つめて強く言い切った。
凜は、そんな笑をみるのはいつ振りくらいだろ・・・と思うのであった。

怜勇は予選一日目はイングランドの同世代のマッキー・デイとアメリカの新鋭トム・ハートだ。三人は歳も近いとあってよく話題で比べる対象となっている。

さいよいよ

まずは、デイから次に怜勇。

笑は胸に閉まつてあるネックレスを握り目を瞑って、怜勇がアドレスに入るのを待っていた。

さ、いよいよ怜勇だ。

「笑ねえ・・・」

不安そうな顔で爽が見上げている。

「爽。怜勇だもん。大丈夫よ」ニッコリ

怜勇がスタンドに挨拶をした。そしてあの時のように笑達がいる方見て、親指を立てて

「グッジョブ」と呟いた。

笑は手が真っ赤になるぐらいの拍手で称えた。

1ホール目は揃ってパーで終えた。続く2ホール目怜勇のティーショットが右にそれた・・・。

怜勇の顔つきが今までにないくらい引き締まっている。

愁が

「いい顔してんな。あいつ。ほんと今年はやるかもな・・・」
と、ボソと呟いた。

愁は長年怜勇を見てきている。きつと愁には何かがわかるんだ。笑

はそう思いながら愁の横顔を見上げた。

「あいつの今の顔、高校の時お前と出た全国大会の時の顔と一緒にだぜ！お前と思い出作るんだ！って出た

対抗戦と同じ顔だ！これが四日間続けば、マジなにか起こるぜ！ワクワクするぜ……」

愁はそう呟いてキャロルの肩を抱き歩いていった。

爽と凜とココ私達もティーグランドを後にした。

最終ホール終わってこの日は、2アンダー13位とまあまああの一トを切った

25 決戦マスターズ 開始（後書き）

予選突破なるか・・・
怜勇

26 マスターズ 決勝ラウンドへ？（前書き）

予選通過なるか怜勇！笑の応援は届くのか・・・

26 マスターズ 決勝ラウンドへ？

予選1日目を終え、HOTELに戻った怜勇軍団！

怜勇は緊張感が顔に出ている。

「笑！」

怜勇は上階にいるであろう笑を呼んだ。

・・・

返事がない

「！」

怜勇は慌てて階段を駆け上がって部屋ノブを回した。

ガチャ

ドアは開いた。

「！ え み・・・」

スースー うーん

笑は無邪気な顔してベッドに丸まってぐっすり寝ていた。

手には何かネックレスらしきものを握っているのだろうか、チエー
ンの部分が手の握られる部分からはみ出していた。

怜勇は起こさないようにそっと部屋に足を踏み入れ、少しずつ笑に
近かずきかけて、ふと飲みかけのジュースと食べかけの袋の開いた
ポテトチップスの置いてあるテーブルに目をやった。

『まったく・・・これだけ寝る前に食べてよくまあ、あの体系を
維持してるもんだな・・・』

と思っ
て見てみると、なにやらかわいい手帳を発見した。

怜勇はテーブルの方に近づいた。

手帳には、仕事などでは絶対に使わない笑文字で書かれていた。

笑は、プライベートで書く手紙や日記等には、解読するには多少時間のかかるまるで暗号のような文字―（それを笑文字という）を使って書くことを幼馴染や親友と呼ばれる者達は知っていて、もちろん簡単に解読もできる。

怜勇は真つ赤なのハート型の手帳を手にとつて見た。

そこにはt u i t t aかと突っ込みたくなるように140文字程度でつぶやきメモが書いてあった。

怜勇―！ナイス！かっこいい！13位ばんざい！？明日も応援するぞ！怜勇と一緒に戦うのだ！おやすみ b y - E M I

と書かれていた。

それを見た怜勇は、今までの硬く張つてあつた緊張の糸をふーっつと解放すように顔に優しい笑みを浮かべ、また笑の方へ近寄つていった。

笑のすぐそばまで来た怜勇は、ベッドのそばでひざを突いてしゃがみ込み、めくれている掛布団を肩のところまで戻してやり髪をそつと撫ぜた。

『笑と来て良かったよ。頑張る気持ちは大事だけど、俺は気負い過ぎてたようだな。やっぱり笑効果は絶大だよ。ありがと。明日も一緒に戦つてくれんだよな・・・』

怜勇はふつと笑つて笑の部屋を後にした。

ボタン

『うん？ 怜勇？』

夢か現実か？

笑は薄暗い部屋の中で怜勇の背中を見た気がした。しかし、すぐに深い眠りに落ちていった。

予選ラウンド2日目

やはり、目覚めた笑は一階へ降りて苦笑いをした。

『今日こそ怜勇と会って見送ろうと思っていたのに・・・今日も寝坊しちゃった・・・』

「あら、おはよ笑ちゃん。」

「おはようございます。怜勇行っただんですね？おばさんは朝会ったんですか？」

「ええ。いい顔で出掛けて行っただわよ」

「そうですね・・・」

「後一時間半ぐらいしたら出ようと思うんだけど、笑ちゃんも一緒に行くわよね？」

「えと、私もう出ます。」

「じゃ、行って来まーす」

「ちよ、ちよつと笑ちゃん・・・まだ早いわ　よ　って。相変わらず・・・ね？」

爽快達も目を擦りながら起きてきて、快が

「今出て行っただのは　笑ねえ？」

「そ。早く行くんだって。早すぎるのにね？ささ、あなた達は顔を洗ってご飯にしましょ」

爽ははつきりしない頭でじっと笑の出た行っただ扉を見つめていた。

笑はゴルフ場につた笑は、キョロキョロと怜勇の姿を探していた。

すると、なにやら年頃が同じような青年が笑に声をかけてきた

「ハイ！ユア　キョートガール」

と肩に手をかけてきた。

『え？ええ？何 何』

「えと、あの・・・困ります・・・って どう言ったらいいの・・・」

なぜか、その青年は笑の肩を抱いたまま歩き出した。笑は、抵抗をして見せるも全くその事に気づかず青年は、相変わらず一人で一方的にしゃべり続けている。

その状況を遠くから怜勇が見ていた。

自分がどうすることも出来ず、イライラが募ってきた。ずっと視線はそれを追っている。

『くそ。笑 何やってんだよ！』

いよいよ 怜勇がスタート地点にたった。

カキーン！

「あーあーあー あ」

「オウノー」

などさまざまの声があがった。大きく右にそれたのだ。

「クツ！」

怜勇がクラブで地面をたたきかけたが、そこは何とか踏みとどまった。

『えみ！どこだ！』

怜勇は笑の事で冷静さをなくしている。

「ねえ。おかあさん。怜勇ニイどうしたの？なんか変だよお」

「そうねえ。サーヤ。笑ちゃんは見なかった？」

「うん。笑も探してるんだけど・・・」

そんな会話をしていると、

「おはようございます。怜勇どうしたんすかね？」

「あら、愁くん」

と後ろを振り向いた。

「笑の姿も見えないんだけど？」

「そうなのよ！朝早く一人で出掛けて行って、ゴルフ場につきました。ってメールが来たからココにはいるんだらうけど・・・」

「そうすか・・・」

と行って、その場を離れた。

「笑！どこだ？」

「キャロル！俺ちよつと笑探しに行くわ！あいつ、結構危なっかしいから・・・」

「OK！シユウ。ワタシ レオママサン ト イマス キヲ ツケテ！ メールシテネ」

「シユウハ ヤハリ エミ ノ コトニナルト ヒツシデス・・・ネ」

フフフと笑って見送った。

「笑！どこにいるんだ！」

人の波に逆らって、人混みを掻き分けて、彼方此方と探しまわった。もうすでに汗だくだ！

帽子とサングラスをとって人々に聞きまくって探したいが、愁もNBLで活躍しているだけにここで目立って騒ぎを越したくない事は充分心得ている。

一時間くらいたったところだろうか、フードブースに楽しげに手振りそぶりで話すアメリカ人とソワソワしている日本人が座っている。

「！笑だ！何やってんだ！」

怒りにわななきながら、ズカズカとその場所に歩いて行った

「笑！何してんの？」

愁の冷ややかな問いにビクツと笑が振り向いた

「しゅう・・・」

愁は、そばにいる青年に

「悪いな！俺の連れだから！」

とそつなく英語で話しサングラスを外した。

そしてニツコリと青年に微笑んでその場を後にした。

後に残された青年はポカンと口を開けたままその場に立ち竦んで二人を見送った形になった。

腕をつかまれドンドン引つ張られて行く笑は、愁の放つ冷気に気づいて何も声を掛ける事が出来ず、必死で愁の足にこけそうになりながら、ついて行っていた。すると、急に立ち止まった愁の背中にぶつかる形で、笑も止まった。

「笑！お前何やってんの？なんで怜勇のから離れてんの？」

「・・・」

「なんで？なんで？しつかり怜勇のそばにいないんだ？何のために誰の為に俺・・・俺は・・・」

「愁？」

「・・・」

「探してたんだ。怜勇の事。早く行つて練習中から見えていようつて。そしたらさっきのあの人に、なんか英語で話しかけられて・・・それで・・・わかんなくて・・・」

「はー！ー！。お前・・・。」

「ごめんなさい・・・。」

「まあいい。早く怜勇の応援行つてやれ！笑、怜勇と一緒に戦うんだろ？」

とやさしく笑に言った。

すると、笑は満面の笑で

「うん！」

と元気よく答えて、二人は急いで怜勇の元に駆けつけた。

26 マスターズ 決勝ラウンドへ？（後書き）

怜勇！予選通過危うし！急げ笑！

27 マスターズ 決勝ラウンドへ？（前書き）

怜勇に不運な雲行きが・・・
原因は？

27 マスターズ 決勝ラウンドへ？

ハアハアハアハア・・・

『もうこんなとこまで進んでるんだ・・・』
スコアボードを見て息が詰まった・・・。

思わず手を引かれてここまで来た愁はまだ手を離さないでいてくれる。

その手を思わず、ギュツと握ってしまった。愁も力強く握り返してきた。愁を見上げると愁がこっちを見ていた。

愁の目が力強く

『怜勇をみててやれ！怜勇のそばで！早く怜勇がお前に気づくところへ行け！』

つて言ってくれている。

笑は大きく頷いて、人垣を押しつけ前に進んだ

『怜勇！』

笑は胸元の怜勇とお揃いのディオールネックレスを力強く握った。第三打をなんとかグリーンに乗せた怜勇が笑の顔を横切った。

笑は、怜勇と叫んだが、周りの歓声にかき消されてしまった。

しかし、怜勇には笑の声が聞こえた。

さっと横を見ると不安そうに見つめている笑がいた。

『えみ・・・』

その後方に愁が大きく頷き親指をたてて笑っていた。

『ふっ！わかつよ！愁！サンキュー』

「笑ちゃん？」

「笑！」

「オー エミ ドコ イマシタカ」

怜勇のお母さんと凜とキャロルが声を掛けてきた

エミはニツコリ微笑むだけでじつと怜勇を見ていた。

怜勇はすぐさまグリーンの方を向き険しい表情でスタスタ歩いていった。

長いバーデイトライが残っている。

ここからバーディーラッシュで挽回なるか・・・

『怜勇がんばって！』

大きく深呼吸して怜勇と呼吸を合わせた・・・

コロソ

ワーツ ワーツ ピュー ピュー！

と大拍手が怜勇をたたえた。

そこから、怜勇はチャージを掛け、スタート時と同じ13位タイまで戻し、その日を終えた。

「笑ちゃん帰るわよ」

「いえ。あの怜勇待っててもいいですか？」

「ま！いいけど怜勇きつとまた練習して帰ると思うから、だいぶ待たないとダメだと思っけど？」

「はい。いいんです」

「わかったわ。じゃあ気をつけてね」

「ばいばい！笑ネエ！後でねー」

「爽快！バイバイ」

暖かいココアを飲みながら縁石に座ってまっついていると、怜勇を筆頭におじさんやスタッフの人達がやって来た。いち早く笑がそこに座っているのに気付いた怜勇は、スタッフと別れて笑のそばにやってきた。

「何やってんの？」

「・・・怜勇・・・」

ポロリ一粒涙がこぼれた

「怜勇 ごめん・・・一緒に戦いたかったのに・・・だから早くHOTEL出たのに・・・」

ポロリまた涙がこぼれた

「笑 泣くな・・・もういいから」

怜勇はやさしく腕を差し出した。笑は顔を上げて怜勇を見つめた。やさしい笑顔で笑が怜勇の手を握るのを待っていた。笑は怜勇の手を借りて立ち上がった。

もう人気のないゴルフ場。スタッフ達は先に移動バスでHOTELに戻っている。怜勇は笑の手を離さず歩き出した。

小さな頃から好きだった怜勇の手。でもいつからか手を繋ぐ事もなくなつた大きな暖かい手。今日はしっかり繋がれている。

無言でゆっくりした足取りで怜勇に手を引かれながら後をついていく。

そして立ち止まり怜勇は笑に言った

「明日からの決勝ラウンドはしっかり俺だけ見てる！いいな？」

「うん」

「俺！決めるから」

そう言つて怜勇はタクシーを呼び止めた

27 マスターズ 決勝ラウンドへ？（後書き）

いよいよ決勝ラウンド！

決めてやる宣言の怜勇・・・

さてさて 結末は？

28 マスターズ 夢を叶えて・・・(前書き)

夢へ向かって大躍進

28 マスターズ 夢を叶えて・・・

決勝ラウンドへとコマを進めた怜勇。

日本勢は怜勇のみが進んだ。ムービング Saturday

「おはよう」

今日は笑は早起きして、怜勇に朝の挨拶が出来た。

「怜勇！がんばって！いつてらっしゃい」

「うん。ありがと。毎回そうやって見送ってもらえるよう がんばるよ！」

怜勇は何か意味深な言葉を含み笑いで言った。

笑は『？』

思考がついていかず、だまって背中が見えなくなるまで見送った。

そして急いで用意をしゴルフ場へと急いだ。

『うわー。すごい人お。なんだか興奮しちゃう』

と、一番ホールへと向かう少し小高くなった所で周りを見渡し笑は一人ごちた。

そこに、愁&キャロル・凜&藤見君が揃ってやってきた。

「よ！いよいよだな」

とポンと愁が肩をたたいた。

凜も同じようにニッコリ笑って肩を叩いて先に歩いていった。

笑も大きく息を吸って皆を追いかけた。

今日は快晴で風もちょうど気持ちいいくらいの風が爽やかに吹いている。

爽快もおばさんもすでに来ていた。

いよいよ怜勇達の組がやって来た。

怜勇の顔が輝いている。

「俺の夢はマスターズで優勝すること！日本人初の優勝者となること！」

23歳の今年。怜勇は

「今年に夢を叶える！」

と宣言した。今のところ確実にその宣言に近づいている。

怜勇がギャラリーに素敵な笑顔で挨拶をした。日本人にしては背も高い怜勇は、アメリカでもそこそこの人気選手となっている。今回の大会は各新聞紙面にもJapanese boy REO という騒がれ注目されていた。

スパーン！

「おー NICE SHOT！」

大拍手。笑はひそかにお揃いのディオールのネックレスを握り見ている。

バーディを重ねて、スコアをグングン伸ばしている。

『すごい！怜勇！ほんとーに夢叶うかもね。がんばって』

途中すこし乱れて、スコアを落としかけたけど、歯を食いしばり、集中力を絶やさず持ち直した。

怜勇はいつの間にかこんな精神力をつけたんだろ . . .

笑は怜勇を尊敬していた。幼馴染の愁も怜勇の成長に度肝を抜かれた。

『あいつ！すげーな。いつの間にかあんな強くなったんだ。俺もうかうかしてらんねーな . . . ふふふ』

キャロルの肩を抱く手に力が入った。

怜勇はこの日最終日、最終組で回ることが決まった。

凜と抱き合っで喜んでる笑を怜勇はコースを上げる時見つけて、
じつと笑を見て

『笑！ありがと。お前の応援が俺に勇気と力をくれる。明日も頼むよ！そして・・・その時は・・・』

怜勇はスタッフに声を掛けられハウスの中へと入って行った。

28 マスターズ 夢を叶えて・・・（後書き）

いよいよ次は最終話
怜勇は？笑は？

29 マスターズ 夢が叶うとき・・・(前書き)

とうとう夢叶う。ほんとの夢がわかるとき。

29 マスターズ 夢が叶うとき・・・

最終日。怜勇は最終組でプレーをする。

朝、怜勇は笑に言った。

「いよいよ。この日が来た。緊張するよ！最終組でプレー出来るなんて夢みたいだ。」

「うん。よかった。夢叶えてね。怜勇！ずっと見てるよ」

「・・・笑・・・」

怜勇は正面で話していた笑を抱きしめた。

「笑。すこしだけ・・・すこしだけ。このままで。俺に力をくれ！」

笑は、ドキツとして怜勇から離れようとしたが、いつも自信満々で強い怜勇の体がいっになく、冷たくて心なしか小さく震えているのに気がついた。笑は

『少しだけ少しだけこのままでいよう』

と思ひ怜勇に体を預けた。すると怜勇の体は震えがとまり、体に温かさが戻った。

すると怜勇が、すうつと体を離し

「ありがと！じゃ行くわ」

と、ニツコリ微笑んでHOTELの部屋を出て行った。

笑はその閉じたドアをいつまでも見ていた。すると笑の手に小さな暖かい手が繋がれてきた。爽の手だった。二人は無言で微笑みあいそのまましばらく手を繋いでいた。

笑は、今日も自分しかお揃いなのを知らないディオールのネックレスを胸につけ、マスターズカラーのグリーンに合わせて白地に爽やかな若草色の小花柄の散らしてあるワンピースを着込んだ。

爽快達もおばさんの手作りのグリーンのオーバーオールとミニスカ

をはいていた。

「うわー。爽快！かわいい！よく似合ってるよ」

二人はグリーンジャケットと同じ色の服に大喜びだ。

怜勇のお母さんもそんな二人を目を細めて見ていた。

コースに着くと笑と爽快は地元のTVカメラにインタビュー付で撮影された。

「ミスターレオの弟妹ココロ サヤカと幼馴染のエミー。マスターズグリーンの服がキュートな弟妹とそのグリーンに映える小花柄のワンピースが素敵な三人！」

と紹介された。爽快達はTVに映った事でご機嫌だ。笑は久しぶりのTVカメラに少し緊張した。

そんなこんなですごしていると、最終組が1番ホールにやってきた。

怜勇は笑たちを探して見つめていた。爽快達は手を振っている。笑はやさしく怜勇の大好きな笑顔を振りまいた。怜勇は帽子のつばをつかみ軽く会釈をした。

いよいよ優勝へむけて最後の日の戦いが始まった。

息を呑む戦いが続いている。

前半ホール最後の9ホール目。怜勇はピンチを迎えた。よくてボギー。最悪ダブルボギーだ。

怜勇はなんとかボギーで抑えた。

ここでトップと二打差。

後半ホールで出しの10番ホール。先ほどのミスを取り戻すバーデイ奪取。

1打差！それからなかなかバーデイがとれない。チャンスにつけるもカップにけられるシーンが多い。

我慢のゴルフだ。怜勇の顔に焦りが見えてきた……。

残り2ホール。1打差で2位の怜勇。

笑は次のホールへ向かう途中思い切つて怜勇に声を掛けた。

「れーおー。すまいーるうー！笑つてえ！」あいす
大きな声で怜勇に届けとばかりに叫んだ。

怜勇が振り返つた。

笑と怜勇の目があつた。

二人は二人だけがわかる空気になつた事に気付いた。

二人は微笑みあつた。怜勇はうなづいて前を向いた。

17番ホールバーディチャンス。今度はナイスイン。1位タイ並んだ。勝負は18番ホールへと・・・。

笑は見ていられなかつた。胸元のネックレスをにぎり口を硬く結んで俯いていた。

すると愁がそばに来て

「しっかり目を開けて見ていてやれ！笑が見ないでどうする？な？」とポンポンと頭をたたいた。

「わかつた・・・」

笑はすっかり何があつても見る事をちかつた。

ナイスショットとナイスアプローチでグリーン上まできた。トップの二人はお互いバーディチャンス。しかし二人とも入らず。難しい距離の残つた怜勇のパーセーブパット。入つた。怜勇より簡単なパーパットを残している相手。誰もがプレーオフに入るだろうと思つていた。

が、パーパットを外した・・・。

その瞬間、ワーリーーとギャラリーが沸いた。

笑は、声にならず涙が流れた。怜勇が優勝したのだ。怜勇の夢が叶つたのだ。

怜勇はキャディーと抱き合っている。近くに怜勇の家族が寄つて行った。怜勇は爽快達を抱き上げ母親と抱き合っていた。

笑はとめどなく流れる涙をぬぐうことなく拍手を続けている。

日本人初のマスターズチャンピオンの誕生です！とアナウンスされている。インタビューがされている。

流暢な英語で受け答えする怜勇。すると突然マイクを借りて怜勇が日本語で

「笑！」

と言いながらとっくに笑の場所を見つけている怜勇が笑の方へ歩いてくる。そして笑を抱きしめた。

いつせいにカメラのシャッターがきられた。そして

「笑！俺の夢がひとつ叶ったよ。でもまだもうひとつ叶えないと優勝した事にならないんだ……」

「えみ。ずっと好きだった。マスターズ優勝できたら言おうと思っていた。俺のもうひとつの夢なんだ。

結婚しようー えみ……」

笑は頭が真っ白になった。

声にならなかつた。

涙が止まらなかつた。

ギャラリーの大歓声が聞こえなかつた。

笑は涙でグシャグシャの顔で怜勇を見上げ頷いた。

夕焼けに映える18番グリーンで行なわれた怜勇の優勝セレモニーとプロポーズは全世界に放送され、各国のマスターズを一緒に戦ったゴルフアー達の祝福を受ける事となった。

29 マスターズ 夢が叶うとき・・・（後書き）

長い間お付き合いありがとうございました。なんとか初投稿初完結を迎えることができました。素人文にも係わらずお気に入り登録してくださった方。評価してくださった方本当にありがとうございました。励みになりました。今後番外編でキャラル&愁や結婚に向かう怜勇と笑の話など短編でも書ければと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3470t/>

夢を叶えて・・・きつといつか

2011年9月20日00時35分発行